
南の海を愛する姉妹の四重奏

まるは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南の海を愛する姉妹の四重奏

【Nコード】

N2062W

【作者名】

まるは

【あらすじ】

次期、女公爵になるため、スパルタ教育で育てられた繊細な姉と、その容姿や性質から、母にほったらかされて育てられた元気な妹が、初めて故郷のロアールを出て王都へ行く。

そこで二人を待っていたものは、良い男と——悪い男。

南へ

「姉さん、見て！」

馬車の硝子窓に、張り付くようにして外を見ていたウィニーが、感嘆の声をあげた。

振りかえる彼女の顔は、素晴らしいものを見た黒い瞳を大きく見開いて、こう言うのだ。

「雪が終わってる！　ここから春なの！？」

その言葉は、余りに純粹過ぎて、レイシエスを笑わせる。

「やあね、ウィニー。いきなり季節は変わったりしないわ、雪のない南側へ出ただけよ」

腰を浮かせたままの彼女を席へと戻し、落ち着かせようとするものの、やはりウィニーは、そわそわして窓の外を何度も何度も見ている。

珍しくてしょうがないのだ。

少し寄り目の愛嬌のある瞳が、めまぐるしく動いている。

ウィニーは、15歳。

元気のいい——言葉を変えるならば、跳ねやすい——輝く赤毛を何とかなだめてひっ詰めているが、本人の元気の良さはとても隠せ

るものではない。

美人と呼ぶには少し難しいが、寄り目気味の子犬のような黒い瞳と明るい性格も相まって、愛嬌のある顔をしている。

オリーブグリーンの古風なレースをあしらったドレスは、そんなウィニーには少しおとなしい印象だが、祖母からもらった物なのでとても気に入っているようだ。

レイシエスは、16歳。

ミルクティーのようななめらかで艶やかな淡い褐色の髪に、雪よりも白い肌、氷のような透き通る青い瞳。

気合を入れて作られた最新のドレスは、見ているだけで寒くなるような青。

母に、家の歴史の中で、一番美しい公爵として名を残すでしょうと言われた、ラットオージェン公爵家の長女にして、跡取り娘である。

そして、このまったく真反対の姿をしている二人は——姉妹だった。

彼女らの父の領地であるロアール（北西）地方は、雪はうんざりするほど見られるが、夏はあつという間に去ってしまう。

そのため、農業が出来るのは南部の地域だけ。

代わりに、良質な針葉樹の木材と、鉄鉱石を始めとする鉱脈に恵

まれ、それら売って穀物などの農産物をよそから買うことで、ロアールの地は成り立っていた。

そんなラットオージェン公爵家は、エージェルブ諸公国の一員である。

5人の公爵の領地と、一人の王の直轄地を合わせ、そう呼ばれている。

彼らの王は、マイア・ロシスト・エージェルブ（大いなる拳の王）という名で呼ばれている。

個人の名前はあがるが、王冠を戴いたその日から、みなにそう呼ばれるのだ。

現在、8世。

すなわち8代前に、5人の領主を支配下に置き、王の名の元に彼らに公爵の地位を与え、この国を興したのである。

それまで、各領主はそれぞれ小競り合いを続け、境界線の変化を多少なりとつけていたという。

彼らの中で、ロアール（北西）だけは、特殊な土地だった。

大きな大陸の東の端。

この国は、その大陸の一番北側から細い回廊のようにくびれ、そこから南西へ大きな拳を描くような形で存在している。

だからこそ、『大いなる拳の王』と呼ばれているのだ。

すなわち、この国と大陸をつなぐ場所は、ロアールしかない。

昔から、大陸の敵はこの回廊を通って、ロアールを侵攻しようとしていたのだ。

現在では、拳側はみな平和な関係を維持できているからいいものの、彼女らの先祖は大陸と拳の両側から、圧力を受けていた。

そのため、軍は堅牢な防御を得意としている。

今もなお、大陸側の防衛にその力は受け継がれていた。

地形と気候を存分に利用し、ここ二十年、一切の侵攻を許していない。

そんな危険な領地を、レイシエスはじき継がねばならなかった。

父は、現在病床に伏せている。

優秀な側近たちのおかげで、領主としての仕事は、何とか出来ているものの、とても拳の中央に位置する王都まで行くことは出来ない。

そこで、レイシエスが父の代理として向かうことになったのだ。

二年に一度、冬の終わりに行われる謁見会に参加するために。

王の威光に陰りが無いことを示威するための集まりではあるが、

参加拒否は許されない。

もしも、やむを得ず公爵が出席出来ない場合は、限りなく血の近い者の代理を立てることを許されている。

この場合、それがレイシエスということになるのだ。

16歳で、王を始め他の公爵たちと渡りあわねばならない。

代理の話聞いた時、それはもうレイシエスは憂鬱になった。

彼女は、公爵を継ぐための勉強や稽古は、子どもの頃から山ほどしてきた。

自分には、それ以外の未来などないことも分かっている。

しかし、やはりまだたった16年しか生きていないのだ。

海千山千の相手を前に、うまく渡り合える度胸も自信もありはない。

それどころか、失敗してロアールに届くほどの恥をかいてしまっているのではないか——そんな不安が重くのしかかる。

もし、ロアールまで届くようなことがあれば。

足元の視線を落としてため息をつくレイシエスは、ゆっくり憂鬱に浸ることは出来なかった。

視線と靴の間に、ウィニーの顔が割り込んできたからだ。

「大丈夫よ、姉さん！」

妹は、おどけて笑う。

レイシエスの心配や不安を、彼女は知っている。

だから、いつもこうして元気づけようとしてくれるのだ。

「何か失敗したら、につこり笑って『ごめんあそばせ』と言っの。
姉さんの美貌で、きつと何でも許されるわ」

それに。

レイシエスが顔を上げると、ウィニーも顔の位置を戻しながらこ
う続けるのだ。

「他の公爵様たちが姉さんに意地悪をしても、フラ（南）の公爵様
だけは、絶対に姉さんの味方だから！」

ロアアールの夏の太陽よりも明るく、妹は自信たっぷりに笑った
のだった。

フラとの絆

ロアアール（北西）のラットオージエン。

ロア（北）のファークロア。

アール（西）のクレイアルス。

ニール（東）のチェットセン

そして、フラ（南）のタータイト。

これが、諸公国の5公爵とその地域だ。

ロアアール以外は、全てイスト（中央）の王の直轄領と接している。

そのため、レイシエスたちはロア（北）かアール（西）のどちらかの土地を通らなければ、イストに行くことは出来ない。

よほどのことがない限り、ロアを通過するのが習わしだ。

ロアとは古い付き合いで、木材や鉱石を購入してくれるお得意様でもある。

牧畜が盛んで、良い家具職人や、鍛冶職人が揃っていることでも有名な地だった。

アールは、優良で広大な農地を持っているため、ロアアールの泣

き所である食料が豊富だ。

多くの食料を買う相手なので、ロアとは逆の意味でお得意様なのだが、食料という命に関わるものを取りしているため、時折衝突することもある。

食料を自給出来ないということは、他の公爵にロアアールの命をおさえられているようなものなのだ。

逆に、土地を接していない領地を持つ相手とは、利害がぶつかることが少ないため、穏やかな付き合いが可能だ。

そんな中、フラ（南）のタータイト公爵家だけは、レイシエスたちにとっては特別な国だった。

一年中、太陽が降り注ぐという、ロアアールからしたら夢のような国。

王家の多数が、明るい赤の髪と褐色の肌を持つ、最後までイストの王の統一を苦しめた武闘派の多い国。

そう——彼らの髪は、赤いのだ。

妹のウィニーには、いや、レイシエス自身にも、間違いなくフラ（南）の血が入っていた。

父の母、すなわち祖母は、フラ（南）の公爵家から嫁いできたのである。

その髪の色は、父には遺伝しなかったが、とびこえてウィニーに

受け継がれた。

ロアアールにしながら、フラのことを思わずにはいられないのは、妹のこの鮮やかな赤毛のおかげだろう。

彼女の衣装の多くは、祖母から譲り受けたもの。

祖母も赤毛だったため、その髪に似合う色の衣装を揃えていたのだ。

祖母は、沢山のフラの話を聞かせてくれた。ロアアールにはない、奇想天外な物語の数々。

そして、フラとロアアールが、遠い距離を越えて深い縁で結ばれることとなった昔話も。

その縁に導かれて、祖母はこんな寒い地に嫁いできたのだ。

青い空、青く透き通る海、真っ白な砂浜。

祖母の話の中で、レイシエスが死ぬまでに一度は見てみたいものがそれ。

ロアアールは、冬が長くどんよりとした空が多いし、回廊の北側の海は凍っていて、南側の海はいつも灰色で荒れていた。

漁業にも貿易にも、とても向いていない。

だから、そんな鮮やかな青というものを、一度でいいから見ても良かったのだ。

そんな祖母も、レイシエスが12の時に亡くなってしまった。

ウィニーは、唯一の赤毛の理解者を失い、ひどく落ち込んでしまったのだ。

だが、彼女には祖母から遺産が残されていた。

古いが質のいい、赤毛に似合う色のドレスと――文箱。

祖母が、故郷であるフラと交わした手紙である。

遠く嫁いできた彼女は、時代で相手は変えていったものの、その文通は死ぬまで続いていたのだ。

最初の手紙は、祖母の弟へ。まだ、嫁いできたばかりの若かりし頃だ。

それが、次第に弟の息子になり、最後は弟の孫になった。

祖母が大事にされていたと分かるのは、手紙の相手は全てタータイト公爵本人、もしくはその跡継ぎだったからだ。

祖母の弟も、弟の息子も――そして昨年、弟の孫がその公爵を継いだのである。

父も公爵を継ぐ前は、手紙を交わしていたという。

レイシエスたちが、その習慣を受け継げなかったのは、一重に母の圧力だった。

母は、ロア（北）の公爵家の人間で、ロアとロアアールの友好をより深めるために嫁いできた。

元々、非常に保守的だった上に、なかなか子どもに恵まれず、心苦しい生活を送っていたようだ。

ようやく出来た子どもが、レイシエスである。

女であることを残念に思った矢先、もう一度子どもを授かった。

今度こそは息子を、と言う母の祈りは結局通じず、ウィニーが生まれたのだ。

母は、そこで伏せてしまうような、か弱い人ではなかった。

もはや自分が子どもを産めないと分かるや、レイシエスを完璧な世継ぎに育てるため、スパルタ教育を開始したのである。

おかげで、彼女が物ごころついた頃には、多くの教師に囲まれていることとなった。

放っておかれたのは、妹だった。

母にとって、二人目の娘ということだとどめを刺したウィニーは、その上、ロアにもロアアールにもほとんどない赤毛で。

一方、レイシエスは父に似た生粋のロアアールの容姿をしていて、そしてまたとても美しかったため、母の中の格差は誰の目から見ても明らかになった。

最低限の教師はつけられたが、事実上妹は母に無視されていたのだ。

そんなウィニーの心を、明るく育てたのが祖母だった。

その祖母が亡くなった後、妹はドレスとフラとの文通を受け継いだのである。

誰に出しているのかと聞くと、公爵本人だということではないか。

公爵は忙しくて失礼だろうから、どなたか紹介をしてもらいなさいと言ったのだが。

その次のフラからの手紙を、ウィニーは見せてくれた。

『ロアールとの手紙は、三代に渡り公爵か公爵になるものが書く、榮譽とも言える仕事。残念ながら、まだ私には世継ぎがないため、許されるならばこのまま私と手紙を続けて頂けないだろうか』

驚いたのは、そのへりくだった文章だ。

公爵本人が、他家の公爵の娘とは言え、これほど丁寧の手紙を書いているとは思わなかったのである。

レイシエスは、大慌てでその文通に参加した。

ロアールに、これほどまでに礼儀を尽くす国を、無碍にしてはならないとすぐに理解したのだ。

この付き合いは、昔話だけで終わる話ではなく、ロアールの未来に関わるかもしれない。

次期公爵になるはずの自分が、それをウィニーだけに任せておけなかった。

妹を、信頼していないと言う意味ではない。

自分が、責任を持つべきところだと思ったのだ。

最初の手紙は、これまで手紙を出さなかったことへの非礼を詫びることから始まった。

そして、それをウィニーの手紙に同封してもらえよう託したのだ。

母は、気性も何もかも違う祖母とは、うまくいっていなかった。

同時に、母は祖母に抱く感情を、フラ（南）に抱いているように思えたのだ。

放っておかれるウィニーだからこそ、母に気づかれることなく——あるいは気づいたところで放置され——文通を続けることが出来る。

しかし、レイシエスまでフラに関わっていることが分ければ、おそらく強硬に止められるだろうと思ったのだ。

母と言い争いをするとは、もはや彼女の中にはない。

過去何度か試みたそれは、ことごとく母の絶対に折れない姿勢を見せつけられただけだった。

理屈ではない。

駄目なものは駄目なのだ。

それから、フラの公爵からの手紙は二通になった。

ウィニー宛ての封を切ると、二つの封書が現れる。

挨拶のように、女性に対する多くの賛辞の言葉が並べられた手紙を、最初は赤面して読んだものだった。

まだレイシエスは、そういう手紙を男性にもらったことがなかったのだ。

しかし、それは勿論ウィニーの手紙にも書いてあり、社交辞令であることはすぐに分かった。

フラでは、きっとこれが当たり前なのだろう。

祖母への手紙でも、よく祖母をほめるような書き出しで始まっていたものだ。

身内であってもそうなのだから、若い異性相手には更に情熱的なのだろう。

ロアールとはまるで違う季節の話や、大陸からの侵攻を心配する話、もしそんなことがあれば、フラから飛んで来てくれることを

誓われたりもした。

他愛のない少女への手紙と思われるだろうが、レイシエスは次期ロアアールの公爵だ。

そして、手紙の相手は現フラの公爵。

そんな手紙に、どうして冗談など書けようか。

多少の誇張は入っているかもしれないが、その点は社交辞令ではないような気がした。

事実、四代前に本当に来てくれたからだ。

昔話は、後日に譲るとして、これらの手紙のやりとりで、ロアアールの姉妹はすっかりフラを好きになってしまった。

元々、祖母の話で半分恋をしていたようなものだったのだ。

そこへ、手紙の駄目おし。

これで、フラ（南）を嫌えと言われても無理な話である。

だから。

この都への謁見会で、唯一の楽しみがあるとするならば——フラの公爵との対面。

これまで、一度も出会ったことはなかった。

祖母の葬儀の頃、不幸にも公爵の正妃も亡くなっていて、他の身内の方が参列したのだ。

この馬車が、王都へ着けば、すぐにでも会える人。

だが、南への憧れを、いま思い浮かべているのはレイシェスだけではないようだ。

「フラの公爵様は、誰かと一緒に来てるかなあ」

姉の都への旅に、ギリギリで飛び乗って来たウィニーは、かの公爵一家に興味津々のようだった。

まだ日は高い

馬車がイスト（中央）へ一歩近づくごとに、外の景色はどんどん明るいものになっていく。

同じ月だというのに、ロアール（北西）とは何もかも違う景色。

暦では、三月に入ったばかり。

故郷では、まだまだ雪が降る時期だというのに、道端には花が咲き始めている。

妹のようにおおはしゃぎすることはないものの、心が浮揚しているのが分かる。

春が遅い分、この国の誰よりも春を喜ぶロアールの地。

それは、領民だけでなく、公爵家も同じなのだ。

そんな春の道程を楽しみながら——ついに姉妹は、イストの都へ入ったのだった。

王の都は、すさまじかった。

大きな道には石畳が敷き詰められ、馬車の混雑も物凄い。

それを、熟練の御者たちがまるで魔法のように操って、ぶつけないようにかわしていくのだ。

ロアアールから連れて来た御者たちは、父の謁見会にも付き添っていた者なので、もちろん都を走ったことはあるだろう。

しかし、これまでとは明らかに違う、少しぎこちない馬車の動きに、レイシエスはハラハラしてしまった。

「姉さん見て、すごく大きな教会！」

ウィニーは気づいていないのか、すっかり窓から観光を始めている。

窓の外にも興味は山ほどあるが、今はとりあえず王宮へと無事たどり着きたかった。

そんな彼女の願いは聞き届けられたようで、馬車は大きな石造りの建物の前で止まったのだ。

「お嬢様…ここから王宮に入るための馬車の先導がつきます」

そう告げられ、どれだけほっとしたことか。

レイシエスは、この馬車のことしか考えていなかったが、馬車の後ろには荷馬車の後続があるのだ。

公爵家が、謁見会に参加するのに、手ぶらというわけにはいかない。

献上品に、着替えなど滞在に必要な物などを詰め込むと、1台目の荷馬車はいっぱいだ。

さらに、召使も連れて来ているため、もう1台。

これだけのものを、無防備に運ぶ訳にはいかない。

護衛が、軍より騎馬で10騎。

それでも、おそらく公爵家としては質素な方だろう。

派手に飾り立てる慣習は、ロアールにはなかった。

外で、男の話し声をする。

片方は、護衛隊の隊長のものだが、もう片方はこの施設の人間だろうか。

「申し訳ありません…しばしお待ちただけませんかしょうか」

「何と、公爵家の馬車を待たせるというのか」

どうやら、トラブルのようだ。

謁見会の年である。

5公爵が都へ詣であることを、都の人間で知らない者はいないだろう。

いまの王都では、他のどんな立場の人間より、最優先されるはずなのだが。

「ほんの少し前、ニール（東）の公爵様がおいでになられまして… たった今しがた、王宮に向けて出発されたばかりなのです」

何という間の悪いことか。

たつた5組しか来ない公爵が、同じ日のほぼ同じ時間でぶつかってしまったというのだ。

ニールは、彼女らの父よりも年上の老公爵だったはず。

会った事はないが、情報としてレイシエスはそれを覚えていた。

「他に先導はいないのか？」

「王家か公爵家にしか使わない、特別な先導です…」

外の会話に、彼女はため息をつきながら、自分の不運を嘆こうかと思った。

幸先が悪いこと、と。

「姉さん… 助けてあげない？ きつとあの人、いま泣きそうだよ」

だが、ウィニーがそつと囁いてくる。

不幸なタイミングだったのは、ここの人間にとっても同じだろう。

更に、彼には何の手落ちもないというのに、公爵家を待たせた罰が降りかかるかもしれないのだ。

「隊長……その辺で」

妹に言われてから行動する自分を、少し恥ずかしく思いながらも、レイシエスは馬車の外に軽い制止をかけた。

「し、しかし」

どうにもならないことは、彼も分かっているが、主が軽んじられるような事が許せないのだろう。

「待ちましよう……まだ日は高いのですもの」

『まだ日は高い』

ロアアールの故事でもあるそれは、『最後には勝つ』という意味。

正確には、『まだ日は高い、雪は降っておらぬし、足も動く』という、ご先祖様の言葉だ。

戦いの場で語られたものだけに、軍人たちにとってそれは特別な言葉。

馬車を待たされた程度で、敗者というわけではないのだと、それをレイシエスは柔らかく伝えようとしたのだ。

「……ハッ！」

一瞬にして、外の空気がピリツとしたのが分かる。

やりわり伝えようとしたつもりが、隊長の軍人魂をくすぐってしまっただろうか。

「姉さん、やる〜」

ウィニーに、小さくひやかされる。

「馬鹿なことを言っでないで…」

そんな事件のすぐ後、もうひとつ事件がレイシエスの唇を止めた。後方が騒がしくなったのだ。

「待たれよ、待たれよ！」

複数の馬の、いなく声。

護衛の隊が、ざっと後ろへと駆けていくではないか。

「こちらは、公爵家の馬車である、さがられよ！」

「何と！ こちらも公爵家の馬車である！」

恐ろしい事態が発生したのは、考えるまでもなく明らかだった。

ニール（東）の公爵だけで飽き足らず、またも別の公爵と時間がぶつかったというのだ。

「何て…ことだ」

外で、男が呆然とつぶやく声が聞こえた。

滅多に起きないことが、起きてしまったようである。

もはや、この男の職は守られないかもしれない。

さすがのレイシエスも、他の公爵の怒りまでは止めようがないからだ。

しかし。

「その紋は…ロアアールの公爵家であらせられるか？」

驚きの声と共に、事態は違う方向へと流れ始める。

「なんと、フラの方ではありませんか」

護衛同士が、半ば呆然とお互いの地域を呼び合うのではないか。

フラ！？

反射的に、レイシエスはウィニーと顔を見合わせていた。

次に、ウィニーは慌てて首を伸ばして後ろを見ようとするが、馬車の後ろに窓はなく何も見えるはずなどない。

レイシエスは、おとなしく座ったまま、胸だけを高鳴らせた。

祖母の国でもあり、手紙を送り合う相手でもあるフラの公爵が、すぐ後方にいるというのだ。

「ど、どうしよう…会えないかな？」

どうしても耐え切れなそうなウィニーを、視線で制する。

「だめよ…父上の名代なのだから。公爵家の人間が、簡単に外に出る訳にはいかないのよ」

そう遠くなく、王宮で対面することが出来るのだ。

その時に、これまで磨き上げてきた礼儀作法で、恥ずかしくなく挨拶をすればいい。

ウィニーの言うようなことをした日には、無作法で無教養な跡取りとして、悪い噂を故郷に届けてしまう。

そうしたら母の怒りと、更なる教育が始まるに違いない。

母のことを思い出すと、レイシエスはどれほどでも自分を律することが出来た。

なのに。

「私の可愛い』はとこ殿』は、こちらかな？」

馬車の外から、信じられない言葉が投げかけられた。

低すぎない、張りのある強い声。

扉につけられた窓の外に、人影はない。

わざと、覗かないようにしてくれているのだろう。

まさか。

いや、そんなまさか。

レイシエスは、余りのことに席で硬直してしまった。

「タータイト公爵のおじ様？」

だから、ウィニーの口にふたは出来なかった。

外にいろのが誰か分かって、嬉しくてたまらないのだ。

「おっと、驚いたな。その呼び方は、赤毛同盟の姫ではないか？」

少し芝居がかった、おどけた口調。

ウィニーが、軽やかに笑った。

手紙で交わした、お互いにしか分からない話なのだろうか。

「さて、可愛い二人のはとこ殿……もしお許しただけなら、ご尊顔を拝し奉りたいのだが」

レイシエスは、余りに常識はずれで、そして強引な公爵にただただ驚くばかりだった。

こんなところでは、落ち着いて挨拶も出来はしない。

ど、どうしましょう。

どきどきと高鳴る胸では、とても冷静に考えられそうにない。

そうしたら、ウィニーが。

妹が、自信満々に笑いかけてくるではないか。

まるで、『大丈夫』と言わんばかりに。

この根拠のない自信は、一体どこから出てくるのか。

けれど、その不敵なまでの妹の態度は、ほんの少しレイシェスを落ちつかせた。

相手は公爵で、ここまでへりくだられ、馬車の前まで来てもらったものを、無碍にするわけにもいかないだろうと。

「光栄ですわ……」

緊張で震えそうになる手を、膝の上でぎゅっと握って、レイシェスはようやくそう答えた。

馬車の外で、わずかに空気が緩んだかと思うと。

「では……失礼を」

言葉の後、一呼吸おいて馬車の扉のつつてが、ゆつくりと弧を描く。

ロアアールよりも温かい、春の空気が扉からふわりと入ってきた。

それと同時に、馬車の横にいたであろう男が、二人の前に現れる。

輝く赤毛は、ウィニーのものとそっくりだ。

前髪を後ろに流し、それでおさまりをつけているようだが、とてもおとなしい髪質には見えなかった。

太陽の下がよく似合う、褐色の肌と逞しい胸板。

それらを、濃い緑の礼服におさめているのが、窮屈に見えるほどだ。

彫りの深い目元を、長いまつげに縁取られた黒い瞳が輝き、その上を太めの眉がきりりと這っている。

そして、物を自由に語るに違いないと思われる、大きめの唇を全部ひっくるめて一言で言うのなら――精悍、だろうか。

「馬車の中から失礼致します。わたくし、ラットオージェン公爵代理、レイシエス・ロアアール・ラットオージェンと申します」

ロアアールの男の、誰とも似ていないその容姿に、レイシエスは驚きながらも己の最初の使命を果たそうとした。

その、教科書のような挨拶を、フラの公爵は目を細めて見ている。

「噂はもつと誇張して流すべきだな…美しきはとこ殿…いや、レイシエス殿。私は、カルダ・フラ・タータイト。私は雪を見たことはないが、きっと雪の精霊は、レイシエス殿のような姿をしているに違いない」

馬車のステップに片足をかけ、身体半分だけを中に入れるようにすると、彼がとても大きな男であることが伝わってくる。

片手をへりにかけ自分を支えると、公爵はもう片方の手をレイシエスに伸ばす。

しっかりと握りしめていた膝の上の手の片方を、優しく取られたかと思うと、深く上半身を屈めるようにして挨拶の唇が寄せられる。

男性から女性への、普通の挨拶だと分かっていても、こんな場での変則的な行為に、平然としているのは難しかった。

「タータイト公爵のおじ様」

一方、ウィニーは目を輝かせて自分の番を待っていた。

「やあ、可愛い私の赤毛姫…会いたかったよ。我らの行儀の悪い赤毛を、よくぞ受け継いでくれた。それに、素晴らしい色のドレスだ…よく似合っているよ」

祖母の古いドレスをほめられて、妹はとても喜んでいた。

ウィニーへの挨拶は、おでこに。

正式な挨拶というよりは、まるで親戚の子どもにするようなものに見えた。

「可愛い二人のはとこ殿。王都に入っすぐ、二人に出会えるなんて…何という神の思し召しだろうね。こんな幸運は、なかなかないものだよ」

ステップに片足をかけたまま、フラの公爵は本当に嬉しそうに微笑む。

レイシエスが、何故か眩しさで目を細めてしまいそうになるほど。こうして、ロアアールの姉妹とフラの公爵は、初めて顔を会わせることとなった。

そうしている内に、ニールの公爵を送った先導の馬の隊列が戻ってきたという。

公爵家の馬車が2台も待っているという前代未聞のこのトラブルは、次のように解決された。

2台の公爵の馬車は、ひとつの先導で共に王宮に入ることにしたのである。

贈り物

ロアアールの公爵家に、王宮の部屋は4つあてがわれた。

ひとつが、公爵代理であるレイシエスの部屋。

この部屋が一番広く、応接室と寝室が別々の部屋になっている。

ひとつは、召使いたちの部屋。

あとのふたつは、一緒に来た家族のための部屋だ。

謁見会は、公爵たちの義務であつたが、家族を伴うことを許されていた。

家族にとっては、都への観光のような面もあり、連れて行って欲しいと願う者も多いという。

ロアアールの姉妹には、多すぎる部屋数である。

父の時代は、家族は誰もともなわなかった。

母は、極度の馬車酔いの体質で、結婚のためにロアから来たのを最後に、二度と馬車に乗らないと誓いを立てているようだ。

当然、レイシエスは後継ぎの勉強に釘付けにされていたし、ウィーは母に反対されていた。

今回、妹がこの旅に滑り込めたのは、半ば奇跡のようなものだっ

た。

わざわざ病床の父に、お願いに行ったというのだ。

元々、熱意のあるウィニーではあるが、今回のそれは今まで以上で。

それほど、レイシエスと王都に行きたかったのだろう。

レイシエスは、妹にとって良い姉ではないはずだ。

妹を母から守ってやることも出来ないし、こういう時に助けることも出来ないのだから。

それでも、ウィニーは彼女をとて慕ってくれる。

レイシエスは、そんな可愛い妹に、良いところへ嫁いで欲しいと願っていた。

公爵家の娘だ。

嫁ぎ先など、その気になれば引く手あまただろう。

ロアアールで不憫な人生だった分、嫁いで幸せになって欲しかった。

「姉さん…おじ様のところに行ってもいいかなあ」

三十にも満たないフラの公爵も、妹にかかれればおじ様扱い。

それに、レイシエスは苦笑しながら、妹を諫めなければならなかった。

「後で、正式にご挨拶に行くから…その時まで待つて」

まだ、召使いたちは荷馬車の道具を、部屋に運び終わっていないのだ。

ようやく、長旅の疲れをふかふかのソファに座って休め始めたばかり。

王への謁見は、日程がしっかり決まっているものの、その前にやらなければならないこともある。

王太子——次期王になる者への、挨拶だ。

王太子不在の場合は、王弟などの継承1位となる。

未来の王にも、これまでと変わらず末永い忠誠を誓います、という儀式である。

レイシエスは、実践経験こそ少ないが、とにかく頭の中に多くの知識が詰め込まれていた。

そのため、数々の儀式の中に王の権威への執着が、透けて見える時がある。

しかし、この平和協定で結ばれた拳の国は、ロアアールにとっては助かるものなのは間違いなかった。

もはや、背後の心配をせずに、大陸からの圧力に防御を徹することが出来る。

更に、他家と比較してより危険な地域であることから、都より財政援助が来る。

どこよりも、兵力を抱えていなければならないためだ。

人的援助は、どの時代も拒み続けていた。

もしもの時の増援ならば受けるが、他の地域の人間を入れる事は、領地にとって良いことではないと、代々判断してきたのである。

過去に一度、王の圧力で一年だけ常駐させたことがあったらしいが、都の人間がロアアールの寒さに耐えられるはずがなく、王に泣きついて帰っていったということだ。

レイシエスが公爵になったとしても、直接軍の先頭に立つことはないだろう。

軍の將軍たちの決めたことを、承認するくらいか。

領民としては、力強い男の公爵に先頭をに率いて欲しかったことだろうが。

こればかりは、どうしようもない。

ソファに身を預け、様々なことを考えるともなく考えていたら、来客を告げるノックの音。

正確には、来客ではなく。

「フラの公爵様より、お届け物です」

赤毛の召使いがそう言うと、大きな箱が二つ運び込まれて来た。

まだ、こちらは下ろした荷物の整理に追われているというのに、向こうはもう終わったのだろうか。

届け物そのものというよりも、その速さに驚いた。

元々、この謁見会では、お互いの公爵への贈り物も当たり前のこととで。

勿論、ロアールから各公爵への品々は準備済みだった。

ウィニーが、開けたくてたまらないように箱を見ている。

その様子が、見ていて余りに明らかなので、ついぷつと吹き出してしまふほど。

「召使いを呼んで、開けてもらわなきゃね」

「忙しそうだから、私が開けてあげる」

わんわんっ！

子犬が転がる玉めがけて駆けるように、ウィニーはテーブルの上の箱の前に陣取った。

公爵家の娘が、そんなことでどうするの！

母の怒号が聞こえてきそうな気がするが、それはレイシエスの被害妄想に過ぎない。

一瞬、きよろきよろと周囲を確認してしまったが。

妹は、まったくためらわず、美しい包装を解き一つ目の箱を開ける。

「わあ！」

箱を開けたとたん、中から艶やかな色が溢れる。

青のドレスだ。

いま、レイシエスが着ているような寒い青ではなく、深く濃い青。

まるで、想像の中の海の色のような色だった。

「すごい、綺麗！」

よく見えるように、妹は箱を斜めに立ててくれた。

間違いなく——レイシエスのための衣装だということが分かる。

箱を立てたことにより、レイシエスの赤毛とその青が並んだのだ。

その残酷なまでの色の食い違いは、誰の目にも明らか。

しかし、それは逆に言えば、赤毛の多いフラの人間にとっても同じこと。

彼らは、こんなに美しい青を、似合わないという理由であきらめなければならなかったのか。

きっと、レイシエスにその色を着て欲しくて、フラの公爵は送ったのだろう。

もうひとつの箱は。

「あれ？」

それも、やっぱりドレスだった。

暖かい緑と白の織り込まれたそのドレスは、今度は別の意味でウィニーに贈られたものだろうということが、一目で分かった。

だから、妹も変な声をあげたのだ。

フラの公爵の考えが伝わって来て、レイシエスはふふふと笑ってしまう。

ウィニーは、ドレスを見たまま驚きで動けないでいる。

「私、都へ行くって書いてなかったのに」

どうして、自分の分の贈り物があるのか、理解できていないのだ。

「そんなのは、決まっているじゃない」

可愛い妹の様子に、笑みを浮かべたまま、レイシエスは答えを教えてあげることにした。

「あなたが来てなくても、最初からそのドレスを贈ろうと思っていたからよ」

二人で手紙を送っていたのだ。

ウィニーが来ていようがまいが、あの公爵が妹を無視するなんて思えなかった。

「あ…あは…嬉しいな」

跳ねまわって喜ぶかと思ったら、妹は少し困惑したかのような笑いを浮かべる。

「やっぱり…フラの公爵様っていい人だね」

感慨深げに、呟かれる言葉。

妹のドレスを見る瞳は、まるで亡くなった祖母を懐かしむもののように見えた。

次女の秘密の野望

ウィニーは、ラットオージェン家のオマケである。

彼女自身、自分のことをそう思っていた。

姉のレイシエスさえいれば、あの家は成り立つ。

その代わり、ウィニーは自由気ままに生きることが出来た。

祖母が亡くなって、本当にオマケの自分を痛感してはいたが、彼女にはフラと手紙のやりとりがあった。

遠い地の人だが、それでもフラの公爵のことは、母よりも近い人だと思っていたのだ。

それに、姉が参加してきた時は、本当は少し落ち込んだ。

フラとの手紙は、赤毛の自分の唯一の特権だと思っていたから。

文通相手を、取られる気がした。

けれど、姉はあの母の愛を、良くも悪くも一身に受けている人で、いつか重圧に壊れてしまうのではないかと、子どもの時からとても心配していた。

そんなレイシエスに、こんなくだらないことで文句を言うことも出来ず、届けられる2通の手紙の内の1通で我慢することを、ウィ

ニーは少しずつ覚えていったのだ。

そんな時、姉が王都へ行くこととなった。

父の代理だ。

フラの公爵にも会えるだろうし、王都にも行ってみたかったウィニーは、いつもより何倍も母と戦った。

しかし、やはり母が折れることはありえず、ついに彼女は病床の父に泣きついたのだ。

きつとこれが、最後の王都になるでしょう、どうかお願いしますと。

すっかり病でやつれた父は、しばらくじっと彼女の顔を見たかと思うと、「分かった」と言ってくれたのだ。

王都へ行ける、そしてフラの公爵に会える！

ウィニーは、心震わせた。

嬉しさの余り、部屋のベッドで枕に顔を埋めて泣いてしまったくらいだ。

生まれて初めての、嬉し泣きだった。

泣くほど喜ぶ理由は、ちゃんとある。

彼女には、この王都で成すべきことがあったからだ。

自分の、今後の人生のために。

ウィニーは、オマケとは言え公爵の娘だ。

15歳だが、公爵になる姉とは違い、そう遠くなく結婚してもおかしくないだろう。

姉の結婚は、とにかく乗り越えるべき壁が高い。

公爵の夫になるということは、ロアールの政治に関わる可能性があるからだ。

保守的で防御に徹した冬の国を守るため、両親はおそらく多くの候補の中から、相手を厳選中だろう。

そんな時、召使いが奇妙な噂をウィニーの耳に入れた。

この召使いは、元々祖母に仕えていた者で、フラから一緒に来た召使いの孫に当たる。

残念ながら、赤毛には生まれなかったが、祖母にウィニーを守るよう頼まれたらしく、普通の召使い以上に尽くしてくれた。

その召使いが仕入れてきた噂は——ウィニーはアール（西）の公爵家に嫁がせようか、というものだった。

母の召使いから、流れてきたものだという。

アール！

よりもよってアールなのだ、あのアール！

ロアアールと領地を接し、農業に恵まれた肥沃な土地を持つ地。

そして、何度となく食料のことで、父を悩ませたところだ。

そういう意味で、ウィニーはアールが一番嫌いだった。

これまで、ロアアールからアールに嫁いだ者はいない。

逆もまた然り。

たとえ食料の件があつたとしても、誇り高いロアアールは、アールには媚びない。

そんな、これまでの先祖が示してきた規範が、こんなところで崩されようとしているのだ。

いや、ウィニーにとって、規範など本当はどうでもいい。

しかし、これまでの公爵同士の関係を考えると、嫁いだところで冷遇されるのは目に見えている。

そして、彼女の輿入れが、食料の安定供給にはおそらくつながらないだろう。

それを分かっているながらアールの話を出すということは、母はただ単に、ウィニーを視界から消してしまいたいのだ。

ロアールでは、頻繁に顔を合わせることになるかもしれないし、自分の故郷であるロア（北）に嫁にやるのはもっての他。

ならば、アール（西）。

母には、政治的才能はない。

そのため、そんな単純な消去法で出した考えだったのだろう。

しかし、冗談抜きでやりかねない人だとも思っていた。

だからこそ、ウィニーは何が何でも王都へ行こうと考えたのだ。

父に、「これが最後かも」と言ったのも、2年後は嫁いでいるかもしれないという意味を匂わせたのである。

だが、それはアールにではない。

その相手を自力で探すため、彼女はここにいるのだ。

ウィニーは、母の思い通りにだけはなるものと、心に決めている。

自分の人生は、自分で見つけて切り開くのだ。

女の人生が、嫁ぎ先で決まるというのなら、それを自分で探さず最後のチャンスがここなのである。

15歳。

姉のレイシエスほどの美貌もなく、素晴らしいプロポーションも才能もない。

しかし、とにかく前向きな行動力だけはあった。

どれほど姉が美しくても、未来の公爵になる人を、勝手に手折ることは許されない。

姉に求婚出来ない人の中で、公爵の娘ならもらいたいと思う人は、きつというはず。

多少見劣りはするが、ウィニーは丈夫だし、きつとたくさん子どもも産めるだろう。

何色の髪の子が産まれても、可愛がるんだー。

それは、彼女が子どもの頃から想像していたこと。

そして、これが——ウィニーが王都へ来た理由と決意だった。

姉には、絶対内緒だ。

アールに嫁がせられるかもしれないと聞いても、苦しめるだけ。

だって、姉さんは母さんには逆らえないもの。

その残酷な現実には、子どもの頃から知っている。

どんなにつらくても、姉に泣きつかないのは、どうにも出来ないのが分かっているから。

母からの重圧に耐えているレイシエスに、これ以上負担はかけられない。

だから、ウィニーは泣きつく相手を、外に求めたのだ。

自分を愛して、大事にしてくれる人。

そんな人が、誰か一人でもいてくれたら——それが、彼女の乙女らしい夢だった。

王太子

ようやく部屋の仕度が整った頃、レイシエスの元に王太子からの呼び出しが来る。

こういうしきたりだったかしら。

教えられたこととの、ずれを覚える。

確か、身の周りが落ち着いたら、レイシエスの方から働きかけ、その後王太子への挨拶の時間が伝えられる——実際に動き始めるのは、それからと聞いていたのだ。

しかし、遣いの者は『王太子殿下がお待ちです』と言ったのである。

これではまるで、既にロアールのために時間を取ってくれているかのようではないか。

王太子を、待たせる訳にはいかない。

急いでレイシエスは装飾品を身につけ、公爵令嬢らしい身なりを整える。

普段、故郷でこんな宝石をつけて歩き回ることにはなかった。

男の公爵であれば、必要のないもの。

しかし、まだ何の実績もないレイシエスを、少しでもよく見せよ

うと、母が持たせてくれたのだ。

「姉さん、すつごく綺麗！」

ウィニーは、目を大きく瞬きながら、嬉しそうに笑う。

「留守番、お願いね」

その笑みに勇気の後押しをされ、レイシエスは部屋を出た。

初めての人に会う時は、いつもどきどきする。

フラの公爵とは、また別の意味のどきどき。

ここからは、わずかの甘えも許されない世界なのだと、自分に言い聞かせる。

みなが、フラのように優しいわけではないのだ。

美しい花が、溢れるほど惜しみなく飾られる廊下と、踵を取られるのではないかと思えるほどのやわらかい絨毯を、高いヒールで慎重に踏みしめながら、王宮の左奥へと向かっている――あら？

また、知識と現実がずれた気がした。

王太子との面会は、もうひとつの謁見の間だと聞いていたのである。

王宮には、謁見の間がふたつあり、ひとつは王のためのもの。

もうひとつは、王太子のためのものだ。

勿論、規模は明らかに違うが、王太子の内から、公爵をひざまずかせることに慣れさせるための練習場のようなところなのだろう。

ともかく、それらの謁見の間は、王宮のひたすら中央の奥のはずだ。

相当の奥まで来て、ようやく先導は扉の前で歩みを止める。

立派な扉ではあるが、場所的におそらく王太子の謁見室ではないはず。

「ロアアールの公爵代理様を、お連れ致しました」

「…お通しなさい」

返事をした男の声は、事務的なもの。

おそらく、王太子本人ではないだろう。

いくつかのズレは気になりはするが、いよいよご挨拶の時間だ。

レイシエスは、背筋を緊張させながらも胸を張った。

いまは公爵令嬢として、そして未来は公爵として付き合っていく相手。

ゆっくりと開かれる扉を、彼女はまばたきもせず見つめた。

「レイシエス・ロアアール・ラットオージェン…御前に参りました」

視界に映っているものに、一切心を乱されないように己を律しながら、ドレスを大きくふくらませ、中で片膝をつくほど折り曲げる。

しかし、彼女を見ている男に、心を乱さないでいることは出来なかった。

部屋の奥の大きな椅子に腰をかけ、足を組み、ひじ掛けに肘をつけてこちらを見ている男がいたのだ。

レイシエスより少し年上のはずの彼は、柔らかそうな艶のある黒髪と、緑がかった灰色の瞳を持っている。

しかし、髪質とは裏腹にその瞳に柔らかさはない。

傲慢さと自信たっぷりの気は、離れていても十分にレイシエスまで届いていた。

金糸銀糸をふんだんに使われた豪華な上着の襟もとから胸元にかけて、女性でもため息の出そうな、こまやかなレースが溢れて出ている。

それほどの贅を尽くした衣装を、着るべくして着る男。

その自分勝手な乱暴な気配は、レイシエスを戸惑わせた。

ここは謁見室ではなく、この男の態度を見る限り、公的な場には感じなかったのだ。

まるで、私的に部屋に呼ばれたかのような。

「なるほど…噂以上だな」

彼女の礼儀作法の教師が見ているならば、素晴らしいとほめてくれただろう挨拶など、男——王太子は興味もないように、レイシエスを見ている。

頭のとっぺんからつまさきまで、何度も。

噂。

フラの公爵もそんなことを言っていた。

ロアールに閉じこもっていたレイシエスの知らないところで、噂とやらは流れていたのだろう。

「側に寄ることを許す」

厳しいほどに強い声は、レイシエスを脅かすようなものだった。

身体がびくつと震えそうになるのを、何とか止める。

側に？

習っていたこととは、違う。

ここで、王太子は公爵の遠方よりの上京について、労をねぎらう言葉をかけるはずだった。

中に入れということだろうか。

「おそれいます」

レイシエスは、三步で部屋に入った。

「……………」

「……………」

そのまま止まってみたが、ただ後ろの扉が閉ざされるだけで、王太子からは何の声も発せられない。

それどころか、明らかに機嫌を損ねた目で、こちらを見てくるではないか。

多くの使用人も側近もいるが、彼らは一切に反応せず、ただこの部屋の隅の空間を埋めているだけ。

重苦しく息苦しい気配と想定外すぎる状況に、レイシエスが次の行動を模索していると。

「耳が悪いのか？ 俺は『側』と言ったはずだ」

その不機嫌な声が、鉄鉱石のような重さを持って投げつけられる。

一般の女性であれば、泣き出してしまうような威圧感と言葉の暴力。

これが…挨拶？

もはや、ズレなどという境界は飛び越えていた。

王太子の表情を見ながら、ゆっくりと足を踏み出す。

彼の言う『側』とやらが、一体どこまでなのか——その目を見ていなければ距離が分からない気がしたのだ。

一步一步、探るように近づく。

瞳も唇も、意思を強く表してはいるがピクリとも動く気配はない。

椅子の二歩手前まで来た時、さすがのレイシエスも足を止めた。

手を伸ばしても、触れられない距離でいたかったのだ。

「そこまでか」

さして機嫌の直っていない声で、突き刺される。

自分の顔の中心に、大穴でも開けられるのではないかと思えるほどの気配に、しかし彼女は必死に耐えた。

「ここままで…お許し下さいませ」

これは——普通の謁見とは違うものだ。

その感触は、もう十分すぎるほど伝わっている。

噂、なるもののせいだろう。

ロアアールの公爵代理に、興味があつたわけではないのだ。

ただ、美しい女を噂通りか確かめたかっただけ。

そう思うと、レイシエスは泣きたい気持ちになつた。

自分の美しさというものを、いまほど情けなく思つたことはない。

彼の目に映っているのは、ただの女。

どんなに勉強をしようとも、良い公爵になるべく努力をしようとも、そんなことは男たちには何の興味もないのだ。

「その距離で…挨拶が出来るのか？」

王太子は、無造作に自分の手をレイシエスに向かって投げ出す。

普通であれば、男が女にするような挨拶を、しろと言っているのだ。

過去、女公爵が存在しなかつたわけではない。

5公爵の地位は、この国ではとても大きかつたため、傍系に成り代わられるのを嫌がつた本家が、直系の娘を公爵に据えることがあつたのだ。

そんな彼女らの物語を、レイシエスもいくつか読んでいた。

だが、その中にこんな話は書いてない。

彼女らも——おそらく、男には分からないつらさを数多く味わったことだろう。

しかし、レイシエスは今、ロアアールの公爵の名代だ。

家のため。

彼女はもう一歩足を踏み出し、膝を深く折った。

「失礼いたします」

投げ出されている大きな手を、そつと下から触れる。

自分のすべての動きを、王太子は見ている。

完璧に。

レイシエスは、男が女にするように完璧に、親愛の挨拶を終えたのだった。

そつと、手を離す。

視線を上げると。

「さすがは、ロアアールの血筋だな」

満足そうな、王太子の目があった。

だが、それは決して優しい瞳ではない。

「すぐに溶けるような、ひ弱な氷ではないというところか」

手を――取り返される。

身を引き上げられるかと思うほどの強さで、手を引かれた。

あっと思った時には。

「その氷の瞳に敬意を払って、俺も挨拶をくれてやろう」

指先に。

口付けられていた。

もう一人の赤毛の男

ウィニーは、部屋から顔を出してキョロキョロしていた。

姉が出て行って、もうどれほどたつだろう。

たった一人で部屋にいるには、とても退屈すぎる。

すっかり、フラの公爵でも通らないものかと、様子を見ていたのだ。

そうしたら。

一人の召使いを従えて、赤毛の男が廊下の向こうから歩いてくるではないか。

赤毛！

一瞬、公爵かと思っただが違った。

彼よりももっと髪を短くした、そしてもっと若い男だったのだ。

耳が出るほどサイドの髪も短いため、赤い石の耳飾りが鮮やかに見える。

柔らかさよりも硬さを感じる体つきと、目つき。

若々しい身体を、鈍い茶金の礼服がぴたりと包んでいる。

大人しい血には、とても見えない。

赤毛であるという事実を意識を取られ、ウィニーは思わず彼を眺め入ってしまった。

その髪の色を持っているということは、フラの関係者かと思ったせいだ。

そんな風に、長く眺めていたものだから、向こうにも気づかれてしまった。

どきつ。

この時のウィニーは、相手に向かって胸を高鳴らせたのではない。

赤毛の男が、自分を赤毛だと理解し、そして赤毛であることについての反応があるのではないか。

そう思っていたのだ。

しかし、とてもとても深い怪訝の目を向けられた。

「……」

その怪訝な視線を、わずかもそらさないままこちらに近づいてくるため、ウィニーも引つ込むタイミングを見失ってしまった。

いや、逆だ。

この赤毛の男との出会いを、自分の野望のきっかけにしたかった

のだ。

そのために、来たのではないかと。

部屋の目の前まで、お互いに見つめあうような形を続け、そしてついに男の足が止まった。

ごくり、と喉がなる。

男の一言目は。

「ロアアールでは……そんな無作法しか教えていないのか？」

思い切り、呆れた声だったのだ。

瞬間、ウィニーは自分の髪よりも赤く、頬が燃え上がるのを感じた。

この男は、自分がロアアールの娘であることなど、当に承知だったのだ。

その上で、なぜこんな無作法な真似をしているのか——それが何よりも怪訝のだったに違いない。

あ、あ、あ、だって、赤毛。

ウィニーは、色という名の同胞を見つけて舞い上がってしまったていた。

フラの公爵のように、この赤毛を喜んでくれるのではと、心の底

で思っていたのだ。

どうして、そんな浅はかなことを考えたのか。

彼らのとって赤毛など、ただの見慣れた色に過ぎないというのに。

「ウィニー・ロアール・ラットオージェンです！ し、失礼いたしました」

恥ずかしさに死にたくなりながらも、ロアールの恥と想われたくなく、彼女は必死に自分の失敗を覆い隠そうとした。

「スタファ・フラ・タータイトだ。さっきは、兄上が無作法なことをしたようだ……あれを真似る必要はないぞ」

ウィニーが姉についてきたように、フラも公爵の弟が同伴していたのか。

彼は公爵のように、人の馬車に飛び込んでくる男ではないのだらう。

無作法、無作法と連発され、硬いはずの彼女の心臓は、カナヅチでカンカンたたかれている気分だ。

「公爵のおじ様は、無作法なんかじゃありません！」

しかし、自分を馬鹿にされるのはまだいいが、かの人のことを悪く言われるのは嫌だった。

今日、初めて出会ったばかりだが、それまで手紙で何度も何度も

話をしたのだ。

優しく心をこめて、遠いロアアールの赤毛の娘のことを、思ってくれた大事な人である。

どれほど、彼の手紙に慰められたらろうか。

それを、この人に分かるはずなどなかった。

「おじ……様」

一瞬、ぽかんとした後――スタファはぶつと吹き出した。

「あつはつは……あの兄上も、そうか、若い娘の目から見たらおじ様か」

おかしくてたまらなそうだ。

その笑いつぶりに驚いて、逆にウィニーの方がぽかんと彼を見つめてしまった。

しばし笑った後、視線に気づいたのか、スタファはようやく表情を元に戻して咳払いをした。

「悪かった……だが、フラの前以外でこんな真似をすると、お前の姉上が困ることになるぞ」

一瞬。

視線が、開いたままのドアの奥の方へと動いた。

何だろう。

漠然とした『姉上』という表現には、感じなかった。

姉のことを知っていて、そう言っているような。

「姉さんをご存知なんですか？」

どこかで、会っただろうか。

不思議に問い返すと、スタファはふーっと息を吐いた。

その息に乗って、南国の匂いが届きそうだ。

「ご存知も何も……お前も知ってるよ」

やれやれという音で、言葉が綴られる。

何も知らないウィニーに、呆れているのだろう。

「……寒い日だったな。雪を見たのは、あの時限りだ」

思い出をたどる、声の調べ。

いまは見えない雪を見るように、一度視線が上へと上がる。

あ！

ウィニーの微かな記憶が、その音で刺激された。

あれは——たいして寒くない日のこと。

スタファアの言葉と食い違うそれが、彼女の中で引きずり出されてきた。

その年の、初雪が降った日。

あれは。

「お祖母さまの……葬儀に……」

フラの人間が雪を見る機会など、滅多にないだろう。

そんな彼が、見たというのならば、それはきっとロアアールで。

あの時、フラの公爵は来られなかった。

代理で来たのが。

「そう……お前は、ただただ泣き続けてたな」

四年ほど前の記憶。

彼にとっては、ロアアールの何もかもが、珍しいことだったろう。

しかし、ウィニーにとっては、この世の終わりかと思った日だったのだ。

周囲のことなど、気にする余裕なんかなかった。

まだ、１１歳だったのだ。

「姉上は……元気でえられるか？」

そんなウィニーの過去への旅路など、知らぬ顔でスタファアはそう聞いてきた。

「はい、さつき王太子殿下のところへ挨拶に行きました」

何気なく、答えたつもりだった。

それは、ただの雑談なのだと。

「そうか、先触れを兼ねて挨拶に来たのだが……それは、残念だったな」

だが、スタファアは本当に、残念な表情を浮かべるではないか。

瞬間。

雷に打たれるほどの衝撃が、ウィニーの中を走り抜けた。

彼の表情に、社交辞令はない。

本当に、姉に会えずに残念そうだったのだ。

あは、そっか。

スタファアの目的は——レイシエス。

彼は、姉に会うために、わざわざここまでやって来たのだ。

四年前。

あの葬儀の日。

泣きじゃくるウィニーなど飛び越えて、彼は姉を見ていたのだろ
う。

白い肌をなおさら白く見せる黒いドレスに身を包んだレイシエス
は、いつも通りあの日も美しかったではないか。

悲しみでいっぱいだったウィニーでさえ、覚えているほど美しい、
ひとつ年上の姉。

彼女は、心の中で「x」をつけた。

スタファの名前に、である。

彼にとって自分など、レイシエスのおまけの無作法な泣きじゃく
ってる赤毛の娘。

それに、公爵の弟であるならば、彼には姉を手に入れる可能性が
あった。

ロアアールに婿に入ることが出来るし、身分的にも申し分ないか
らだ。

「どうした？」

怪訝な問いに、「いいえ、失礼いたしました」とだけ答えて、ウイニーは自室へと戻り扉を閉めた。

いきなり暗礁に乗り上げた計画だが、殿方は彼だけではないのだ。

部屋の、姿見の前に立つ。

自分の顔をじつと見る。

「そんなに……悪くはない、わよね」

心が折れてしまわないように、そう自分に言い聞かせる。

姉が、特別なだけなのだ。

そうよ、姉さんが特別なだけ。

自己暗示をかける。

『ウイニーといると、まるでフラにいるようで元気になれるわ』

祖母の言葉を、心の糧に思い出す。

「よし！」

こんなところでめげていたら、最後にはアールへの嫁入りだ。

それだけは、彼女は防がなければならなかった。

だから、もう一度奮い立つ。

やっぱり、おじ様に相談しよう！

他の見知らぬ人に当たるより先に、フラの公爵ならば良い助言か、
良い人を紹介してくれる気がしたのだ。

そう考えて、ようやく少し心が軽くなるウィニーだった。

姉の戦い

「公爵になってしまおうとは…残念なことだな」

王太子の指から、ようやく自分の手を離すことに成功したレイシエスであったが、一度近づいた身を、勝手に下げること出来ず、彼の前にかしづき続けているしか出来ない。

「5公爵の娘なら、側室に上がってもおかしくないだろう」

からかっているのではないとしたら、彼女の容姿をひどく気に入ったということだろう。

側室。

王や王太子は、最初から正妃と決めて女性を娶らない。

公爵の子女や王の親族である貴族が嫁ぐことが多く、互いに平等にならないためである。

誰が嫁いでも、嫡子と認められる子を産み、その子が王となって初めて正妃として認められるのだ。

だが、ロアールは、5公爵の中でただひとつ、王に娘を送ったことのない地域。

気骨あふれる守りの地は、媚を売ることなど良しとしない。

だから、たとえレイシエスが跡継ぎでなかったとしても、この男

の希望など叶うことなどないのだ。

いや、正直に言えば危なかっただろう。

王太子が、本気で望めばロアアールに圧力をかけることなど、造作もないはず。

しかし、常識的に考えて、公爵となるべき女を王宮に引きずっていくわけにもいかない。

己の肩書きが、初めてレイシエスを守った瞬間だった。

なのに、王太子はその傲慢な灰緑の瞳を、残酷な色に細めるではないか。

「そういえば、確か……お前には、妹がいたな？」

ぞくつとした。

二つの意味で、だ。

ひとつは。

「妹は、お前によく似ているのか？」

王太子が、妹に興味を示すこと。

「いいえ、まったく似ておりません……指先ひとつ、爪の先ひとつ、まったく似ておりません」

ウィニーを、この男の慰みものにするわけにはいかない。

あの明るい妹が、この王太子とわずかも合うはずなどないのだ。

ぼろぼろに傷つけられるのが、関の山だろう。

ウィニーは、もう十分傷ついたではないか。

妹には、幸せな結婚を――レイシエスの願いの中に、王太子はとて入れられなかった。

「似ていなくても、美しいのか？」

「妹の噂は……聞かれておいではないでしょう？」

ウィニーがこの場にいたら、間違いなく傷ついたらう。

レイシエスに、これほどのことを言われるのだから。

しかし、もし妹が絶世の美女であったとしても、同じことを言うただろう。

それが、彼女を守るためと信じて。

だが、話はそこで終わりではなかった。

「では……」

前よりも更に、ぞっとする。

レイシエスの考える、もうひとつの恐ろしいことを、この男が考えているのではないかと思ったのだ。

「では……ロアアールは、妹が継げばいい」

息が、止まるかと思った。

彼女が一番恐れている言葉を、どうしてこの男は、こともなげに言い放てるというのか。

レイシエスには、公爵になる以外の道はない。

ウィニーが、それに相応しくないと言っているのではなく、レイシエスはそうなるべく、それ以外をすべて捨ててこれまで生きて来た。

今更、別の道など歩けない。

別の道を歩く方法も、歩く靴もないのだから。

自分が、真っ青になっているのは、分かっていた。

その道を奪われたり否定されたりすることが、これほど息苦しく、目の前が暗くなるようなことだとは思ったこともなかった。

「わた……」

言葉が、もつれる。

「わた……くしには……公爵以外の生きる道はございません」

わなわなと震える唇で、それでもレイシエスは言い切った。

どれほどの不興を買うかなど、この時の彼女には考えることが出来ず、それでも言葉にしなければ、とても自分が保てそうになかったのだ。

レイシエスという女の輪郭がぼやけて、霞になってしまいそうに思えた。

キシッと、すぐ側の椅子がきしむ。

王太子が、身を乗り出したのだ。そのまま、青ざめて震えるレイシエスの顔を眺め回す。

「屈辱に歪んだ顔も……美しい。美しいとは、つくづく得だな」

王太子なるものは、かくも残酷に女を辱めるのか。

彼もまた、別の意味で美しい顔をしている。

この世の善の美しさではなく、悪の美しさ。

女の白い肌に爪を立てて、いたぶる習性でもあるのかと疑わずにはいられない酷薄な笑み。

「公爵などという、こんなつまらない地位より……次の王の母になる方が、女としての出世だとは考えないのか？」

こんなつまらない。

その言葉が、痛いほどレイシエスに突き刺さる。

本当に、こんなつまらないことはない。

王太子の前に跪かされ、言葉で罵られ、それでも罵ることも立ち去ることも、許されないのだ。

女に対してこんな人間が、男を相手にしたとしても優しいはずなどない。

父も、どれほど王太子や王に辱められただろう。

しかし、父は耐えた。

耐えた拳句に、身体を壊したのだろうか。

どんなことにも耐え、ロアアールの領民を守るために生きる公爵。

必要以上に、イスト（中央）に媚びることなく、ここまでの歴史を紡いできた北西の地。

媚びないということは、風当たりがきついということ。

これもまた、その中のひとつ。

キツと、レイシエスは上にいる王太子を見上げた。

「私は、どんなにつまらなかつと、必ず公爵になります」

そう。

これが——ロアアールの答え。

ギシと、王太子は椅子の背に身を預けた。

不機嫌なため息をひとつ、あらぬ方へと吐き出す。

「もういい……下がれ」

ようやく、レイシエスはその地獄の場所から、立ち去ることを許された。

ここにいる、ほんの短い時間で、どれほど彼女は苦しめられただろうか。

「失礼いたします」

心の根元まで抉り出され、弄ばれたのだ。

初めて肌で知る、男の政治の世界。

一瞬でも気を抜けば、心をへし折られるか、媚びた方がマシだと思わされる。

レイシエスは、心をはがちに凍らせ、その中にさっきの衝撃を閉じ込めようとした。

今後、あの王太子とずっと付き合っていかなければならないかと思つと、憂鬱を通り越して、床に伏して閉じこもりたくなる。

そんな、酷い精神状態のレイシエスは。

「姉さん、おかえりなさい！」

ウィニーの明るい笑顔で、わずかながらでも救われた。

祖母がそうだったように、彼女も人を明るくする笑顔を浮かべられるのだ。

「姉さん、顔色が悪いけど大丈夫？」

慌てて駆け寄って心配してくれる、丸い瞳。

ウィニーは、確かに美人ではない。

だが、自分の周囲の人たちの中で一番――温かい。

「大丈夫よ……ちょっと緊張しすぎただけ」

その温かさに、ようやく自分が呼吸をしていることを自覚して、レイシエスは大きく息を吐いたのだった。

訪問

姉は、とても疲れているように見えた。

初めての公務は、どれほど精神的な負担だったのか。

ウィニーには、それを推し量ることが出来なかった。

姉が少し落ち着くまで、ふかふかのロア織りのソファで、温かいお茶を飲みながら話をした。

その真つ白だった頬に赤みが戻ってきた頃、ようやくレイシエスは次の行動に出る気になったようだ。

「フラの公爵様のところへ、贈り物を届けましょうか」

明るい話題に、ウィニーもほっとした。

届けると言っても、向こうがそうしたように、召使いが持つて行くだけだ。

それでは、とてもつまらない。

「一緒に、いつご挨拶に伺っていいか、手紙を添えない？」

だから、ウィニーはそう提案してみた。

フラの公爵とは、手紙の方が付き合いが長いのだ。

特にウィニーは、手紙で彼とはとても気さくな付き合いをしてきた。

今日の馬車での出来事は、物語のようにとっても素敵ではあったが、それでもやはり彼は『公爵』で。

手紙と比べると、少しだけ遠くなってしまう寂しい感じなのだ。

「素敵なドレスのお礼も書けば、喜ばれると思うの」

特に、ウィニーはその感謝の気持ちを、より速く送りたい気持ちでいっぱいだった。

王都に来ていなかったとしても、ちゃんと彼女のことを数に入れてくれた、フラの公爵の思いやりは、本当に嬉しかったのだから。

「そうね……もう今日は、大きな用事はないし……手紙でも書きましょうか」

姉も、気晴らしになると考えたのか、ウィニーの案にゆるやかに乗ってくれる。

そうして、贈り物に添えた二人の手紙は、フラの部屋へと送られて行ったのだった。

二人の手紙は、次の手紙を呼んだ。

公爵からの短いそれは、二人のドレスのお礼に対し、喜んでもらえたことを光栄に思うというお返しの言葉と――30分後に、こちらからロアアールの部屋へ伺いたいというものだった。

女性に訪問させるのではなく、自分から出向くというところが、フラの公爵らしいところか。

あの馬車の出来事だけ取っても、十分に彼が行動派であることが分かる。

「まあ、大変」

姉は、慌てて召使いに来客をもてなす準備をするよう、手配を始めた。

「フラの公爵さまお一人よね……」

「違うわ、二人よ」

レイシエスの独り言のような疑問に、ついウィニーは答えていた。

スタッフアの顔が、頭をよぎったからである。

姉に興味を持っている彼が、せっかくの訪問についてこないはずがない。

次の時、わずかながらに沈黙がよぎった。

姉の顔が、ゆっくりとこちらの方を向く。

「……何で、知ってるの？」

とがめているわけではない、本当に純粹な疑問の声を聞いた時、ウィニーはハツとした。

彼女が、非常に不作法なことをしていた時に出会ったのが、スタファだったのだ。

彼との出会いを話すには、その事にまで遡らなければならない。

「ええと……その」

結局、ウィニーは『ほんのちょっと』部屋を出た時に、たまたま偶然、フラの公爵の弟に出会ったと説明したのだ。

「お、同じ赤毛だから……ね？ ほら」

フラの人間を判断する、一番の材料なのだと主張すべく、彼女は自分の明るい髪を指した。

多少の怪訝は残っているようだが、姉はとりあえず納得してくれたようだ。

「でも、一人で勝手に出てはだめよ……皆がフラの方みたいに優しい人ではないのだから」

姉の諭す言葉は、妙に力が入っていた。

まるで、王宮に危険があるかのように。

いや、あるのだろう。

もしも、フラではなくアール（西）の公爵関係者に不作法を見られたならば、ウィニーの失敗は姉の失敗——ひいては、ロアアールの失敗にされるかもしれないのだ。

「はい、ごめんなさい」

小さくなりながら、姉の言うことを素直に聞いていた。

そうこうしている内に、30分などあっという間にたってしまう。

もうそんな時間と驚く間もなく、静かなノックが部屋に響き渡ったのである。

フラの公爵たちが、やって来たのだ。

慌てて出迎えに立つ姉の斜め後ろに、ウィニーも立った。

恭しく召使いによって開けられる扉の向こうから、明るい髪が二つ現れる。

公爵とスタッフだ。

「やあ、私の可愛いはとこ殿たち……熱烈な手紙に誘われて、早速伺わせていただいたよ」

出会えたことと、ドレスへの喜びは沢山書いたつもりだが、彼にとってそれは、熱烈なものに感じたのだろうか。

姉に合わせて挨拶をするウィニーは、ちょっと恥ずかしくなっていました。

そんな二人の元へと近づいて来て、公爵はそれぞれに手の甲への挨拶をしてくれた。

馬車ではおでこだったウィニーは、嬉しくなってしまう。

ちゃんと大人の女性のように、扱ってもらえた気がしたからだ。

「弟のスタッフだ」

場所を譲って、公爵は彼を紹介する。

「スタッフ・フラ・タータイトです……お目にかかるのは二度目ですね」

兄のようにレイシエスの手を取り口づける様は、さっき廊下で笑っていた男とは別人のよう。

気合い、入ってるなあ。

ウィニーは、そっちの方に笑ってしまいそうになった。

「二度目？　もしかして……祖母の葬儀にいらしてくださいだったので」

ウィニーは、すっかりそのことを話すのを忘れていたというのに、聡明な姉はすぐにそれがいつであるか理解したようだ。

「ええ……あの時は、ゆっくり話も出来ずに失礼致しました」

「いえ、私もまだ12でしたから……こちらこそ、ご挨拶もきちんと出来ず申し訳ありませんでした」

熱くまっすぐなスタファアの瞳に、姉は恥ずかしそうにまつ毛を伏せる。

絵のように美しい紳士と淑女の会話とは、このようなもの言うのだろうか。

本当は、馬車の中で姉と公爵を見た時も、同じようなことを思った。

大事に扱われるのが何て似合うんだろうと、ウィニーはじっと姉を見つめてしまった。

そんなスタファアの視線が、こっちを向いた。

びくつとする。

「さっきぶりだな」

明らかなるウィニー用の顔で、彼は近づいてきた。

「そ、そうですね……先ほどは失礼致しました」

ひきつりそうになる唇を何とか我がものとし、彼女は聞こえのよい言葉を綴ってみた。

「不法法もほどほどにな」

とどめの一言と共に、手を取られて挨拶をされる。

今日の鬼門の言葉を、フラの公爵の前ですぱつと言われたことに、深い衝撃に包まれたウィニーは、彼の挨拶など記憶にも残らず風化していく。

ひどい。

心の中でメソメソと泣きながら、彼女はスタファとの出会いを激しく後悔した。

もし、あの出会いがなければ、きっともっと淑女のように扱ってくれたに違いない。

彼の中では、ウィニーは敬意を表するに値しない人間という値札をつけられてしまったのか。

いいんだ、もうこの人は最初から×だから。

二人のフラの男が、ソファに案内されるのを見ながら、彼女は再び心を強くする。

雑草のような心だと、自分でも思う。

へこまないわけではないのだ。

ただ、へこんでいたとしても、何にもいいことはないと悟った結

果、こんな性格になったのである。

×の人を、気にかけていてもしょうがない。

問題は、いつフラの公爵にお願いするか、だ。

姉のいる前では、とても話しづらいこと。

ウィニーは、そのタイミングをこれから探していかなければならなかった。

中庭へ

フラの男たちの話は、とても面白かった。

社交的な性格と、女性への献身の気持ちがあるためか、女性を楽しませる話題を数多く持っているのだ。

おかげでレイシエスは、何度も強い笑いを我慢しなければならなかった。

「雪を持って帰って来いと、スタファに言ったんだがな……手ぶらで帰って来るなんて、あの時は失望したぞ」

「兄上は、雪が溶けることもご存知ではなかったようですから、それを教えて差し上げたのですよ」

弟のスタファも、兄のようによく言葉の回る男だった。

ただし、公爵よりも毒気のある言葉が得意なようだが。

「フラは、雪は降らないそうですが……水遊びは、出来るのでしょうか？」

季節が逆の地域だけに、お互いなものねだりの憧れのような話が交わされる。

これらのことは、手紙でも何度か話に出したことではあるが、こうして言葉でやりとりをすると、また違った趣があった。

「そうそう、子どもの頃はよくずぶ濡れになって叱られたものだ」

「よく、ずぶ濡れにさせられた記憶が、私にはたくさんありますよ、兄上」

仲の良い兄弟だが、少し年は離れているようだ。

スタファが小さい頃は、きっと兄にいじりまわされたに違いない。

聞けば、公爵は27歳、スタファは19歳だという。

二人の間には、更に二人の女性。

「母違いを入れれば、10人は越えます」

付け足されたスタファの言葉に、レイシエスは反応に困ってしまった。

近年のロアールでは聞かないが、王族や一部の公爵は側室を持っている。

確実に男の子孫を残すための方法ではあるが、女の身からすると反応に困る話でもある。

「え？　じゃあ、フラの公爵のおじ様にも、他に女性の方がいらっしやるんですか？」

なのに、きょとした顔のウィニーが、ずばっと聞いているではないか。

その、余りに素直な疑問に、スタファアが向かいのソファで口元を押さえて笑っている。

何という話をしているのか。

驚きの余り、レイシエスは言葉を挟むことも、妹を制することも忘れてしまったのだ。

「そうだよ。正妃は亡くなってしまったが、二人の女性に仕えてもらっている」

だが、公爵は何のわだかまりも見せずに答えた。

レイシエスとスタファアの雑念など、どこ吹く風だ。

ウィニーは、そんな公爵に嬉しそうに笑みを浮かべている。

「よかった……それじゃあタータイトの公爵のおじ様は、お寂しくはないのね」

一瞬、妹が何を言っているのか分からなかった。

「ありがとう……ウィニーは優しいね」

だが、公爵は十分その気持ちを汲んだ瞳で、赤毛の妹を見つめ返す。

「健康的な発想をするものだな」

スタファアは、呆れたような笑ったような微妙な表情で、ウィニー

の言葉に茶々を入れる。

そこまできて、ようやく少しだけ、妹の健康的な発想なるものがレイシエスにも伝わった気がした。

ウィニーは、公爵が正妃を失った事を、きっと自分が祖母を失った事のように思っていたに違いない。

自分が寂しかったように、彼も寂しい思いをしているのでは——それが杞憂であったことが嬉しいのだ。

本当に健康的な発想は、正妃と側室の関係などすつとばし、ただ公爵の幸せだけに重点を置いて考えた結果、出てきたのだろう。

さすがは、ウィニーというべきか。

レイシエスには、とても追いつくことのできない思考だ。

それは、公爵を前よりもこやかにしたように思えた。

楽しい会話が、ひと段落した頃。

「よければ……一緒に庭に出ませんか？」

スタッフアは、レイシエスを外へと誘ってきた。

少し神妙に、しかし、男らしい黒い瞳を強めて自分を見ている。

「花壇で、春の花が咲き誇っていますよ。男一人で愛でるには、少々恥ずかしく思います」

花を見たいが、付き合ってもらえないかと誘っているのだ。

フラの男は、こんな誘い方をするものだろうか。

楽しいスタファと花を見に行くのは嫌ではないが、ここには公爵やウィニーもいる。

二人だけで出かけるのは、おかしいことではないかと、公爵の方へ視線を向ける。

「もしよければ、弟のお相手をしてもらえるかな？ 弟より私の方がよければ、私がご一緒するよ」

「兄上……」

からかうような瞳を向けられ、スタファは軽い睨みを返している。

この申し出は、事前に兄の許可を得ていたことが、そこで分かった。

公爵に失礼にならないというのならば、レイシエスに断る理由はない。

ただ、ウィニーを残して行くことになるため、今度は妹の方を見た。

大丈夫だろうか、と。

目は口ほどにものを言う——ウィニーの目は、きらきらと輝いてこちらに向けられているではないか。

「どうぞ、ごゆっくり」

満面の笑みで送りだしてくれる妹に、腑に落ちない気持ちを抱えたまま、レイシェスは庭に向かうことにしたのだった。

「まあ……」

王宮の中庭には、柔らかな春の花が咲き乱れていた。

ロアールでは、まだ見られない景色だけに、それはとても贅沢なものに思えた。

その花に誘われたのは、何も彼らだけではない。

王宮の女性なのか、はたまた既に到着している公爵家の身内なのかは分からないが、女性が殿方や召使いをともなって、花を愛でている。

「綺麗でしょう？ さきほど、少し散歩に出た時に見ていたのです」

スタファの言葉の『さきほど』とは、ウィニーと出会った時だろうか。

「王宮へは、よくいらっしやいますの？」

「いえ、これで三回目です」

「あら、それでも私より先輩でいらっしやるのね」

四年前に、来たということだろうか。

四年前と言えば、祖母が亡くなった年。

その年のスタファは、とても忙しかったことだろう。

冬の終わりにはイスト（中央）に、そして次の冬の始まりには、ロアール（北西）にいたのだから。

勿論、その冬の始まりとはあくまでもロアールの感覚であって、こちらではまだ秋だったろうが。

「前回までは、まだ姉が一人来ていたのですが……嫁いでしまいましたので、男ばかりのつまらない旅になりました」

「つまらなくはないでしょう、楽しそうですわ」

彼ら二人のやりとりは、先ほど見せてもらった。

あんなに、面白い言葉を交わせるのだ。

つまらないなんて、とんでもなかった。

「それは、女性がいる前だからですよ……子どもの頃から顔を突き合わせている男二人の会話など、女性に聞かせられたものではありませんから」

とても想像できないことを、スタファは苦笑しながら口にする。

「女性同士とは、違うんですね」

明るい色の花から彼に視線を移すと、やはり明るい色の短い髪が視界に飛び込んでくる。

その度に、ウィニーや祖母を思い出してしまう。

「そうですね……女性同士の旅は、さぞ楽しいのでしょうか」

言外に、『さぞ、うるさいのでしょうか』と匂わされた気がした。

その言葉の中に、妹が潜んでいるのに気づく。

既にウィニーと話をしたスタファは、妹の性質を知ったのだろうか。

「そうですね……ウィニーといると退屈はしませんわ」

言外を綺麗にくみ取って、レイシエスはその柄杓を彼へと返した。

「それは……羨ましいことです」

スタッフの含んだ言葉は、どちらが羨ましいという意味だったの
だろうか。

おじ様と私

まさか、こんなに早く公爵と二人きりになれるとは、思ってもみなかった。

ウィニーは、それを喜びながらも、だんだんときどきしてくる自分に気づく。

これから、自分が言おうとすることを、彼はどんな風に聞くだろうか。

そう考えると、胸が苦しくなってくるのだ。

「さてもさても……我が弟は、うまくやれるかな」

出て行った二人を少し気にしたように、公爵は扉の方を見やっている。

「……」

大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせていると、口の方がお留守になっってしまう。

二人しかいないのだから、自分が答えなければ公爵が不思議に思うではないか。

「どうかしたのかな？」

当然、不思議に思われていた。

頬が熱くなってきた、唇が渴いてしょうがない。

と、とりあえず。

「ちよつとご相談があるのですが……」

改まった口調で、そんな音を出してみる。

家の中でも使ったことのない、どこから借りてきたような言葉。

自分の声が、自分のものとは思えなくなってきた。

「大事な話のようだね」

優しい言葉に、ただこくこくと頷く。

首はまだ、ちゃんと動いてくれた。

その上下に揺れた視界で、ウィニーは部屋にまだいる幾人もの召使いを見つける。

姉についていったのは、二人だけ。

他は、まだいるのだ。

「あ、ネイラだけ残して……さがっていいわ」

慌ててウィニーは、祖母から受け継いだ召使い一人を残し、他の部屋へと下げる。

彼女だけは、事情を知っているウィニーの味方だった。

すーはー。

ようやく相談が出来る空間が出来て、ウィニーは目の前に公爵がいるにも関わらず、大きく深呼吸した。

面白そうな目で見られているのは分かってはいるが、いまの彼女はそれどころではない。

「あ、あの……フラの公爵のおじ様……」

心臓の音がうるさくて、自分の声がよく聞こえなくなる。

それでも、きっと公爵には聞こえているだろうから、ウィニーは振り絞った勇気をしっかり握ったまま、身を乗り出した。

「わ……わた……私を妻にもらって下さるような、ご親戚の方はいらっしゃいませんか？」

ウィニー・ロアール・ラットオージエン、15歳。

決死の覚悟で、ついにそれを言いきった。

言いきった反動で、そのつままぐったりとソファに背を投げ出してしまったが。

ぐったりと同時に、公爵の顔を見るのが怖かったのだ。

いま、彼は一体どんな顔をしていて、そしてどんな風に思っているのか。

公爵の娘が、こんなことをよその公爵に願い出るなんて、普通なら絶対にありえないだろう。

そんなことは百も承知の上で、フラの公爵だからこそ打ち明けたのだ。

この気持ちを——理解してくれるだろうか。

「……ロアアールの公爵は、何とおっしゃっているんだい？」

返された言葉は、ごくごく常識的なものだった。

当然だろう。

ウィニーは、ソファの背もたれから何とか身体を話し、きちんと座りなおした。

「父は何も……でも……母は……私をアールにやろうと考えているようです」

父が元気であれば、母の野望も打ち砕かれたかもしれない。

しかし、王都行きをせがんだ時の父は、去年よりももっとやつれていた。

もし、このまま父が亡くなるようなことがあれば、姉が公爵になる。

そうなれば、きっとウィニーはアールに嫁にやられてしまう。

姉は、決して母に逆らえないのだから。

「アールに……それはまた」

各領地の力関係を、よく分かっているだろうフラの公爵は、深く考えるように呟いた。

「おじ様の親戚のどなたかが、一言妻に欲しいと両親に行っていた
できれば、私はフラに行けるかもしれません」

『フラに逃げられるかもしれません』

本当は、そう言いたかった。

祖母の故郷であり、この髪のご郷でもあるフラであれば、いまよりもっと自分が幸せになれるのではないか。

ウィニーは、若く浅はかながらに、そう思ったのだ。

「ロアアールの公爵の奥方は、我々を余り好きではないようだね」

遠く離れていても、それは伝わってしまうのだろう。

ウィニーたちの代で途切れた手紙や、付き合いの端々できつとそういうものは出てしまうだろうし、謁見会のために都に来た父から、何か聞いたのかもしれない。

「ウィニーは……つらい思いをしたらろっね」

優しく情け深い声でそう語られると、簡単に心が流されてしまいそうになる。

でも、どう答えていいか分からなかった。

そうですと言ってしまうと、姉や父に迷惑がかかる気がした。

けれども、大丈夫と言ってしまったら、二度とそんな優しい言葉を聞くことは出来ないように思えて。

「私……この赤毛は、大好きですよ。美人ではないですけど、この色のおかげでいつでも明るい気分になれますから」

結局、変な言葉を並べてしまった。

毎朝、召使いを苦勞させる髪だが、その分、おそらく人よりも長く鏡の前に座ってきたのだ。

毎朝毎朝、鏡に映る明るい髪を見る度、自分を励ましていた。

「ウィニーは、フラの花のように可愛らしいよ。明るい心と、お祖母様の古いドレスを喜んで着る、慎ましい心を持つ優しい女性だ」

最大の賛辞と言っていていいだろう。

公爵にとっては、女性に言い慣れた言葉の一つだろうが、ウィニーにとってはこれまでの自分を、全て肯定してもらった気がしたのだ。

手紙で書いた、祖母のドレスのことまでも、ちゃんと覚えていてくれた。

「ありがとうございます、心から嬉しいです」

おかげで、涙をこぼさずに済んだ。

泣いてしまうには、余りに勿体なさすぎたからだ。

今夜、ベッドの中で何度も何度も言葉を思い出して噛みしめて、幸せだと思うことだろう。

そして。

「ウィニーの嫁ぎ先のことは、前向きに考えさせてもらうよ……大事な可愛いとはと殿の人生だからね。真剣に考えなければ、私が一生後悔するだろう」

フラの公爵は、ウィニーにとって本当に、最高の親戚だと思い知らされた。

こんなにも彼女の行く末を案じて、しかも真剣に考えてくれるというのだ。

光明が、見えた。

ロアアールの長い冬のような、ウィニーのつらい時代の終わりが、フラの公爵の向こうに見えた気がしたのだ。

「ありがとうございます……お忙しいところ申し訳ありませんが、
よろしくお願い致します」

どこから借りてきた言葉だって、いまの彼女はするするっと口
に出せてしまう。

本当は。

『ありがとう、おじ様!』

そう叫んで、彼の首にかじりついて、感謝の抱擁をしたいほどだ
った。

だが、いまのウィニーの中には『不作法』と鳴く赤い鳥がいたた
め、多くの力が彼女を引き止めたのだ。

そうしたら。

公爵は、少し苦笑して。

「ありがとう、おじ様、でいいよ」

ものの見事に、ウィニーの心を読み当てられてしまった。

一字一句違わないのだから、恐ろしいことだ。

それほど、彼女は分かりやすい性格をしているのか。

そのせいで。

「ありがとう……おじ様……」

恥ずかしくなったウィニーは、赤くなりながらもにかむお礼が精いっぱいになってしまったのだった。

フラとロアール

「フラの方は、優しいですね」

レイシエスの動きを、ひとつひとつ助けるようにエスコートしてくれるスタッフに、お礼を含めた称賛を送る。

ロアールでは、屋敷の中にいることの多い彼女は、従者にかしずかれて甲斐甲斐しく世話を焼かれることはあっても、こういうエスコートには慣れていない。

華やかな社交パーティーではなく、軍事的な祝祭を主とする地域のため、礼儀作法の練習以外、ほとんど無関係な世界だったのだ。

「ロアール限定ですよ……フラは、どこにでもいい顔をしているわけではありません」

称賛は、彼を喜ばせたのだろう。

目元と口元にたたえられた笑みは、香辛料の中にわずかに甘みが混ざったような、男性らしいものだ。

その笑みの持つ香りは、レイシエスの胸の中に入り込み、ちりちりと小さくはぜた。

「ひいお祖父様の時代の話かしら？」

ふふふと、思い出したら笑みが浮かんでしまう。

先々代のフラの公爵は、この方のようなのだのかしら、と。

「ええ……いまでもフラの者は、みな覚えています……『無謀公爵』の名と共にね」

黒々とした瞳の中に、過去が閃く。

フラとロアールが、深い縁で結ばれるきっかけとなった出来事。

それは、レイシエスの曾祖父とスタファの曾祖父が、公爵だった時代の話。

当時のフラの公爵は、破天荒な人だったという。

巨大な船を建造して、遠い異国と貿易を始めた、異国の文化にかぶれたり。

そんな彼は、ある日思いたった。

いや、思いたってしまった。

『そう言えば、雪を見たことがないな。よし、雪を見に行こうぞ！』

そして、手紙一つロアールに送ったかと思うと、彼はその手紙の到着を追い抜くほど速く、北西の地に雪見をしに行ってしまったのだ。

ただ、冷たくて白くて綺麗な物。

その程度の考えだったフラの公爵は、雪で覆われた道を見誤り――

―それはもう、見事に遭難した。

フラの馬にフラの護衛、フラの人にしては頑張った程度の厚着、という南の国の公爵一行が、雪に抵抗出来るはずもなく、彼らはばたばたと倒れてしまう。

そこへ、たまたま山手の村に、荷を運ぶ一行が通りかかった。

ただの行き倒れかと思ったら、馬車は立派だし、ほとんどの人が赤毛だし、これは何かやんごとなき理由に違いないと、村までまだ遠いこともあって、慌ててその場で火を起こし、彼らに常備しているきつい酒を飲ませた。

何とか意識は取り戻したものの、やはりとても自分で動ける状態ではなく、彼らは荷馬車から大事な荷を下ろし、場所を空けて彼らを村まで連れ帰ったのだ。

亡くなった人もいたが、フラの公爵は何とか無事で、その後に連絡を受けたロアアールの公爵家に、呆れられながら運ばれて行ったという。

その時のことを、フラの公爵は忘れられなかったらしい。

『あれほど寒いところで暮らしているならば、荷は命と同じほどの意味があるう。それを捨ててまで、助けてくれたロアアールへの恩は子子孫孫まで忘れんぞ』

何度も何度も礼の手紙と贈り物を寄こし、ついにはその後、後継ぎだった祖父に、娘まで送って寄こしたのだ。

それが、彼女らの祖母である。

『側室でも構わん』という、恐ろしい手紙をつけて送られたフラの公爵の娘は、幸いにしてまだ結婚していなかった祖父の、妻としておさまることが出来た。

そして、『フラの無謀公爵と、優しきロアアールの民』なる話は、フラに広く伝わり、物語にまでなったという。

後に、その物語には続きが出来た。

二十年ほど前。

ロアアールの姉妹は、まだ生まれてはいなかったが、父が公爵を継いですぐの時代。

大陸から、ロアアールへ大がかりな侵攻が行われた。

代替わりの不安定な時期に加え、ようやく遅い春を迎え、ロアアール中が忙しかったその時を狙われたのだ。

防御戦に強い地域ではあるが、敵はしのぐのが難しいほどの多勢だった。

父は、ついにロア（北）とイスト（中央）へ使者を送り、援軍を乞うたのである。

かくして、一番最初にロアアールへ増援に駆けつけたのは——フラの騎馬隊であった。

走りに走ったり、拳の南の果てから北西まで駆けつけたのである。

父は、フラに救援は送ってはいない。

送ったのは――祖母だった。

父が、増援を乞うかどうか迷っていた時には、既に手紙は送り出されていたのだ。

祖母が国から連れて来た老いた召使いが、命がけで単身フラまで手紙を抱いて駆け抜けたのである。

『今こそ返さん、かの日の大恩を』

先代のフラ公爵からの手紙は、その一文のみだった。

赤毛の騎馬隊を、敵は知らなかった。

これまでフラの兵は、国境の戦いに参加したことはなかったのだ。

イストの拳の王を最後まで苦しめた、魔物のごとき強さは昔話ではなく、侵攻する敵をことごとく敵を蹴散らしたのだ。

『赤い槍の群れのようにであった』

父の記憶の中の光景は、言葉でレイシエスへと伝えられた。

「お礼は、二十年ほど前に、既にしていただいたのに……まだ覚えて下さっているんですね」

その出来事のおかげで、ロアールの軍の者は、フラに対する態度大きく変わった。

今日、馬車がかち合った時も、護衛隊がフラの馬車だと確認するや、すぐさま攻撃的な態度をやめたのもこのおかげだろう。

残念ながら、ロアールではフラの援軍は、物語にはなかったが。

軍人と、国境近くの村の間だけで、語り継がれているくらいだろう。

「ええ…あれはうちの曾祖父を助けて下さったお礼です。あと……うちの曾祖父が迷惑をかけた分のお詫びが終わってません」

苦笑いしながら、スタファは己の曾祖父を荷物のように言い放った。

「まあ……」

不敬な物言いに思えたが、陽気なフラの侯爵家で、『冗談のように『無謀公爵』の話が語られている様子は、何故か簡単に想像がついた。

さぞや、かの人は身内に迷惑をかけまくったのだろう。

「お詫びなんて……もう十分ですよ」

想像するとおかしくて、ついくすくすと笑ってしまう。

そんな彼女を、スタッフはまっすぐに見ていた。

あの王太子の目を見た後だと、彼の目は暗くとも美しい夜空のように見えるほどだ。

「いつでもフラは、ロアールの味方です」

南の風をはらんだ言葉は、レイシエスの心に優しく絡みつく。

「ありがとうございます……その言葉、髪の手ほどきも疑ってはおりません」

遠い地の、普通であれば無縁の公爵。

しかし、遠いからこそ利害を超えてつながることもあるのだ。

これほど良好な関係は、大事にしたい。

だが。

「もしよろしければ、今度ロアールへ遊びに行ってもよろしいですか？」

まっすぐなスタッフの言葉は、レイシエスの心を少し重くした。

彼のせいではない——母のせいだ。

妹の話

「迷惑ですか？」

浮かないレイシエスの表情を見たスタッフは、少し心配そうな眉になった。

「いえ……そうではないのですが……」

どう、レースにくるんで話そうか、彼女は迷う。

母は、フラを嫌っている。

勿論、外交上の問題だから、表立って好き嫌いを言うことはないだろう。

しかし、しわ寄せはすべてレイシエスに来るのだ。

母のしわ寄せの重さは、なかなか辛いものがある。

「フラは、ロアールに片思いですか？」

更にスタッフに押されて、彼女はすっかり困ってしまった。

ついに、彼女はひとつの決断をする。

「実は……母と祖母は、余り仲が良くなかったんです……」

遠回りの話で、彼に分かってもらえないだろうか、とそこを打ち

明けたのだ。

ロアール全体では、決してフラをないがしろにしているわけではないのだと。

「ああ……」

ふと、声のトーンが落ちた。

彼の心のトーンが落ちていくのと、同じもののように思えて、はっと彼を見る。

美しい花を見つめながら、彼は半目になっていた。

「なるほど……分かりました」

明らかなる不機嫌が、そこには隠れている。

自分の選んだ言葉が失敗だったと、レイシエスが後悔し始めた時——彼の言葉は、あらぬ方へと飛んだのだ。

「だから……ウィニーだけ違うのですか」

ぞくつと、した。

花に怒りを落とすように、それが呟かれる。

怒りの向いている先が、自分ではないことは分かった。

しかし、優しいフラの人の表情に、怒りが閃く瞬間を見てしまっ

ただ。

大きな落差に、心臓が止まるかと思った。

「あなたは、完璧な礼儀作法を身につけておいでだ……とても美しい。しかし、ウィニーは、まるでフラの町娘のようだ」

彼がウィニーに言っていた、無作法というもののことだろうか。

それは、あれは——何を言っても、言い訳にしか過ぎないことは、自分が一番よく知っている。

放っておかれた。

放っておかれているのを知っていながら、レイシエスも妹を放っておいた。

一応、最低限の教師はつけられていたが、それが何だというのか。期待もされていなければ、愛のある叱りもない中で、どれほど人は成長できるというのだろうか。

そんな思いが、心の中を駆け巡ったレイシエスは、知らず酷い表情を浮かべていたようだ。

スタッフアは、微かに首を傾けて目を伏せた。

「すみません……同じ赤毛のせいで、無意識に同族だと思うクセが出ました。ロアールには、ロアールのしきたりがありますね」

余計な口を挟みましたと、スタッフアは困った眉をする。

曾祖父の時代、あれほどフラが感謝を表した理由が、彼を見てみるとよく分かった。

とても、情に厚いところなのだ、かの地域の人は。

祖母にさかのぼる長い手紙のやりとりでも、それが十分に伺えるではないか。

赤い髪というだけで、ロアールで冷遇されている妹に、すぐに気づいて、そして怒ってあげられる人たちなのだ。

彼らにとつて、ウィニーの冷遇は祖母の冷遇と、きっと同じように感じるのだろう。

「いえ……あなたの思っていることは、本当です。私は、頼りない姉で……妹一人、守れていないのです」

髪の色こそ違え、同じ両親から生まれた身内も守れない自分が、ひどく恥ずかしく思える。

だが、こんな人なら。

いや、こんな人がいるからこそ、ウィニーに希望があるのではないか。

「もし……あなたが嫌でないのなら……ウィニーをお嫁にもらってくれませんか？」

これほど、同族に情の厚い彼ならば、妹をきつと幸せにしてくれるのでは——そう思ってしまったのだ。

不躰な願いだとは、分かってはいる。

両親に叱られるかもしれない、勝手な話なのは分かっている。

それでも、ロアールではウィニーは幸せになるのは難しいのだ。

母が生きている限り、それはない。

ならば、それならばいつそ、フラに託すという手があるのではないか。

レイシエスは、本気でそう思ったのである。

スタファアは、険しい表情に変わっていった。

それほど多くはない、いくつかのことを考え、そして余り良い結論にたどり着かなかった——そんな表情。

「残念ですが……私は、あなたの妹を幸せにすることは出来ません」

返事は、表情通りというべきか。

本当に残念とは、きつと思っていけないだろう正直な声音が、ゆるやかにレイシエスの胸を刺す。

既に結婚相手が決まっているか、心に決めた人でもいるのだろう。

「そうですね……忘れてください。あ、ウィニーには、このことは……」

フラの男性に、結婚の話を断られたと聞いたら、妹の心の傷がひどいものになる気がした。

ウィニーは、自分の容姿にコンプレックスを持っている。

それくらい、気づいていた。

母の言葉と、自分がいつも近くにいるせいだ。

だから、どれほど彼女が可愛らしいかレイシエスが言っても、決して妹には通じない。

その言葉は、本当に彼女を愛した他の者から伝えられなければ、何の意味もなさないだろう。

「分かっています……ただ、あなたがそれほど妹を心配していらっしやるのなら……フラでよい嫁ぎ先を探してみましよう」

代わりに出された言葉は、とても魅惑的に思えた。

ウィニーがフラに嫁ぐ。

それだけで、彼女が幸福のように感じたのだ。

だが、顔も知らない、誰かも分からない相手に嫁がせることを考えると、まるで自分が厄介払いをしているように思えてしまう。

フラなら、どこでもいいわけではない。

妹のことを深く考えすぎたレイシエスは、こめかみを押さえた。

軽い頭痛を感じたのだ。

ずっとスタッフが、身を支えてくれる。

「大丈夫ですか？」

優しくも情熱を秘めている男。

彼が、ウィニーを望まなかったのは、本当に残念なことだとレイシエスは思った。

これほどの扱いをしてくれる男であれば、妹もきつと幸せになれるだろうに。

「はい……」

微かに震える唇で、彼女は小さく答えた。

「部屋に、戻りましょう」

スタッフは、彼女の腕を取ると、美しい春の庭を後にしようとした。

後半、ほとんどその景色を愛でる間もなく、彼と妹のことで頭がいっぱいだったレイシエスは、最後に一度だけ庭を振り返る。

ロアールには、まだ遠い美しい花園。

自分たちの幸せもまた、遠いのだろうか。

彼女は、すっかり気落ちしてしまった。

スタファの事情

「お前……ウィニーを妻にする気はないか？」

兄——カルダにそう言われた時、スタファはがつくりと肩を落とした。

今日は何て日だ、と思いながら。

ロアアールの部屋から帰って来て、すぐの出来事だった。

「今日、私にそう言ってきたのは、兄上で二人目だ」

上着を脱いでソファに身を投げ出しながら、彼は天井を見上げた。

ウィニーが、嫌いなのではない。

彼女のことは、髪の色のせいか同族のように思えるところがあつて、気にかかつてはいるが、それは恋ではないのだ。

「ああ、レイシエスがそう言ったのか……彼女も心配しているのだろっ」

物思いにふけるように、兄は小さく吐息をついた。

「お前は、本気でロアアールの未来の公爵の婿になる気か？」

カルダは、そんなソファのひじ掛けに腰かけながら、弟を見下ろす。

子どもの頃から、8つも年上の兄と競って来たが、大人になるまでほとんどの事で勝つことなど出来なかった。

最近、ようやく乗馬と剣術で越えることは出来たが、スタファの心には、負けず嫌いの根性が深く深く根付いている。

「可能性はあるだろう?」

彼女は、自分に良い感情を持っているのは、一緒に歩いてよく分かった。

でなければ、自分にウィニーを勧めるはずなどない。

あの時の彼女の目は、本気だった。

本気で、妹を自分に託そうとしていたのだ。

自分に対する信頼が、そこにあるように思えた。

「可能性か……公爵の奥方を乗り越えられれば、あるかもしれんな」

カルダの言葉に、自分の顔が歪むのが分かる。

娘たちに、どれほどひどいことをしているのか。

それは、レイシエスの態度と言葉を見れば、嫌でも伝わってくる。

趣の違う姉妹——そんな言葉では片づけられない、母親が決つただろう二人の間の溝。

その溝を越えてなお、仲良くしようという気持ちがあったことが奇跡で、彼女ら姉妹の性質のよさを表している気がした。

スタファが、心を奪われているのはレイシエスだ。

15の時、葬儀の会場で彼女を初めて見た。

12歳とは思えない、すらりとした彼女の立ち姿に、最初に目を奪われた。

白い肌に、黒い喪服の闇が絡みついているように感じて、彼女から目が離せなかったのだ。

そのまま、闇に飲み込まれてしまうような儚さを、そこに感じた。

フラにはない、かき消えるような線の細さ。

沈痛な面持ちの彼女が、泣きじゃくる妹を見る時だけは、深い慈愛に満ちた色になる。

彼女が、決して冷たい人ではないことが、そこから伺いしれた。

あの日からスタファの心には、ロアールの美しい娘が焼き付いているのだ。

兄が、二人と文通をしていると聞いた時、どれほど羨ましく思ったか。

しかし、カルダは弟には決して、レイシエスの手紙を見せようと

はしない。

確かにそれは常識的な行為ではあるのだが、兄を恨めしく思ったこともあった。

『お前も、手紙を出せばいいだろう?』

あっさりと兄にそう言われたが、スタファは腰が重かった。

手紙は、ウィニーの名で送られてきていた。

あの、泣いていた赤毛の妹だ。

スタファは、妹に手紙を出す気はない。

だが、ウィニー宛てに手紙を送りながら、中身はレイシエス宛だと、余りにあからさますぎる。

それに、レイシエスではなく妹の名で送られる手紙の事情から、何か障害があることを感じていたのだ。

「しかし、お前が駄目となると…フラで相手を探すのは難しいかもしれない」

うーむと、カルダは唸った。

4年前から流れて来た記憶を握っていたスタファは、そこでようやく現実へと足をつける。

個人的な興味はないが、祖母の血を濃く残す赤毛の娘だ。

恩義あるロアアールの娘でもあるウィニーに、いい嫁ぎ先を考えてやるのは、良い事だと思っていた。

レイシエスに感謝もされるだろう。

「他の弟じゃ駄目か？」

スタファアの頭には、腹違いの弟たちが通り過ぎて行つた。

「曲りなりにも、ロアアールの公爵令嬢の相手だぞ……いくら公爵の息子とは言え、腹違いで納得させられるかどうか」

兄は、ロアアールの公爵夫人の壁を、それほど厚いと読んでいるのか。

娘を嫁がせるということは、今後もフラとの付き合いが深くなるということだ。

フラ嫌いの夫人が、フラからの申し出を喜んで受けるとは思いたい。

よほど断りづらい相手でなければ、確かに難しいだろう。

5公爵の娘であれば、王太子の側室にもあげられるほどの身分なのだから。

側室ではない、正妃から生まれた娘なら、なおのこと。

側室の子どもたちは、明らかに正妃の子とは違う扱いを受ける。

それは、勿論フラでも同じだ。

兄弟というよりは、臣下との付き合いに近くなる。

血筋は間違いないため、勉学や軍事の訓練にいそしめば、高い地位もある程度約束されていた。

それを考えると、あの気楽なウィニーであっても、格の落ちる相手であることは間違いないだろう。

「何も、フラにこだわらなくてもいいと思う。たとえば、せっかく王都にいるから、王太子に勧めてみるとかどうだろう」

スタッフのこの言葉は、半分は本気、半分は冗談だった。

フラ以外の可能性を示唆したかったのが、本気の方。

ウィニーの礼儀作法では、多分難しいだろうというのが、冗談の方。

「馬鹿なことを言うな……王太子殿下の相手なんてさせたら、ウィニーが壊されるぞ」

冗談でも許し難いと言わんばかりに、カルダは唸った。

赤毛の娘が問題というわけではなく、どうやら王太子の方が問題のようだ。

直接話したことも、それどころか会ったこともない相手のため、

どついう壊され方をするのか、まったく想像がつかなかった。

ただ、ウィニーが幸せにはならない——それだけは、十分に伝わってくる。

「となると弟殿下か、ニール（東）の公爵の孫か……いや、ニールは年が合わないな」

王太子は問題だが、その弟たちならまともな者もいるようだ。

兄は、ぶつぶつと赤毛の娘の嫁ぎ先について、口の中で呟いている。

「だが……本当はフラに嫁がせたい気持ちでいっぱいだよ」

そんな呟きに、ついに終止符を打ちながら、カルダはため息を洩らす。

その気持ちは、スタッフアでもよく分かった。

フラの公爵家だけでなく、領民がウィニーのフラ入りをどれほど喜ぶか。

想像するのは、簡単だった。

『無謀公爵』の赤毛の娘は、ロアールへ嫁いだ。

その孫が、偶然赤毛に生まれて、そしてフラへ嫁いでくる。

あの物語を、そして二十年前の出来事を知っているフラの領民は、

まるで自分の恋の成就のように、ウィニーの婚礼を喜び、そして再び運命の物語でも書きあげるに違いない。

ロアアールにいた彼女からは、信じられないほどの歓待が待っているだろう。

しかし、フラにはロアアールの公爵の令嬢を受け入れる席がない。

「スタファ……」

「くどい、兄上」

弟の心変わりを望む呼びかけの声など、すぐに分かる。

身内への情に厚い分、フラの人間は、身内への甘えもあるのだ。

「大体、私がロアアールに婿に入るのも、おそらく向こうの公爵夫人以外には、歓迎されると思いますよ。勿論、フラの領民にもね」

打倒・ロアアール公爵夫人。

スタファの心の中では、自然とそんな文字が踊り始めていた。

レイシエスの表情を、あれほど暗くさせる人。

その女性さえ黙らせてしまえば、ウィニーの心配も格段に減る気がした。

求婚の中から、一番いい嫁ぎ先をゆっくり選べるだろう。

しかし、他家の夫人に心変わりをさせる方法など、いまのところ
ありはしなかった。

「お前の心配はしてない。いっそ、さっさとレイシエスに求婚して、
断られてこい。ウィニーには内緒で」

最後の一言で、よくよく兄の気持ちが分かった。

そして、ウィニーを嫁にもらえと言っているのだ。

「じっくり時間をかけさせてもらっよ、兄上」

そんなカルダの希望など、スタファアは思い切り蹴飛ばしたのだっ
た。

夕日の庭

「姉さん……ちょっと花を見に行ってもいい？」

ウィニーは、そつと姉の寝室に入つてそう聞いた。

長旅の疲れと、公務の精神的な負担が響いたのだろう。

姉は、頭が痛い今日は早々寝室へと入ってしまった。

時間は、夕刻。

まだ、太陽は夕暮れの位置で、沈み切つてはいない。

ウィニーはおとなしくしてはいたのだが、一人で寂しい思いをしていた。

フラの公爵との時間が、楽しすぎた反動だろうか。

「場所が……分からないでしょう？」

ベッドから半身を起こしながら、青い顔でレイシエスは止める。

「あ、大丈夫。ネイラが、行き方は分かっているみたい」

召使いは、主の遣いで部屋からよく出る人間だ。

そのため、王宮の出入り出来る場所は、ロアールを出る前から、彼女らには教え込まれている。

彼女の召使いのネイラも、ぎりぎりで王都に来ることが決まったが、ちゃんと下調べはすませてくれていた。

「そう……大丈夫？ 私も行きましょうか？」

「平気よ、姉さん。ちょっとだけ、花を見てくるだけだから」

おそらく姉は、ウィニーの身よりも『不法』を外にさらけだす方を心配しているのだろう。

スタッフの一件で、それは十分懲りたので、今度こそはちゃんと公爵の娘らしくしとやかにすればいいだけ。

「ネイラも一緒に連れて行くから、姉さんはゆっくり寝てて」

「そう？ 気をつけて……早く帰ってらっしゃい」

心配そうな視線は消さなかったが、最後にはようやくレイシエスは折れてくれた。

おそらく、庭が本当に美しかったのだろう。

そして、気楽に散策できる場所だったに違いない。

姉の許可に、少しほっとしながら、ウィニーは召使いのネイラを連れて部屋を出たのだった。

初めて、一人で出歩く王宮に、わくわくする。

そのわくわくに、ウィニーは必死に重しをつけた。

公爵令嬢らしく、公爵令嬢らしく。

自分に呪文をかけながら、彼女はしずしずとネイラの誘導通りに廊下を歩いて行った。

これから少しずつ夜に変わっていく時間のせいか、お偉い方々は既に部屋に戻ってしまったようだ。

おかげで、すれ違いの会釈や挨拶など、ほとんど無縁で通ることが出来た。

ようやく、庭に降りられるところへたどりつくと、ちょうど西側を向く形になり、強い夕日が眩しくウィニーを襲う。

この季節、ロアールでは考えられない、光の強さだ。

本当に遠くまで来たのだと、肌で思い知る瞬間でもある。

その夕日に照らされ、春の花はオレンジがかった赤に燃え上がっているようだった。

本当の色は別にあるだろうに、全てその色に染め上げられているのだ。

まるで、自分の髪の色のような世界。

そう思うと、少し上機嫌になって、ウィニーは庭へと下りた。

自分の色の世界であれば、きっと自分に優しいに違いないと、根拠のない自信を持ちながら。

「わあ……」

黄色もピンクも白も、みな赤く彼女を迎え入れる。

彼女は、花と夕日に包まれて、とても幸せだった。

「夕日の精か？」

そんな——男の声が聞こえてくるまでは。

庭の真ん中ほどにきたウィニーは、驚いて西を見た。

声はそちらから聞こえて来たが、その眩しい夕日のせいで、誰がよく分からなかったのだ。

誰、だろう？

ぽかんと、近づいてくる人を見ていたウィニーは、はっと我に返った。

たとえ誰であれ、ここは王宮で、そして庭を散策できる身分の人であることは間違いない。

姉ならまだしも、ただのオマケでついてきたウィニーより、身分が低いはずがなかった。

「失礼いたしました……」

慌てて、近づいてくる人に腰をかがめて挨拶をしようとすると。

「ドレスを汚したいか？」

腕を無理矢理取られ、強い力で立たされる。

それほど近くまで寄られたとは思ってもせず、ウィニーは驚きで心臓が止まりそうになりながら、慌てて目の前の男を見上げた。

ああ。

さすがの太陽であっても、黒は染められない。

自分に影を落とす男の髪は、柔らかくも美しい闇の色。

無表情にも不機嫌にも見える瞳の色は、影のせいでよく分からない。
い。

そんな男に。

「本当に赤いな……フラの娘か？」

突然、前髪が——引っ張られた。

「いたっ」

びっくりした。

いきなり、初めて出会った女の髪を引っ張るなんて真似をされる

とは、思ってもみなかったのだ。

「な、何を……不法法だわ」

今日、さんざんウィニーが言われたその言葉が、反射的にぼろっと飛び出してしまった。

慌てて口を押さえるが、時は既に遅い。

「不法法？ 私が不法法なら、お前は無知で無教養で、そして時代遅れのドレスを来ている田舎者だ」

言葉は、まるで刃物のようだった。

ひとつ目の痛みに気を取られていたら、容赦なく次々傷つけられ、もうどれがどれの痛みやら分からなくなってしまっている。

時代遅れのドレス。

その言葉が、一番悔しかった。

無知で無教養は、それは十分身にしみている。

これは、ウィニーが勉強を真面目にやらなかった罪だ。

田舎者も、本当のことだろう。

だが、ドレスの悪口だけは、彼女の怒りを跳ね上げてしまった。

「これは、お祖母さまが遺してくれた、大事な大事なドレスよ！

このドレスが時代遅れというのなら、私は時代になんか乗らなくて
もいいわ！」

カッとなったウィニーは、この失礼な男の言い様の、その一点に
噛みついていたので。

悔しくて悔しくて、これ以上切りつけられる言葉を投げられるの
に耐えきれず、彼女は踵を返した。

速足で花園を後にする。

召使いのネイラが、慌ててついて来ているのを気にもかけられな
いまま、ウィニーは自分の部屋へと急いで戻ったのだ。

もう絶対、フラの人以外とは会わない！ フラの公爵の部屋以外
行かない！

そう固く心に誓いながら、彼女は夕食も無視して、フテ寝をする
ことに決めたのだった。

赤い髪の記憶

フラの公爵は、王太子との謁見をようやく許された。

まさか、夕食も過ぎた後の時間になるとは思ってもみなかったが、身なりを整えて王太子の謁見室へと向かう。

正直、もう明日になるだろうと思っていた。

王太子はとても気まぐれで、性質が余りよろしくない。

その上、頭だけは切れるせいで、本当にタチが悪かった。

だから、こんな常識はずれな時間の呼び出しにも、何か意図があるのではと思ったのだ。

ウィニーと二人で話している時、既にレイシエスが挨拶に行つたことは聞いていた。

妹である彼女には言わなかったが、それを良い事だとカルダには思えない。

どうせ王太子も、レイシエスの噂に釣られたのだろう。

その謁見が、うまくいったかどうかは分からないが、少なくともフラの公爵と会うことは先延ばしにしたようだ。

「ご機嫌いかがですか、王太子殿下」

謁見室の椅子にふんぞり返っている男に、カルダは恭しくも穏やかに挨拶をし、言葉をかけた。

彼が公爵を継いだのは去年だが、父の体調の関係で、2年前にも代理で来ていた。

だから、これが二回目の謁見ということになる。

椅子の上からこちらを見降ろす視線は、カルダの頭に不躰に注がれている。

「相変わらず赤いな……妹はいるか？」

フラの髪が赤いのは、今の始まったことではないというのに、今更どうしたというのだろう。

しかも、いきなり身内の話に振られる。

「おりますが……二人。しかし、どちらも既に嫁ぎました」

赤毛の女にでも、興味が出てきたのだろうか。

側室に寄せせと言われる前に、カルダは先手を打った。

この王太子に、可愛い妹たちをやるものかと思いつながら。

目をつけられる前に嫁に出しておいて、本当によかった。

胸をなでおろしていたカルダであったが、王太子が不機嫌な表情に変わっていくのが見える。

「お前は、嫁いだ妹まで連れてきているのか？」

常識外れを、咎め鬨るように王太子は言葉を投げる。

「おっしゃっている意味が、分かりかねます」

カルダは――慎重に答えた。

余り不機嫌になれりと、後が面倒だからだ。

アール（西）の公爵が、2年前の謁見会で、酒の入った杯を頭上でひっくり返されるという事件があった。

勿論、彼の頭に酒を飲ませようとしたのは王太子だ。

晩餐の席での話である。

あのおしゃべりな公爵に、そうしたくなる気持ちも分からないではないが、人前で大恥をかかされた彼は、カンカンに怒っていた。

勿論、怒ったところで王族に逆らうことも出来ず、王に苦情を陳情するのが精いっぱいだったようだ。

そのおかげか、王太子の前でアールの公爵は、無駄に口を開けなくなっただけか。

とにかく、この王太子を不機嫌にすると、ロクなことがないのだけはよく分かっていた。

「赤毛の娘を、連れてきているだろう？」

これ以上、しらばつくれるなどとも言わんばかりに、強い言葉でカルダを串刺しにしようとする。

赤毛の、娘。

一瞬、真っ白になりそうだった意識を、カルダは何とかとどめた。思い当たる人物は、たった一人しかいなかったのだ。

ウィニーである。

一体、どこで会ったのか。

少なくとも、その髪の色だけで王太子がフラに探りを入れるということは、ちゃんと話をしたわけではなさそうだ。

彼女——ウィニーが、自分をフラの人間だと言わずなどないのだから。

しかし、悪い気配が大挙してカルダの足元に集まってくるのが分かった。

もし、ここで彼女がロアアールの娘であることを知ったら、ロアアールの姉妹がとても不幸になる気がしたのだ。

レイシエスは、まだまだ公爵を務めるには、精神的に育ち切っていない。

そんな彼女では、おそらく王太子に妹を取り上げられようとしても、抵抗出来ないだろう。

それどころか、姉妹のお互いの気持ちを利用して、二人とも手に入れかねなかった。

「いいえ……殿下。私が連れて来ているのは、第一人でございます……髪の色をお間違えではありませんか？」

慎重に、本当に慎重にカルダは言葉を綴った。

この男の視界から、ロアアールの姉妹を隠してしまうように。

「確かに赤……いや、夕日のせいかな……もういいさがれ」

フラの公爵に、じっと見られているのに気づいた王太子は、眉間に皺を深く刻んで彼を追いつ出した。

ありがたい事に、これで慣例の挨拶は終わりにしてくれるようだ。

謁見室を出て自室へと戻りながら、カルダはゆっくりと安堵の息を吐き出した。

とりあえずの問題は、回避出来た。

だが、まだ安心できた訳ではない。

おそらく、王太子の気まぐれな興味だろうが、今度ウィニーと会えば、どうなるか分からない。

参ったな。

どこで、王太子に見られたのか。

部屋に戻って、召使いに酒を持ってこさせていると、スタファがやってきた。

まだ部屋着にも着替えていないところを見ると、彼の戻りを待っていてくれたようだ。

「珍しい、兄上がそんな疲れた顔をしてるなんて」

顔を見るなり、驚かれた。

王太子のあの発言は、よほどカルダを疲れさせていたようだ。

「赤毛の娘について聞かれた」

蒸留酒のグラスを受け取りながら、カルダは弟にさっきの出来事を語った。

スタファの反応は、ただの一言。

「あの馬鹿……」

弟らしい、分かりやすい一語に、全てが凝縮されていた。

勿論、それは王太子に向けられたものではなく、彼らの愛すべきはそこへのものなのだ。

「また、ふらふら外に出たのか」

弟はそう言うが、カルダはそこを責める気はない。

まだ15歳なのだ、ウィニーは。

好奇心も旺盛だし、初めての王宮で浮かれているところもあるだろう。

ただ、彼女は女性なのだ。

レイシエスと一緒にいるからこそ、ウィニーは自分の容姿を平凡なものだと思っているだろうが、決して悪いわけではない。

年の頃も、そろそろ結婚の話が出てもおかしくない。

迂闊にその姿を人にさらすと、どこから婚姻の話が来るかわからないのだ。

それが、ウィニーの望むものであれば、カルダも反対はしないが、残念ながら王太子が釣り上がることもある。

「今度会ったら、二度と部屋から出ないように言っておこう」

レイシエスびいきのスタッフからすると、ウィニーの行動は姉の評価を落とすものだとは判断したようである。

公爵代理で葬儀に出席させたら、ロアアールで恋の風邪にかかってきた弟だ。

そんな彼にかかれば、ウィニーは自分の妹のような扱いになる。

赤毛同士の親近感ゆえだろう。

兄弟の中で一番末の子だけに、自分より下の面倒を見るのは、そう嫌いではないようだ。

「そうだな……余り出ない方が、ウィニーのためだろう」

弟にはまだ、王太子がレイシエスだけ特別に、最速で謁見した話
はしていない。

したところで、スタッフにはどうすることも出来ないし、王太子
への余計な恨みを蓄積するだけだろう。

それより、まだ弟にウィニーを守らせておく方がいい気がした。

弟が彼女のことを好きになれば万々歳——などということは、も
はや考えていない。

フラの男は、愛が強い。

一途な愛ならば、どこまでも貫き通す。

いっそ、強すぎると言ってもいい。

だからこそ、カルダは正妃を持ちながら、二人の側室も持ったの
だ。

正妃一人にぶつけるには、愛が強すぎて女性を壊してしまいかね

なかった。

実際、正妃は身体を壊してしまったではないか。

正妃に最初に子を産んで欲しかったため、誰よりも多くの愛を注ぎ続けた拳句の結果だとするならば、彼女が亡くなった大元の原因は、自分にあるのだろう。

それほど愛の深い血筋のため、もはやスタファの心が動かないことは分かった。

だが、妹のようにウィニーを守れば、それが結果的に彼の愛するレイシエスとロアアールを守ることになる。

「ウィニーが部屋を出てしまうのは、退屈だからだろう……ちよくちよく遊びに行つてやれ」

「私が子守？」

兄の言葉に、少し不満そうではあったが、それでもウィニーを口実にレイシエスに会う機会が増えるという考えに至ったのは、カルダの目からも非常によく分かった。

「分かった……ウィニーの子守をしよう」

しばしの後――弟は勿体ぶりながらそう答えたのだった。

兄さん

翌日――何故かスタッフがやってきた。

ウィニーの部屋に、だ。

姉は、まだ調子がよくなく、隣室で横になっている。

そんなつまらない午前中、何の前触れもなく現れたのだ。

「人のこと、無作法って言えるんですか」

まったく淑女に対する扱いをしてくれないスタッフに、彼女は不平をぶつける。

召使に慌ててお茶の用意をさせながら、彼をソファへと案内した。

「昨日、私たちが戻った後……部屋から出たろう？」

しかし、切り返された言葉は、彼女をギクリとさせる。

昨日の記憶を最悪の最後で締めくくった男が、目の前を駆け抜けたのだ。

ベッドで散々、その男のことをなじりながら眠ってしまったのだが、朝起きて

みたら怒りよりも違うものが押し寄せてきて青ざめた。

もしかして、自分はとんでもないことをしたのではないかと。

彼が誰かは知らないが、姉よりも身分が高かった時、間違いなく迷惑をかけるだからだ。

公務の重圧にふせっている姉を、朝ちらつと見て、その罪悪感はいり知れない。

いまのレイシエスに、昨日の自分の失態など、とても告白できなかった。

「ちょ……ちょっと花を見に行っただけです」

昨日の外出を、何故スタッフが知っているかは分からないが、花を見に行っただけという点では彼も同じではないか。

悪いことをしたわけではないのだと、とりあえず主張してみる。

彼は、はあーっと深い深いため息を落としたのだった。

全身で呆れているかのように、ウィニーには見えた。

「だから、私が来たんだ」

自分の連れて来た召使いを、スタッフは呼ぶ。

召使いは、ずっと手に持っていた箱を、二人の間のテーブルの上

に乗せた。

「ウィニーを退屈させると、何をするか分からないからな」

彼が箱を開けると、そこからはカードだのチェスだのダイスなどが出てきた。

いかにも、これで遊べと言わんばかりに。

こつこつ遊びというのは、大抵相手が必要だ。

一人でカードをするような趣味は、ウィニーにはない。

「昔、お祖母さまが教えてくれたカードくらいしか……遊び方はよく分かりません」

箱からそれぞれ取り出していたスタファの手が、言葉で一度止まった。

その目に、明らかなる不機嫌が見えて、ウィニーは内心で同じほど不機嫌になる。

しょうがないじゃない、と。

祖母くらいしか遊んでくれる人はいなかったし、母がうるさかったせいで、姉とおおっぴらに遊べなかったのだ。

「ね、姉さんだって……余り遊び方は知りませんよ」

不機嫌を向けられるのが嫌で、レイシエスを引き合いに出す。

スタッフアは、姉にはそんな顔をしないのではないかと思ったのだ。姉が、遊び方を知らないのは、勉強が忙しくて遊ぶ暇がほとんどなかったからなのだが。

「心配するな……ちゃんと教えてやるから」

ため息はひとつだけ。

不機嫌は、ゆっくりとその陰に隠れていった。

やはり、レイシエスという免罪符が、一番スタッフアには効くようだ。

褐色の長い指でカードを器用に扱う彼を、ウィニーはじっと見ていた。

姉に会いたいだろうに、わざわざ自分の相手をしに来てくれたということは、おそらく公爵に頼まれたからだろう。

そう思うと、まるで自分が重いだけの荷物であるかのように思えた。

もう、ここでの目的はある程度達成したのだし、後は本当にこの部屋にこもって大人しくしている方が、みんなのためになるに違いない。

目的——それは、自分の嫁入り先をフラの公爵に託したこと。

あとはただ、彼を信じて待っていればいいのだから。

それならば。

そう自分が心に決めて、ちゃんとそれを実践するというのならば。

スタファが、わざわざ本命でもない自分に、付き合う必要はないのではないか。

これ以上、フラの人たちに余計な手間をかけさせるのは、さすがのウィニーであつても心苦しくなる。

「えっと……私、ちゃんと部屋にいます。もう、部屋から出ないので……大丈夫です」

ウィニーは、いつもよりずっと神妙に言葉に出してみた。

しかし、ハハハとすぐさまスタファに、笑い飛ばされたのだ。

「お前は、フラの血が濃すぎるように見える。フラの人間に、大人しくしとけなんて……無理な話だ」

事実——彼は、そのまま話を続ける。

「事実……兄上だって、ロアアールの馬車を開けただろう？」

それが証拠と言わんばかりに、スタファは昨日起きた出来事を挙げた。

自分の兄である公爵を、大人しく出来ない悪い見本にしてしまっ

たのだ。

「ひど……」

「だから、フラの人間はそういう性質なんだよ。大人しくしてられない、ずっと無言でいられない」

ウィニーの反論など、即座に言葉でかぶせて邪魔し、その上、指を二本折ってみせるのだ。

1・大人しくしてられない。

2・ずっと無言でいられない。

心当たりがありすぎて、彼女は恥ずかしくなった。

しかし、その性質は決して自分だけのものではないのだと、スタファは言う。

フラの人間が、大体そうなのだと。

そう言えば、この扱いの難しいスタファも、昨日さっそく姉を訪ねてこようとしていたし、庭に連れ出していた。

言葉に至っては、ウィニーの方が言い負けるほどだ。

「いいんだ……それがフラの普通だからな」

そして。

馬鹿なことを言っし、やる。

それを止められない気持ちを、フラの人間ならば分かって——そう、スタファアは言ってくれたのだ。

ロアアールでは、とても厄介なこの性質も、フラにかかれは当たり前前。

何て、居心地のよさそうな国なのだろう。

ウィニーは、心の底から感動してしまった。

いま、こうして来てくれているのも、公爵に言われたのと、姉への行為のオマケではあるだろうが、少しはウィニーのことを心配してくれているのだろう。

「スタファさん……お兄さんみたい」

子供の頃から憧れていた兄という存在が、いまそこにいる気がした。

兄さえいえば、レイシエスは重圧から解放され、自分ももっと幸せになれるのではないか。

そう思ったこともあった。

ウィニーの言葉に、ぴくりと彼の指先が反応する。

「兄さん……そう呼んでもいいぞ」

何だか、少し嬉しそうだ。

彼は末っ子だと聞いたので、自分より下がいることが嬉しいのだからか。

「え……」

まさか、そんな切り返しがくるとは思ってもいなかったので、ウィニーは
ちよつと戸惑ってしまった。

「えつと…… スタッフ兄さ…… ん？」

これで、呼び方が合っているのかどうか分からないが、彼女はそ
おーつと言葉を並べてみる。

「悪くない」

うむ、と彼は満足そうに頷く。

えへ、えへへ。

ウィニーは、彼への苦手意識が軽く吹っ飛んだのを感じた。

苦言の数々も、妹に対して言っているのだと思えば、何一つへこ
むことなどない気がしたのだ。

「えへ…… スタッフ兄さん、もし私がフラのどこかに嫁入りする
ことになっても、こう呼ばせてくださいね」

すっかり浮かれたウィニーは、遠くにある未来まで引き寄せて言葉にした。

自分の未来が、全部ばら色に見えたのだ。

瞬間

曇ったスタファアの表情を――見てしまった。

大馬鹿

ウィニーは、素直な娘だった。

無作法で、町娘のように奔放なところはあるが、笑うと可愛いし、『兄さん』なんて呼ばれた日には、本当に自分の妹のように思えてくる。

正妃の子の中では、末っ子であるスタファにとって、その言葉は甘く心をくすぐった。

しぶしぶ子守をする予定が、彼女のためならばそれもいいかと思いはじめていた矢先。

「えへ……スタファ兄さん、フラのどこかにお嫁入りすることになっても、こう呼ばせてくださいね」

見過ごせない言葉が、彼に激突した。

話の流れが読めていなかったスタファは、反射的に自分の表情を抑えることが出来なかったのだ。

そうだった、と。

どれほどウィニーを可愛い妹と思っても、彼女の嫁いでくる席はフラにはなかったのである。

その上、スタファの曇った表情は、過敏に伝わってしまう。

「あ、あの……すごい身分の方でなくていいんです。ロアールは、そんなに贅沢な暮らしはしてませんから……あの……」

不安に揺れる黒い瞳と、少し呆然とした唇。

足場の少ない中、握っていたはずの綱が、いつの間にか少し遠くに離れて揺れているのに、必死に手を伸ばそうとしているような姿。「そういうわけにはいかない。フラがロアールを見下すような婚姻を、持ちかけることも出来ないし、そうしたところで断られるだろう」

スタファは、ゆっくりと立ち上がった。

向かいの、彼女のソファへと近づくためだ。

自分の姉たちを見てきたおかげで、フラの女性がどう癩癩を爆発させるかまで、よく知っているつもりだった。

「でも……でも……」

現実を見たくない、小刻みに動く目。

スタファは、そんな彼女の足元に膝をつき、その手を取った。

血の気が引いた手は、とても冷たい。

これが、今のウィニーの心の温度なのか。

「大丈夫だ……フラでなくとも、兄上が一番いい嫁ぎ先を考えてく

れている。心配しなくていい」

小さい子に言い聞かせるように、スタファは声を穏やかにしてそう言った。

こんな言葉や声を出したことは、これまでない。

家族が自分にくれたことを思い出し、真似るしかスタファには方法がなかった。

「……」

よほど、フラに嫁ぐということを楽しみにしていたのだろう。

ウィニーは、すっかり気落ちしてしまったようだ。

赤毛はフラの象徴のようなものだからこそ、彼女はそこに溶け込みたかったのだろう。

「うん……」

奇妙な音で、彼女は頷いた。

スタファに向かって、そうしているようには見えない。

自分の中の言葉に、自分で頷いているのだろうか。

「うん……あ、いいえ、はい……分かりました」

少しずつ、顔が上がっていく。

手に、温度が戻ってくる。

「他の国でも大丈夫です……元々、どこでもよかったです。心を砕いてくれてありがとうございます、スタファ兄さん」

笑顔に、なる。

荒地から生まれた、小さな双葉を見つめるような瞳だ。

小さな小さな幸せでも、大事に自分の糧として生きている人の瞳。

彼女は、赤毛ではあるが、完全なるフラの人間ではない。

その身には、確かにロアアールの血が入っていて、そしてロアアールの地で生きてきた時間がある。

この我慢強さと、小さな幸せを満足する性質は、彼女をこれまでの地で育ててきたのだ。

胸が、痛んだ。

ウィニーを、フラに迎え入れることが出来ない現実を、今ほど呪ったことはなかった。

許されるならば、無理やりフラに連れ去って、タータイト家の娘として、晴れやかに血族にでも嫁がせただろう。

それほど、スタファはウィニーのことを思った。

この気持ちが恋であれば、何の障害もなかったというのに。

彼の中には、もうレイシエスが住んでいるのだ。

ゆつくりと手を離して立ち上がると、スタファはその赤い頭をぽんぽんと軽くなでる。

兄が、この少女に心を砕きたいと思う気持ちが、本当によく分かった。

手紙できつと、この性質はよく表れていたに違いない。

己の環境を呪わず、すれず、姉を妬まずにいるのが、どれほどまでに大変なことか。

こんな、スタファにとっても身内のようになった彼女を、幸せに出来るかどうか分らないところに嫁がせるのは、確かにとても面白いことではなかった。

何か。

何か、いい方法はないか。

彼女の側に突っ立ったまま、彼は必死に考えたのだ。

親戚中の顔を、一人ずつ頭の中で検分し始めた。

そんな自分を、見上げている目に気づく。

ウィニーは、丸い目が見えなくなるほど細めて笑っていた。

「励まされるのって……嬉しいですね」

ロアアールの公爵夫人など、この世から消えてしまえばいい。

彼女の笑顔は、スタファの中の攻撃的な部分を上昇させるに過ぎなかった。

昨日から、姉妹への仕打ちの数々が垣間見える度に積み重ねてきた感情だが、またもそれに大きく重いものが乗せられたのだ。

フラの本気の励ましなど、こんなものではない。

もしも、ここにウィニーを心から愛するフラの男がいたならば、公爵夫人を激しく憎み、そして彼女を何日も何日も慰めただろう。

彼女は、その愛を受けてしかるべきだ。

怒りを余り面に出さないように努めながら、スタファは向かいのソファへと戻った。

レイシエスも、妹とは違う意味で苦しんでいる。

自分が、彼女の愛を許される男であれば——ふっと視線を、隣へ続く扉へと向けた。

「あ、姉さんは……ちょっと具合が悪いみたいで。で、でも、お昼過ぎには起きるって言ってました」

そんな彼の仕草を、ウィニーは見逃さなかった。

昼過ぎにはスタファが会えるように聞いてみる、とまで言わせてしまったのだ。

何を、やってるんだ私は。

心配しているはずの少女に、逆に気を遣わせてしまうなんて。

「そんなことはいい……今日は、お前のところに来たんだ」

スタファは、腐ってもフラの男だ。

ウィニーを踏み台にするような最低な男に、絶対になりたくなかった。

そうしたら。

そうしたら、だ。

彼女は、嬉しそうに笑うではないか。

影ひとつない笑いを、心から浮かべるではないか。

こいつは、馬鹿だ。

スタファは、思った。

最初から、馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、本当に大馬鹿のようだ。たったこれっぽっち、自分が大事に扱われただけで、この世の全

てが樂園であるかのように笑うのは――馬鹿以外にありえなかった。

ダイス

レイシエスは、わずかに漏れてくる隣の部屋の笑い声で目を覚ました。

鬱々とした気分が、その明るい声で慰められる。

この部屋はカーテンを閉め切って日は入らないが、隣の部屋には太陽があるように思えたのだ。

「どなたかいらしているの？」

控えている召使いに問うと、フラの公爵の弟——スタファだという。

ウィニーを妻にすることは出来ないと言っていたが、随分と仲良くなったようだ。

隣室の明るさが気になって、レイシエスはついにベッドから離れることにした。

昨夜の夕食も、そして朝食も取っていないため、飲み物とクッキーを少し用意させる。

空っぽの身体に、甘いものが染み渡る感覚を味わい、ようやく一息ついてから支度を始めた。

今日は、深い落ち着いた赤のドレスにする。

顔色が良くないと、思われなくなかったのだ。

母は彼女に青いドレスを着せたがるが、レイシエスは赤い方が温かみがあつて好きだった。

身支度が整うと、臥せっている間に届いた、いくつかの事務的なことをこなす。

今回の滞在中の予定表が届いていたり、他家からの贈り物が届いていたり、あるいは昨日送った贈り物の、礼状を早々に送ってきているところもあった。

見れば、それはロア（北）とニール（東）の公爵である。

ロアアールとは友好的、穏やかな関係の地域。

それらに返事を書き終わり、ひととおりのことを済ませて、ようやく彼女はウィニーの部屋へと向かったのだ。

寝室から続く扉を、使用人にノックさせる。

そこが、妹の部屋。

「姉さん、もう平気なの？」

カードで遊んでいた手を止め、慌てて妹は立ち上がった。

スタッフも同じく立ち上がり、こちらへと進み出てくる。

「朝から、お騒がせして申し訳ありません」

今日は手を取られることはなかったが、わざわざ側まで寄って深い礼を見せる。

情熱のひるがえる瞳だ。

ロアアールの憧れる、温度の高い黒曜石。

「いえ……私が余り相手を出来ないので、ウィニーも退屈でしょう。心遣い、痛み入ります」

レイシエスは、彼とその向こうにいる妹に、順番に視線を移した。

ウィニーは、えへへと笑っている。

心の底から上機嫌のようだ。

「いま、スタファ兄さんにカードを習っていたの。お祖母さまの教えて下さったのとは、全然違うの」

姉さんも、一緒にどう？

勧められるテーブルには、カードの他にも遊具の入った箱がある。

フラの男たちは、オモチヤ箱持参で都に来たのだろうか。

それに、『スタファ兄さん』とは。

彼が異論を一切挟まないところを見ると、その呼び方には同意しているのだろう。

二人の間には、一切色気などないのだと――それを、周囲に知らしめるような呼び方だった。

彼が昨日言ったことは、やはり揺らいでいないのか。

「兄上には、やたらと待ち時間があるので、暇つぶしです。勿論、一度勝負が始まったら、どっちも本気ですが」

彼女の視線が、箱に釘付けになっていることに気づいたのか、スタファはどうぞと道を開ける。

「どっちが勝つんですか？」

彼の言葉に反応したのは、妹だ。

結末が気になって気になって仕方のない、好奇心に溢れる黒い瞳。

それに、つい微笑みが溢れてしまう。

「ふふ……どちらなのでしょうね」

ちらりとスタファに視線を投げ、それからウィニーの横に腰かける。

そして、姉妹二人でにこにこ彼を見上げるのだ。

「6：4で兄上が勝ちますよ……これで満足いただけましたか？」

白状させられる真実に、彼は苦そうな表情だ。

嘘をついても、さしたる罪もない質問だったというのに、彼は偽らなかった。

「やっぱり公爵のおじ様の方が、お強いよね」

天真爛漫に、妹がスタファに追い打ちをかける。

もはや、彼も子どもではないのだ。

このような遊戯で、大人に遅れを取ることはほとんどないだろう。ということは、あくまでフラの公爵の方が実力は上ということだ。

そんな残酷な現実を、ウィニーはざくざくと刺したのである。

「ダイスだけは、私が強い……運がないわけではない」

さすがに面白くないのか、スタファは言い返してきた。

運。

言葉に、レイシエスは口元をおさえる。

笑い声が、出そうになったのだ。

弱い言い訳なのは、彼も分かっているのだろう。

スタファは、不本意そうに向かいのソファに腰かけながら、箱に手をつ突っ込んだ。

その手からすると、とても小さく見える白と茶のダイスが二つ取り出された。

白い方を、ウィニーに渡す。

「同時に投げて、大きい方が勝ち。分かりやすい運の勝負だろ？」

妹に考える暇を与えない速さで、説明が終わるや否や「せーの」と手を振り出す。

「えっ……」

慌てながらも、ウィニーも真似てダイスをテーブルに転がした。

「……いまのナシです」

妹が、悔しそうに唸る。

彼女の出した目は――1。

何がどうあっても、勝てない数字だった。

「勝負は勝負だ、ウィニーの負け」

5を出した男は、1の白いダイスを持ち上げ、今度はレイシエスへと差し出す。

勝負を、ということだろう。

自分の指の白さとは、また違う白。

軽く、それを指の中で回してみる。

「いきましようか……せーの」

性急な掛け声は、レイシエスを慌てさせる。

さっきの妹の気持ちがよく分かる一瞬を駆け抜けながら、彼女はダイスを放った。

からからと、テーブルの上で転がる六つの顔。

そのダイスが、近くで止まったスタファアの茶のダイスにぶつかって、ようやく止まった。

「あー」

ウィニーが、驚きの声をあげる。

出た目は――6。

最高の数字だ。

だが。

「引き分けですね」

レイシエスを見つめながら言う、彼のダイスもまた6の目を上に向けていたのだった。

懺悔と名案

「動いてきたぞ」

昼になり、一度部屋に戻ったスタッフに、兄が一枚の触れ書きを差し出す。

明日の夜の、晩餐会についてだ。

それが、どうしたのだろうか。

謁見会の晩餐会は、二回行われることになっている。

ひとつは、謁見会の前。

毎回お馴染みの、それではないのか。

「家族も同席されたし、だそうだ」

たった一文付け足されたその部分を、兄が読み上げる。

スタッフにとって、それは小さな違和感に過ぎなかった。

しかし、兄にとっては大きな違和感なのだろう。

「前回までは、公爵の妻が後継ぎが同席出来る程度だった…」

わざわざ、こんな但し書きは書かれていなかったというのだ。

「謁見会の前の晩餐会は…王太子殿下主催だったな」

スタファは、思考を組み立てた。

王は、謁見会まで姿は現さない。

それまでは、挨拶から晩餐会の取り仕切りまで、王太子の管轄だったはず。

ということは。

「まさかとは思うけど…赤毛の娘をあぶり出すために、こんなことを？」

カルダは、しきりと首を傾げている。

その様子は、スタファにとって少し滑稽に思えた。

兄貴分として、ウィニーの味方につくと決めたら、突然身内の鼻屑目が出たのか、彼女がとても可愛らしく見える。

あの奔放なところでさえ、赤毛をかいぐりかいぐりして可愛がりたいほどだ。

「失礼だな、兄上は。ウィニーに、一目で恋に落ちたとは考えないのか？」

だから、はつきり言ってやる。

可愛いあの娘なら、王太子に一目ぼれされる価値はあるのだ、と。

「うつ……」

突きつけられた言葉に、一瞬兄は息を呑んだ。

「信じられないな、兄上は。ウィニーが、今の様子を見たらどれほど傷つくだろう……あんなに兄上を信頼しているというのに」

珍しくスタッフは、兄に向けて畳みかけた。

普通、なかなかしゃべりで勝つことの出来ない相手だが、ウィニーの事への指摘は相当痛いところを突かれたのだろう。

「ウィニーが可愛いことは、私だって分かっている。ただ、王太子の趣味ではないだろうと……」

言葉は、弟のじっと見つめる眼力にかき消された。

「言い訳は、男らしくないな……」

そして——観念したようだ。

「すまない、ウィニー」

そして、彼女たちの部屋のある方角を向いて、膝をついて懺悔を始めた。

兄もフラの男ならば、女性に蔑まれることは、とてつもなくつらいことだろう。

「……………」

そんな兄が、えらく長く黙り込んでいるため、怪訝にそつちを見ると、祈りのために組んだ手をそのままに、虚空を見ているではないか。

何かあるのかと、スタファも真似てみたが、その先には天井というか壁というか、そんなどうでもいいものしか見当たらない。

「そう……か」

だが、兄には何か見たのではないだろうか。

まるで、神から啓示が降りてきたかのように、目に強い光が宿ったのだ。

「そうだ……その手があった!」

兄は、すくつと立ちあがり、スタファの方を振り返る。

「昼食後、ロアアールの部屋へ訪問するぞ。触れを出せ」

のこのこと、兄についてロアアールの部屋へ来たのはいいが。

スタファは、いまだに何の説明も受けてはおらず、ただ後ろにくっついていくしか出来なかった。

「わざわざ、公爵までお越しいただきありがとうございます」

美しいレイシエスが、二人を出迎える。

その斜め後方で、赤毛の妹分も笑顔で立っていた。

おそらく、兄が思いついたのは――そのウィニーのことだろう。

前後の話の流れから、スタファはそう推測していた。

席を勧められ、向かい合わせて姉妹と兄弟が向かい合う。

昨日と同じ対面のように見えて、そうではない。

「突然、お邪魔してすまないね……大事な話があったものだから」

切り出しは、穏やかな公爵笑顔。

兄弟二人の時はざつくばらんだが、公爵として向かい合う相手には、一枚皮をかぶるのだ。

時々、鼻につくほどもったいぶった言い回しをするところは、スタファは余り好きではなかったが。

「大事なお話……ですか」

笑顔の兄に対して、レイシエスは慎重な受け答えだった。

ロアアールを代表して来ているだけに、多少心配そうにも感じる。

あんまり、回りくどい言い方はするなよ。

思慮深い彼女を、兄の言葉が惑わすのではないかと思い、軽く睨んでみるが、こっちに視線一つ投げてよこさない。

「そう……ウィニーの結婚について、なんだが」

言葉は、意外にシンプルだった。

更に、スタファの予想通りだった。

瞬間、ウィニーの腰が一瞬ソファから浮きかけ慌てて戻る。

反動で、隣のレイシエスも軽く揺らされた。

その揺れが、完全におさまっていない中。

「ウィニーが望むのなら……フラを結婚相手に選んでももらえないだろうか」

兄は、微笑みながら言った。

「……」

スタファは、無言で親戚検索をいちからやりなおし始める。

この場で、自分が言うべき言葉などありはしない。

だが、兄が答えを出してしまう前に、自分なりの解答にたどりつ

いておきたかったのだ。

なのに。

ちらつと、レイシエスがスタッフの方を見た。

まるで、自分がウィニーの結婚相手なのでは——そんな怪訝の瞳で。

そうじゃない！

誤解を即座に解きたい心をぐっと押さえる。

ウィニーは、驚きで目をまんまるに見開いていた。

彼女は、もはやフラへの嫁入りはあきらめていただろう。

なのに、再び兄はその根本をひっくり返したのだ。

この場にいる、兄以外の三人の心は、いま大きく揺れている。

もし、くだらない答えを口にしようものなら、この三人を失望させることになるのを肝に銘じて欲しい。

レイシエスの視線に、軽く首を横に振った後、横目で兄を見ると、優しい微笑みの目を。

ウィニーに向けて。

こう言った。

「ウィニー……私の正妃になってくれないかい？」

部屋の空気と三人は、兄の言葉に——完全に固まってしまった。

そんな中、最初に口を開いたのは、スタファだった。

「義姉上が亡くなって四年……喪はとづくにあけているし、確かに兄上がいつまでも新たな正妃を娶らないでいるのは、時々問題にはなっていたけど……」

フラの内情をよく分かっている彼は、ゆっくりと自分の言葉を嚙みしめるように言葉を吐く。

義姉上。

新たな正妃。

それらの言葉は、ウィニーをドキリとさせた。

そう、フラの公爵は初婚ではない。

昔、愛していた人がいて、その人が亡くなったのだ。

どんな人が、彼女が知っているはずはない。

15歳の大人になりきっていない頭では、まだその辺りの複雑なことを上手に消化出来そうになかった。

だが。

公爵の誠実な気持ちは、きちんと伝わってきて、少しずつウィニーを嬉しくさせていく。

どこか分らないところに嫁入りさせるくらいなら、公爵自身ももらってくれると言ってくれたのだから。

だが、自分が公爵夫人に相応しいかと言われると、真反対だとして答えようがない。

ロアールのおまけがフラの正妃では、かの領民たちの期待にこたえられず、がっかりさせてしまうかもしれない。

喜びと困惑の入り乱れるウィニーは、そつと横の姉を見た。

どう思っているのか、分からなかったのだ。

そうすると、レイシエスもまた自分の方をちらりと見るではないか。

ウィニーの心を、まるで伺うように。

そして、姉は薄く、寂しげな笑みを浮かべた。

どういふ表情であっても、本当に美しい姉は――そのままつすぐと領主の方へと向き直るのだ。

「お心遣い、本当にありがとうございます」

どんな回答であろうとも、切り出しは儀礼的なもの。

レイシエスが、何を言おうとしているのか分らないまま、ただウィニーはときどきと鼓動を高鳴らせた。

「もし、このお話を本気でおっしゃって下さるのでしたら、我が父に出来るだけ速く、そして非常に強い希望の意思を、お送りいただかねばなりません」

姉の答えは。

肯定的なものだった。

どきっと、ウィニーの小さな胸が跳ねる。

「戯れで、こんな大事なことなど言わないよ。そうだね……はとこ殿の言う通り、要請は速く強くなければならないだろう」

言葉の最初は、ウィニーを向いて。

言葉の終わりは、レイシエスの方へ。

赤毛のはねつかえりに、フラの公爵は『本気だよ』と言ってくれているのだ。

その感情は、物語の中のような『恋』ではないことくらい、ウィニーにも分かる。

でも、『好意』は本当にたつぷりと詰まっていた。

姉を見ていると分かるが、公爵の結婚は恋愛だけでは片付かない難しさがある。

必ず、どこか不自由さがつきまとうものだ。

そんな立場の中、『好意』でウィニーを選んでくれたということ
は、本当は物凄いことなのだろう。

姉や公爵の言う『速く強く』というのは、父の容体に関係してい
るに違いない。

父が亡くなってしまうえば、母が侯爵家の実権を握りかねない。

レイシエスは、母には頭が上がりず、押し切られてしまう可能性
があるからだ。

そうなれば、この話を蹴ってしまう可能性がある。

それを、姉は危惧しているのだろう。

父がまだ判断出来る内に、そして既にある不穏な噂が本当になっ
てしまう前に話を進めるには、もはや多くの時間は残されていない
のだ。

自分が、正妃に相応しい人間でないことは、分かっている。

二番目の正妃であることも、言葉としては分かっている。

だが。

たっ
たいま。

一瞬だけ現れた、公爵の助け船に飛び乗らなければ、永遠に次の
機会などないのかもしれないのだ。

「ウィニーは、こんなおじさんでは嫌かもしれないが……どうだろう?。」

物凄い速度で、自分の人生を賭けた思考を繰り広げていた彼女は、ふつと微笑みながらこちらを見た公爵の言葉に、すぐには気づけなかった。

「えっ、あつ、そ、そんなことは……ありません。公爵のおじ様は……あつ!。」

しどろもどろになって答えている内に、顔が真っ赤になる。

自分が、これまで彼のことを何と呼んでいたのか、思いだしたのだ。

『公爵のおじ様』

この言葉は、さりげなく彼を傷つけていたのだろうか。

確か、まだ三十歳にもなっていない人なのに。

「公爵のお……いえ、フラの公爵様は……とてもお若いです……」

今更、どの口がそんなことを言うのだろうか。

ウィニーは、必死に自分の言葉をフォローしようとした。

「いいんだよ……確かに、十三も離れていたら『おじ様』と呼ばれても仕方がない」

笑われて、ますます顔が熱くなる。

「では……私の妻になっていただけるだろうか？ 私の可愛いはとこ殿……いや、ウィニー嬢」

その笑いを緩やかにおさめながら、公爵は自分の方をはつきりと見つめてきた。

彼のなでつけた赤い髪が、一筋乱れてその額へ落ちる。

自分と同じ、言うことを聞きにくい髪。

そんな髪を持った人から、まっすぐに求婚されているのだ。

船が。

来る。

海とは無縁の、船とは無縁のロアールのウィニーの前に、すうと流れてくる一艘の船。

きっと。

もう。

二度と。

来ない。

「よろしく、お願い致します」

船に――飛び乗った。

暑い国の血

「こんなことになるとは……思ってもみませんでした」

レイシエスは、そう切り出した。

側にいるのは、スタッフア。

彼は、まるで昨日と同じように、レイシエスを庭へと連れ出してくれたのだ。

ずっと詰めていた息を、その開放的な空間で深く吐き出す。

妹の、人生を決める一瞬だったのだ。

何一つ簡単な選択など、なかった。

遠いフラの地の、年の離れた公爵。

更に、前の正妃が亡くなった後の、新たな正妃として入るのだ。

複雑で、非常に難しい立場である。

苦労しないはずなどない。

遠すぎて、助けの手も差し伸べにくい。

何かあった時、妹はかの国で孤独な存在になってしまいはしないか。

それらを全部考えた上で——なお、ロアールにいるよりは、ウイニーのためではないかと考えたのだ。

だが、同時に。

妹を、手元から失うのである。

ウイニーは、レイシエスの心の支えだ。

彼女の明るさや強さに、どれほど助けられただろう。

そんな大事な妹が、滅多に会えないほど遠くに行ってしまうことを、手放して喜べるほど、レイシエスは大人ではなかった。

そして、憂鬱も付きまとう。

ウイニーが嫁いだ後は、母と二人暮らしになる。

どれほど、それが息苦しいことか。

妹の結婚にまつわることを考えると、上手に微笑めないのだ。

「不安ですか？」

スタッフが差しだした腕を、レイシエスはそっと取った。

「そうですね……私が、もうすこししっかりした大人だったらと、いつも思います」

判断というものは、とても難しい。

どんな結末がやってくる可能性があるのか、いくつも想定をしなければならぬ。

不幸な可能性を出来るだけ回避できるよう、あらゆる対策を打たねばならない。

そして。

どんな結末になろうとも、それを受け入れ、対処し――責任を取らなければならない。

それが。

公爵になる、レイシエスの一番大事な仕事なのだ。

「支えが必要でしたら……いつでも寄りかかって下さい」

スタッフアの腕にかけた手に、ずっと手が重ねられた。

あつ。

挨拶とは違う体温に、彼女はどきりとしてしまう。

まさか、ね。

一瞬、自惚れたことを思いかけて、レイシエスは困った笑みになっってしまった。

彼は、フラの人だ。

公爵の手紙でも挨拶でも、これまでの会話でも、かの国の男性が女性に情熱的なのはよく分かる。

優しさや親しみのこもった多くの言葉を並べるのは、ごく当たり前ではないか。

「困らせてしまいましたか？」

うららかな春の日差しに、髪は明るく赤い光を放つのに、黒い瞳は憂いを揺らした。

「いいえ……お心遣い、ありがとうございます」

曖昧な笑みに変えて、レイシエスは花を見るように視線を動かした。

本当は、ちゃんと見てはいないのだが。

スタファは、好ましい男だ。

ウィニーを実の妹のように可愛がり、レイシエスに対して紳士な態度で接してくれる。

だが、さっき胸を掠めた自惚れが、たとえ事実であったとしても、二人に未来はないだろう。

一つ目は、母がフラを嫌っていること。

ウィニーをそこへ嫁がせる分は、遠くへ追いやれるという理由で許されるかもしれないが、スタファアを喜んで迎えることは想像出来ない。

二つ目は、ウィニーとフラの公爵の婚姻が成立した場合、ロアアールとフラの政治的結びつきは完了したこととなる。

これは、周囲の目から、という意味だ。

それなのに、更にフラからスタファアをレイシエスの夫として迎え入れた場合、他の公爵や王からあらぬ疑いをかけられてしまうかもしれない。

特定の公爵同士の、結びつきが強くなりすぎる。

ただでさえ、王家に側室を送らないロアアールだ。

謀反の嫌疑でもかけられては、非常に厄介なことになる。

それらを考えると、スタファアを相手として選ぶのは、非常に難しい。

特に、あの王太子がその内に王となり、レイシエスは長く付き合わねばならないのだ。

迂闊な穴でも見せようものならば、無慈悲に突き刺されるだろう。

「貴女の考えていることを、当ててみましょうか？」

視線を花に逃がしたレイシエスに、スタファアは不思議なことを言

った。

どきつとする。

自分の婚姻さえも、政治的な駆け引きの材料なのだと知られたら、さぞや女らしくないと思うだろう。

だが。

こんなことを考えているなんて、知られるはずなどないのだ。

なのに、不安は拭いきれず、おそらくそんな目で彼を見上げてしまった。

「『ウイニーが、フラに行ってしまったら寂しい』、というところでしょうか？」

優しいけれども、力強い瞳。

そして、その唇は——少しだけからかうような響き。

「まあ……当たり前です」

少し前に、確かにそれは思ったことだった。

本心が知られずに済んだことに安堵しながら、レイシエスは肩の力を抜いて笑ってしまった。

なのに。

「美しきも賢きロアアールの姫……」

その強い瞳は。

レイシエスの青い瞳を射ぬいて、止まる。

「ロアアールの冷たい冬から、貴女をお守りする炎として、私を側に置いてはいただけませんか？」

美しい言葉と、情熱的な声。

本当に雪さえ溶けそうな熱い声音と瞳に、一瞬めまいを覚えた。

ついさっき、駄目だと思ったばかりなのに、スタファはその禁断の地へ足を踏み入れてしまったのだ。

フラの太陽に照らされ、自分の肌が溶けてしまいそうな錯覚の中。

「それは……とても難しいと思われます」

これ以上の障害を背負うには、彼女は若く、それほど強くはないのだ。

憂鬱に視線を伏せるレイシエスに、しかしスタファはふっと笑った。

はっと顔を上げると。

「前よりも、燃え上がった目で自分を見ている。」

「それは……私自身のことは、好ましく思ってた下さっているという意味に取ってもよろしいですね」

障害を前に、何一つ怯む気配もない。

それどころか、なおさら情熱の炎を燃やすような男だった。

これが、暑い国の血なのね。

想像も出来なかった反応に。

困りながらも、レイシエスの心は――揺れてしまった。

なりたいこととなること

晩餐会！

ウィニーは、目をキラキラ輝かせてその言葉を噛みしめた。

そんな素晴らしいものに、自分が参加出来るとは思ってもみなかったのだ。

王太子主催のそれは、今回はいつもより華やかに行われるということで、公爵家の家族の参加も許されたというのだ。

絵本の中でしか知らない舞踏会が、頭の中に溢れ出す。

しかも。

エスコートつき！

フラの公爵が、ウィニーと踊ってくれるというのだ。

憧れと幸せな気分で、いまの彼女は本当に胸がいっぱいだった。

公爵のおじさまのお嫁さん。

複雑な事情はあるが、ウィニーの前にそんな可愛らしい道が作られたのだ。

あとは、父がそれに頷きさえしてくれれば、彼女のフラへの嫁入りが決まるのである。

いつもは、祖母のドレスを着るのが好きだが、晩餐会は公爵から贈られたドレスを身につけるつもりだった。

きつと、彼はとても喜んでほめてくれるだろう。

うきうきと、ウィニーは晩餐会の相談のため、姉の部屋へ訪れた。

「……はああ」

だが。

レイシエスは、ソファで物憂げにため息をついている。

そんな表情すら美しい。

「姉さん、どうしたの？」

変な感心をしながらも、ウィニーは問いかけた。

ちらりと視線で妹を見るが、返事は深いため息。

「心配事？」

「いいえ、たいしたことではないわ」

薄く微笑まれて、少し心が痛む。

自分に、明るい道が見えたせいだろうか。

一人、あの母と暮らさなければならぬ姉が、不憫に見えるのだ。
現金な性格だと、自分でも思う。

人の不幸の心配が、ここにきてようやくウィニーも出来るようになったのだから。

「姉さんは……何かやりたいことはある？」

だから、つい自分の感覚で姉に聞いてしまった。

ウィニーは、ただロアールから離れて幸せになりたかったのだ。

それ以外の夢や希望は、何ひとつ持っていなかった。

すると、ちらりとレイシエスは自分を見る。

「私は、公爵になるわ」

その言葉は、姉と自分の差を大きく見せつけるだけだった。

レイシエスは、『夢』や『希望』など口にしない。

公爵に『なる』という、確固たる意志。

『なりたい』ではないのだ。

思考の根元から、姉とは違ふのだとはっきりと思い知らされた。

同時に。

ウィニーには、責任など何もないことに気づく。

それが、どこか寂しくも思えた。

「姉さん……」

しょんぼりと、姉の名を呼ぶ。

すると、美しくも優しいレイシエスは、難しい顔を苦笑へと変えながら、穏やかな瞳を向けてくれる。

「心配しなくていいのよ……難しいことを考えてはいるけど、苦しいことを考えているわけではないから」

不思議な、言葉だった。

難しいが、苦しくはない。

つらいことではないのだと、姉は言っているのだろうか。

「晩餐会の準備で来たのよね？ アクセサリーを選びましょうか」

ウィニーは、奇妙な顔をしていたのだろう。

姉が、話を変えるようにソファから立ち上がった。

ほとんどアクセサリー類を持ちこんでいない彼女のために、貸してくれるという。

わあっと、ウィニーの心は晴れやかになった。

さっきまでの微妙な気持ちも忘れて、姉の後ろについていく。

宝石箱の中は、本当にキラキラしていて、目の保養だった。

公爵の娘とは言え、華美さを良しとしないロアールの人間のため、体面を守る程度のアクセサリーしか持っていない。

この宝石箱の中身すら、母から持たされたもので、姉のものでさえないのだ。

そんな侯爵家の性質は、領民にも好ましく見られているので、姉が公爵を継いだとしても変わらないだろう。

「姉さんは、スタファ兄さんがエスコートしてくれるのよね」

ネックレスや耳飾りに触れさせてもらいながら、浮かれた口調でウィニーは言った。

それはもう、本当に気軽な話しのつもりだった。

なのに、姉の指は止まり——ため息が落ちる。

自分がこの部屋に来た時と、まったく変わらない表情とため息だった。

まさか。

「スタファ兄さんに……何か言われたの？」

ウィニーは、彼の望みを知っている。

姉のため息の原因がスタファだとするのならば、何か姉を悩ませるようなことを言ったのではないか。

そう、素直に考えたのだ。

「少し……ね」

気恥ずかしげな表情は、姉を年相応に見せる。

こんな子供っぽいウィニーと、たったひとつしか変わらない年なのだ。

本当であれば、もっと感情的であってもおかしくない年頃。

それを抑えるクセを、あの母の前でずっとしてきたせいだろう。

姉の感情は、大きくは動かない。

それでも、このわずかな恥ずかしさを、スタファは引き出したのだ。

結構、健闘しているように思えた。

「スタファ兄さん……いい人だよ」

ウィニーは、思っていることを正直に言う。

最初は、意地悪な人かと思った。

でも、それはウィニーを貶めようと言っているというより、出来の悪い妹をしつけるようなもので。

彼の中に、ちゃんと愛情があるのだと分かってからは、すっかり懐いてしまったほどだ。

そんな男なら、姉を幸せに出来るのではないだろうか。

「知ってるわ」

姉の心が、少し動いている。

ウィニーの知らないところで、スタファアの方へとわずかに揺れているのが伝わってくる。

「スタファア兄さんは……」

もっと、彼のことを売り込もうと口を開けたら。

姉が。

こちらを見て。

にこりと微笑んだ。

16歳という年を隠してしまった顔で。

「だから言ってるでしょう？」 難しいけど苦しくないことだから大

丈夫よって」

やんわりとした、拒絶。

ちゃんと考えているから、それ以上の口出しは無用。

そう告げられたのだ。

本当かなあ。

ウィニーは、心配だった。

反対するだろうフラ嫌いの母を考えると、レイシエスが逆らえるとは思えなかったのだ。

何か。

強く突破する力が必要だろうと思ったが。

ウィニーは、姉に拒否されてまで進言する案を持ってはいなかった。

文

いくつかの、書状がレイシエスの元に届く。

晩餐会の事情を聞きつけた、他公爵の身内からの、エスコートの
お誘いだ。

別途招待されている、王の親族からのそれも来ていて。

彼女は、丁寧な断りの手紙を書く。

最初に誘われた、スタッフとの約束を守るつもりだったのだ。

ふう。

フラの次男坊のことを思い出して、レイシエスはため息をつく。

今日は、何度ため息をついただろう。

まったくあきらめる様子のない、彼の熱い瞳を思い出してしまう
のだ。

フラの人間は、思い切りがいい。

妹を見て、それからフラの兄弟を見ると、それがよく分かる。

彼らは、怖くないのだろうか。

人に拒絶されたり、悪く思われたり、壁にぶつかったり足場がな

かったり。

そんな、ごく当たり前にある障害にあたるのを、どうして恐れな
いで足を踏み出せるのか。

レイシエスは、それが不思議でならなかった。

手に入れようとしなければ、難しい問題は起きないというのに、
手を伸ばすのをやめようとしないうスタファ。

その手の先にいる自分。

血筋としては、申し分ない相手だ。

そう考えかけて、彼女は苦笑した。

こういう考え方が、自分の基本なのだと。

公爵になる自分。

この自分の身は、ロアールという領地に捧げられるものなのだ。

自分の私欲のために、使ってはならない身。

その感覚が、きっと血の中にも流れているに違いない。

ウィニーが、フラの血が濃く出た娘ならば、レイシエスはロアア
ールの血が濃くてたのだろう。

そんな公的な身である彼女は、自分の中の私心と向かい合う羽目

になったのだ。

その結果が——ため息。

そんなため息にかぶさるように、扉がノックされる。

侍女が応対に出た後、レイシエスの方へ書状を持ってきた。

また、晩餐会のエスコートの件だろうか。

受け取ったそれを見たら、胸に微かな疼きが生まれる。

スタファからだった。

書きかけの返事の手を止めて、レイシエスは封を切る。

中身は。

まあ、いわゆるひとつの——恋文だった。

彼女の美しさと聡明さをたたえる美辞麗句のあいさつに始まり、言葉で語られるのとはまた違う思いが文字にしたためてある。

一見、恋愛のみに偏った軽薄な手紙に感じるが、スタファはこうも書いていた。

『貴女と手紙を送りあえる関係になりたい』のだと。

手紙。

それは、レイシエスの心を震わせる言葉だ。

フラの公爵と始めたそれは、彼女に外の世界を見せてくれた。

きっとスタファは、彼ならではの手紙を書いてくれるのではないかと思つたのである。

正直に言えば、美しい言葉の羅列よりも、そちらの手紙の方に興味があつた。

男と女だから、恋を覚えたり惹かれたりするという、古代からの感覚を否定したいのではない。

それよりも、その人の性質や考え方や、根元で一番大事にしているもの。

そういうもので、人を尊敬したいのだ。

尊敬と恋が、ふたつ並ぶほどの相手であれば、保守的なレイシエスであつたとしても、重い腰を上げられるのではないか。

自分の性質をよく理解した上で、彼女はそう思つた。

書きかけの、他の人の返事を押しやり、レイシエスは新しい便せんを目の前に置いた。

愛の言葉は、書かない。

この手紙に、彼がどう答えるのか。

彼女は、わずかな空想を巡らせながら、気がついたら長い手紙をしたためていた。

返事が、来た。

予想以上の速さで。

彼女はまだ、他の方への断りの返事を全て書き終えていなかったというのに、侍女が再びスタッフからの手紙を届けて来たのだ。

「まあ……」

人知れず、驚きの声をあげてしまった。

レイシエスからの手紙を読んで、すぐに返事を書き始めたのであれば、これほど速くはないだろう。

封を切ると、また違う美辞麗句の文句から始まっていた。

それはもはや、彼ら一族の基本であるらしく、どんな手紙であっても変わらないのだろう。

だが、そこから先は、速く力強いペンの流れと共に言葉が綴られている。

スタッフは、これまで公爵の補佐の仕事をしてきたようだ。

資料もなしに書き綴られたであろう、秩序正しい仕事の話は、彼が有能であることを垣間見せてくれた。

とどめが。

『私は、公爵の補佐が得意なのです』、という文章。

これには、レイシエスもふつと笑いを洩らしてしまった。

一見、ただの自信のあらわれのように見えるが、まるでレイシエスに自分を売り込んでいるように思えたのだ。

ロアアールの公爵の補佐も、きっと得意です、と。

言外にある、彼の小気味よい言葉は、心の中にある余裕を思わせる。

精一杯支えますよ、ではなく、貴女を支えてなお、私にはまだ余裕がありますよ。

だから、何の心配もありませんと、たった一言の中に込められている気がした。

それが、彼の細めた目と、ゆっくりした声で聞こえてくるように思えるのが不思議だ。

レイシエスの中に刻まれた言葉。

つい、くすくすと思い出し笑いをしてしまったのは、これまでに

はない自分の中の感情。

彼の余裕の言葉を聞くと。

何だろう。

レイシエスにも、少しでも余裕が生まれてくる気がしたのだ。

「不思議な方ね」

レイシエスは、微笑みを消しきれないまま、新しい便せんを手にとった。

他の方への返事は——もう少し遅れそうだった。

晩餐会の始まり

「……！」

出来上がりでございますと、侍女たちがウィニーの周囲から下がっていく。

ようやく、姿見で自分の全身を眺めながら、彼女は驚き——そして喜んだ。

最新の、しかし派手さより可愛らしさを主とした、ふっくらとしたデザインのドレス。

暖かい緑と、清楚な白の糸が入り混じるそれは、ウィニーの赤く強い髪を鮮やかに印象付けてくれる。

綺麗にアップされた髪は、侍女たちの頑張りの賜物だ。

さわるとパキパキと音がするくらいに固められているのだが、ふんわりと見えるようになっていく。

気合の入った化粧をしたのは、これが初めてかもしれない。

これまでウィニーは、ほとんどロアールの公式の行事に出たことはなかったのだ。

だから、おしろいで白くなった肌や、まぶたの上の色や、増えて長くなったまつ毛や、艶やかに光る朱の口紅で彩られた自分を、食い入るように見つめてしまった。

どきどきどきどき。

白い手袋の手で、鏡に触れる。

姉に、美貌で遠く及ばないのは分かっていた。

だが、いつもの自分よりも、二段階くらい可愛くなっていると思う。

それくらいの自惚れは、許されるのではないだろうか。

フラの公爵様は、何と言っだろう。

そう考えると、なおさら心臓が物凄い音を立てるのだった。

扉が、開く。

赤毛の兄弟が、ロアアールの姉妹を迎えに来てくれたのだ。

気高い美しさの姉の、少し後ろに控えていても、ウィニーの心は躍り回っている。

「ほう……」

公爵の足が止まる。

驚きの目は——ウィニーに注がれていた。

えへ。

それが、嬉しかった。

姉が美しいのは、当たり前のことだ。

もう、彼らはそれを目の当たりにして知っている。

だが。

ウィニーが気合を入れたのを見たのは、彼女自身がそうであるように、初めてなのだ。

目新しさに過ぎなくとも、ウィニーは素直にそれが嬉しかった。

「化けたな……うつ」

スタッフアの驚きの呟きは、公爵の肘鉄で閉ざされた。

「余りの美しさに、ぼうつとなってしまうた……今晚は、可愛い私のはとこ殿」

「本日は、どうぞよろしくお願い致します」

公爵と姉が挨拶を交わす。

そんな決まりごとの後に、彼はウィニーの前に立つてくれるのだ。

「ほ…本日は……」

ときどきしすぎて、うまく舌が動かない。

「赤い花束のように美しいよ、ウィニー。エスコート出来る私は、幸せ者だ」

手を。

取られると思ったのに。

ウィニーに顔が近付いてきたかと思うと、頬に軽い口づけをしてくれた。

カ、カアアアア。

もっと近しい挨拶のように思えて、彼女は茹であがってしまう。

これもきつと、ドレスと化粧の魔法なのだ。

赤い花束。

緑のドレスに赤い髪。

そう呼べなくもないが、そんな言葉が即興でスラスラ出てくるのは、やっぱり大人だからだろうか。

「フラの澄んだ海より美しいですね……」

「本当にこんな青なのでしょうか、そちらの海は」

隣で、スタファアと姉が挨拶を交わしている。

彼は、手袋の手に挨拶をしていた。

だが、その目は熱い色を帯びている。

ウィニーには、『化けたな』扱いだったというのに。

「驚いたな……ちゃんとレディに見えるぞ」

続いてスタファアは、彼女の前にやってくる。

彼の言葉は、齒に衣着せない分、本当のことなのだ。

本命以外には、極端なところがあるのが、たまにきずだが。

「スタファア兄さんも、紳士っぽく見えるわ」

お互い、苦笑いを浮かべながらのご挨拶となった。

さあ。

いよいよ、晩餐会デビューだ。

ウィニーは、公爵にエスコートされながら、口から飛び出しそんな自分の心臓を、ごくんと飲み下したのだった。

光。

ホールは、目も眩まんばかりの光に溢れていた。

夜とは思えない。

数えきれないほどの蠟燭のともされたシャンデリアが、炎の灯りを上から照らしているだけではない。

繊細な飾り硝子の覆いのかけられた燭台が、美しいインテリアとなつて壁やテーブルで光を放っているのだ。

ちかちかとする目を、ウィニーはまばたきをして取り戻した。

華やかな王都に来たのは分かつてはいたが、その華やかさの全てがここに詰まっているように思える。

更に、宝飾品やドレスの飾りが、光に反射してキラキラしている。

目が落ち着かず、どこから何を見たらいいか分からない。

そこまで来て、ようやくホールに美しい楽隊の音楽が流れていることに気づいた。

「大丈夫かな？」

手を取ったまま固まっていたウィニーに、公爵が優しく問いかけ

てくれる。

こくこくと頷いて、彼女はようやく足を踏み出した。

今日の招待は、5公爵と王族。

そんなに多くないと思っていたのだが、その家族までとなると結構な人数になるようだ。

「王太子殿下が出ていらっしやるまでは、ダンスもないからね……おしゃべりでもしていようか」

公爵の言う通り、あちこちでは挨拶だの雑談だのが始まっていた。

その視線の多くは、一度は必ず姉のレイシエスに注がれる。

それは、決して短い時間ではない。

隣のスタッフは、そんな視線をものともせず、姉と語り合っていた。

あ、笑った。

公式の場で、姉がくすくすと微笑んでいる。

楽しそうだなあ。

あつ、誰か来た。

そんな二人に、若い男が近づいている。

スタファの目が、一瞬怖くなった気がした。

「大丈夫だよ……スタファは、ああ見えて抜け目がないからね」

一人ではららしていたウィニーは、ぽんと肩を叩かれてどきつとする。

全部、公爵に見られていたようだ。

「姉さんとスタファ兄さんは、うまくいくのかな？」

そうなたらいいなと、彼女は思った。

しかし、不安もいっぱいある。

「ま、それはあいつの頑張り次第だろう。おっと……王太子殿下のおでした」

一度、音楽が完全にやんだ。

まるで、それが合図だと皆が知っているように、ホールはシンと静まり返る。

続いて、ファンファールが鳴り響き、ホールの奥にある大きな扉が開く。

黒いものが、出てきた。

馬だった。

「え？」

間抜けな声が、ウィニーの口から洩れた。

現れたのは、王太子ではなく——ただの黒馬だったのだ。

赤毛の扱い

う、馬？

ウィニーは、茫然とその光景を見ていた。

きらびやかな馬具をつけてはいるが、馬は馬である。

王太子が魔法で馬に変えられた、なんてことがない限り、あれは真正銘の人ではないものだ。

ホールは、一瞬水を打ったかのように静まった直後、一斉にザワつき始めた。

初めての晩餐会出席のウィニーではあるが、この状況が普通ではないということだけは、その様子から分かった。

「何を考えてらっしゃるのか……」

隣にいるフラの公爵さえも、啞然とそんな言葉を口に出している。

どうやら安心して驚いていいようだと言ったウィニーは、彼に言葉をかけようとした。

『王太子殿下は、どうなさったのでしょうか』でもいいし、『馬が出てくるなんてびっくりしました』でもいい。

胸につつかえた驚きを、言葉として吐き出せばそれでよかったのだ。

なのに、横を向こうとしたウィニーの髪の毛は——ぐいっと引く張られて、公爵の方を向くことは出来なかった。

「っ……！」

突然の髪の毛の抵抗に別の驚きを抱えたまま、髪に気をつけてゆっくり後ろを振り返ると。

男がいた。

黒髪の、冷たい目をした男。

その男の手には、ウィニーの赤毛が握られている。

赤毛の毛先が、彼の指の間から跳ね出しているのだ。

それを見た瞬間の彼女の絶望感は、とても言葉に出来ないものだった。

毛先があるということは、既に結われた部分から引きずり出されているということだ。

綺麗に上げるのに、どれほど侍女たちが苦労したと思っているのか。

いまの自分の髪は、ひどくみっともない状況にされていることだろう。

初めての晩餐会だというのに。

「な……何するんですか！」

ウィニーは、男に噛みついた。

この男の顔は、覚えている。

一度だけ、花咲く庭で会った失礼な男だ。

田舎者だと言われ、ドレスを時代遅れだと馬鹿にされたのである。

ウィニーは、思わず言い返して逃げた。

あれは、非公式な場だった。

だが、ここは公式な場所です。

そんなところで、正装した女性の髪を引っ張ってめちゃくちゃにするなんて、どんな仕返しなのか。

小さな男の子のようではないか。

せ、せっかくの、せっかくの晩餐会が。

綺麗なドレスと髪で、公爵にも褒めてもらえてウィニーは幸せだった。

その幸せは、毛先ひとつで急転直下だ。

「……やっぱり赤毛だな」

髪を離さないまま、男はウィニーを見ずにフラの公爵を見ていた。

いや、睨んでいたと言った方がいいだろう。

そうだ。

ここには、公爵がいた。

こんなひどい仕打ちをする男から、きつと自分を助けてくれるに
違いない。

頭をうまく動かせないまま、ウィニーは後方の助けを待った。

だが。

そこから聞こえて来たのは。

「王太子殿下……」

という、苦しげな呼びかけだった。

おうたいし、でんか？

ウィニーは、瞬間的に言葉の意味が理解出来なかった。

大きすぎて、持て余すほどのそれ。

本当ならば、馬が出てくるところから現れるべきだった次代の王。

「タータイト公は、嘘をついたな」

「あつ」

髪が引つ張られ、その痛みでウィニーの身体も引つ張られる。

王太子の方へ。

「嘘などついておりません」

彼女は、王太子に背を抱かれるような形になり、結果的に目の前にフラの公爵を見ることとなった。

彼は、とても不機嫌な表情でこちらを見ている。

おそらく、怒りを抑えているのだろう。

「赤毛の娘など、いないと言っただろう？」

後ろから、冷たい声が降り注ぐ。

ぞわぞわする。

「フラから連れて来ておりませんと、お答えしたはずですよ」

周囲の人たちが、馬から王太子へと意識を移し始めていた。

ようやく、そこにいることに気づいたようだ。

それは伝染するように、次第に外側へと向かって行く。

「では、この赤毛はどこ誰だ？」

責められるような形で、髪が引っ張られる。

「私の妹ですわ」

進み出て来たのは――レイシエスだった。

青ざめた顔で、姉はウィニーの前に来てくれた。

本来であれば、母よりも身分的には怖い相手である。

なのに、来てくれた。

ウィニーは、それが嬉しかった。

髪を引っ張られた痛みとは別に、泣きたくなくなるほど。

「ああ……なるほど、確かにまったく似ていないな」

「王太子殿下……女性の髪は、引っ張るためにあるものではありません。お離しいただけますか？」

フラの公爵が、一歩足を踏み出す。

「妹の髪を直しに、一度下がらせていただきたく思います」

姉もまた、一歩踏み出してくれた。

二人とも、ウィニーを助けようとしている。

嬉しくて嬉しくて、二人に抱きつきたくなった。

足を踏み出そうとしたが――― とも、頭がついてこなく引き戻されることとなる。

「分かった……だが、私が乱した後始末だ。私が責任を持って直させよう」

王太子は、冷たい言葉のままウィニーを引っ張った。

ようやく髪から外された手は、彼女の腰に回っているではないか。

な、何で!?

公爵と姉からひきはがされる。

そして。

ウィニーは、ぼいっとホールから放り出された。

控えていた侍女に向かって。

「髪を直してやれ」

と言い置くや、王太子はホールへと戻って行ったのだ。

その理不尽な背中を、ウィニーは茫然と見ていた。

い……。

震える心と頭で、彼女はようやく言葉を思い浮かべることが出来た。

目の前で、ホールの扉は閉ざされる。

一体、何だっというのよー!!

ウィニーだけ——追い出されてしまった。

問題だらけの王子

ホールから出たのは、ウィニーだけだった。

王子が戻ってきた姿を見て、レイシエスは心底ほっとしたのだ。

あのまま妹が連れ去られて、この男に無体なことをされるのではないかと恐れていたのだが、少なくともそれはないと分かった。

妹の処遇について、問いかけようとレイシエスが動き始めた時。

ホールにいた男たちの方が、先に王子の元へと詰めかけ、挨拶を始めるではないか。

すっかり囲まれた王子を見て、これではとても近づけないと諦める。

だが。

「王子なら、あそこにいるだろう？」

王子本人は、残酷なまでの笑みを浮かべて、顎で馬など指している。

この男の仕組んだらう、ひどい茶番。

ファンファールを鳴らして入ってきた馬を自分だと言い、馬に挨拶に行けという戯れを口にするのだ。

鼻白む周囲の人間たちを試すように、更に畳みかけている。

フラの公爵は、ずっと動いた。

王太子本人の方ではなく――馬の方に。

「立派な馬ですな。王太子殿下の愛馬ですか？」

王太子の戯れに、フラの公爵は乗ることもなく、笑みさえたたえた上で受け流している。

馬は馬だ。

それ以外の何物でもないのだと。

一瞬、馬の方に別の意味で動きかけた他の人間は、そんな彼の堂々とした態度に安堵したように、「いやあ、本当に立派な馬ですな」と迎合し始める。

「フン……」

面白くなさそうに、王太子は鼻を鳴らした。

彼は、瞳と顎の動きで静かなる指示を出す。

さつきまで、皆の注目を集めていた馬はホールからさげられ、楽隊が音楽を奏で始める。

「皆の者……好きなように楽しめ」

そんな一言を冷たく言い放つと、彼はレイシエスの方へとやってくるではないか。

再び、一人で彼に立ち向かわなければならぬのか。

そう思った時。

ずっと、隣に進み出た男がいた。

「ウィニーの様子を見に行きましょう」

王太子に声をかけられるより速く、そう語りかけられる。

スタッフだ。

レイシエスは、ほっとした。

このまま、急いで彼の助け舟に乗れば——そう思ったのだ。

だが、そこまでの時はなかった。

彼女の腕は、すでに王太子に掴まれていたのである。

「一曲、相手をしろ」

そしてレイシエスは、栄えある王太子の一曲目の舞踏相手になってしまったのだった。

こうなってしまうては、スタッフが助けるのは不可能になる。

相手は、次代の王。

公爵でさえ、ここは引かねばならない相手。

「ウィニーをお願いします」

レイシエスは、振り返ってそう伝えるので精一杯だった。

逆を言えば。

一番、このホールの中で動きやすいのはスタファだろう。

公爵の家族という肩書きの彼は、ここにいる義務はない。

退席したとしても、誰にも咎められはしないのだ。

不機嫌そうに、しかし軽く頷く仕草を見ると、スタファは出入り口の扉に向かって歩き出した。

それにほっとした直後。

ぐるんと身体は回され、目の前に現れた王太子に、レイシエスは冷やかな眼差しで見つめられることとなるのだ。

「確かに、まったく似ていないな」

厳しい声。

「嘘など申しません」

その責めを盾で押し返すように、彼女は踊りのポジションを取った。

向こうが踊るといふのを拒めないのだから、さっさと終わらせて離れようと思ったのである。

誰もが注目する中、この晩餐会の主催者である王太子が、一曲目の相手に自分を選んだ。

その事実は重いものの、逆にレイシエスは周囲の人間が、こう考えるだろうと想像したのだ。

王太子の戯れ。

彼女が誰なのかなど、一瞬の間に伝わって行く話。

次期、女公爵。

そんな肩書の人間を、いくら王太子とは言え後宮に入れることは出来ない。

ただ、美しいから選んだだけだろう、と。

後宮の寵を競う相手とならない女など、空気と同じなのだ。

「さっきの赤毛は、タータイト公の弟だな……随分と親密ではないか」

腰に回された手に、力がこめられる。

もつと密着するように引き寄せられたが、レイシエス是一曲の辛抱と、抵抗しなかった。

下手に逆撫でて、長いこと拘束されるのは御免だ。

「親戚ですから」

ウィニーの髪を見れば、フラの血がロアアールに混じっているのは明らかではないか。

レイシエスは、親戚という隠れ蓑を使った。

「親戚と言えば、ロアもそうだろう」

「そうですわね」

くるりと回って位置を変えながら、言葉を軽く流す。

誰とつきあおうが、この男には関係のないことだ。

人目のある環境というのは、レイシエスにとっては非常に助かる。

ただ、礼節を守ってさえいれば、周囲の目が自分を守ってくれるのだから。

「私が……何もしないと思っているだろう？」

耳元で見透かすように言われ、ぎくりとする心を抑える。

「何のことでしょう？」

素知らぬふりに、王太子は性質の悪い微笑みをたたえながら――
レイシエスの身を突き放した。

踊っている真つ最中に放り出され、彼女はよろけてしまった。

慌てて彼を見上げると。

「そうだな……お前には、何もしないでいてやるっ」

1曲目のダンスの途中で相手を放棄するや、王太子はついていけないレイシエスや周囲も全部置き去りにした。

そして、今度こそホールを出て行ってしまったのだ。

『お前には、何もしないでいてやるっ』

不吉な言葉が、立ちつくすレイシエスの中でこだまする。

では。

誰に。

何をする。

言うのか。

馬、ではなく

くしゃくしゃの赤い髪。

それを右手でおさえ、もう片方の手でドレスを掴み上げながら、ウィニーは通ったことのない廊下へと侍女に案内されていた。

茫然の後のみじめさが、いまの彼女を包んでいる。

何で、こんな目にあわなければならないのか。

次期公爵であるレイシエスの妹として、目立たない程度に初めての晩餐会を楽しむ予定だった。

あまりダンスは上手ではないが、公爵とも踊ってもらったもった。った。

そんな予定は、あの王太子の出現でボロボロにされてしまったのである。

文字通り、髪はボロボロにされた。

ホールから放り出され、みつともない姿で歩くウィニーは、王宮で働く人間たちの目にさらされる。

表情を変えずに会釈して道を開ける警備兵や侍女たちに、どんな想像をされているのか分からないが、みじめさに拍車をかけてくれるのだけは間違いなかった。

く、くやしい。

相手は、王太子だ。

どれほど理不尽な真似をされたとしても、ウィニーでは決して立ち向かえない相手。

ロアアールにいる間は、彼女より上の人間は身内だけだった。

母は論外だが、父や姉にこんな理不尽はされたことがない。

ロアアールから離れてみれば、他人から非道な振る舞いをされるのだと、身を持って味わってしまった。

何の抵抗も出来ない相手。

その悔しさを、こうして一人ぼっちで味わわされながらも、自分がロアアールという殻に少なからず守られていたのだと痛感する瞬間でもあった。

「ウィニー」

足取りも重く歩いていた彼女の背後から、駆けてくる音と声。

慌てて振り返ると、スタッフアが追いついてきた。

赤毛の髪が、少し乱れている。

強硬なヘアセットにも関わらず、反乱を起こしかけているのだろう。

「スタッフア兄さん……姉さんは？」

心細かったウィニーは、追ってきてもらえて本当に嬉しく思いはしたが、同時にレイシエスを放ってきたのかと心配になった。

「ああ、余り大丈夫じゃないが……彼女にお前のことを頼まれた」

険しい表情を眉間に浮かべながら、彼は低く呟く。

大丈夫じゃない。

それは、あの王子が姉にちょっかいをかけているということだろうか。

ウィニーの表情も曇ってしまう。

「わ、私は髪を直してもらっただけだから……姉さんについてあげて」

あんな理不尽の塊の男が優しく振舞うなんて、彼女にはとても思えなかった。

いま危ないのは、姉の方ではないのか。

ウィニーは、そう思ったのである。

「心配するな。あの場には兄上もいるし、人目がありすぎて無体な真似も出来ないだろう」

そんなスタッフアの意見に、彼女はとても賛同出来なかった。

この頭こそ、無体の証拠そのものだったからだ。

だが、それ以上スタッフアを追い返す言葉は、ウィニーにはなかった。

「ひどい目にあつたな」

ほんと背中を押して、彼と一緒に歩き始めてくれたからだ。

みじめな気分が、少しはましになった。

スタッフアは、こんな理不尽な頭の事情を知っているし、同情もしてくれる。

この恥ずかしい見た目の、半分の重みを一緒に抱えて歩いてくれるのだ。

「兄上が来られなくて、済まなかったな」

そして。

一番、嬉しい言葉を伝えてくれた。

本来、ここにいるべきなのはフラの公爵だと言われたも同然だった。

スタッフアは、姉についていた心を抑えてここに来てくれたように、公爵もまた、自分についていた心を抑えて、姉についてくれているのだろう。

肩書や立場で、出来ることは違ふ。

そんな中で、こうして出来る限りの助けの手を差し伸べられるのは、心地よかった。

そんな中、ようやく髪を直せる部屋に到着したのか、侍女は扉を開ける。

「外で待っている」

スタファとは、そうして扉で仕切られた。

ウィニーは、鏡の前に座らされる。

王太子の侍女たちなのだろうか、彼女らは静かに、そして出来るだけ手早く動くことを心がけているように見えた。

お湯が運ばれ、温められた布でパキパキに固められていた髪が解かれてゆく。

ウィニーには、多くの不安があった。

この、非常に性質の悪い髪を、よその侍女がうまく出来るだろうか、と。

そんな彼女の不安は的中し、無言ながらに侍女たちは苦戦しているようだった。

公爵の娘だと知っているのかは分からないが、とにかく丁寧に丁

寧に仕事をしようとする余り、ほとんど力を入れて髪を引っ張らな
いため、全然言う事を聞かないのだ。

周囲の侍女たちの間に、微妙な空気が通り過ぎた後。

救世主が登場した。

貫禄のある50歳くらいの赤毛の女性が、颯爽と登場したのであ
る。

南長様。

そう呼ばれているので、侍女頭の一人ではないだろうか。

少しふつくらした南長は、侍女たちを挫折させたウィニーの髪を
見るや、笑いそうになり慌てて顔を元に戻す。

咳払いをしてごまかしたようだが、ウィニーはしっかりとそれを
目撃した。

おそらく、何が起きたか分かった上で、おかしくてしょうがなか
ったのだろう。

だが、さすがは赤毛の持ち主。

櫛と整髪剤を持つや、ウィニーの髪を多少痛いほどに引っ張って
結い上げていく。

この髪に生まれた時点で、引っ張られるのには慣れているとはい
え、なかなか豪快なやり方である。

しかし、ピンを多用し、逃げたがる髪を手早くおさめていくのは、見事としか言いようがない。

髪飾りをつけ、新しい髪型として出来上がった時、周囲の侍女たちは心底ほっと安堵のため息をついていた。

そんな、穏やかな空気を。

壊すような騒ぎが、扉の外から聞こえてくる。

「いまはまだ、仕度中です」

スタファアの声。

切羽詰まった彼の声に、ウィニーが何事かと振り返った時には。

扉は、開け放たれていた。

犯人は。

馬——ではなく、王太子だった。

堤防と悲劇

身分に関係なく、相手を殴り飛ばせるとするならば、スタファは最初に間違いなく王太子に鉄拳を浴びせただろう。

残念ながら、それは許されないため、ぎりぎりと奥歯を噛みしめるしか出来ないのだが。

前回の謁見会まで、王太子はスタファにとって、空気と大差なかった。

兄が敬遠している理由も、よく分かっていなかった。

だが今回、その理由は嫌というほどよく理解出来た。

この男に目をつけられると、ロクな事にならない。

周囲の目など気にすることなく、王太子自らの速度で動き、そして傍若無人の限りを尽くすのだ。

いまここに、この男が来たということは、レイシエスを放り投げて来たのだろう。

最初にウィニーを、ホールから放り出したように。

まるで、猫のような興味の移り変わりは、ハタ迷惑以外の何物でもない。

本気で殴り倒すわけにもいかず、スタファは怒りを抑え込みなが

ら、赤毛の可愛い娘を守ろうとした。

「どけ」

「いまはまだ、仕度中です」

スタファアは、わざと大きめの声を出した。

中のウィニーに、異変を伝えること。

他の人間に、王太子の方が問題のある行動を起こそうとしていること。

それらを、明白に伝えるためだ。

後で、このことが何か問題になった時、スタファアが常識的な行動を取ったという証拠を残しておかなければならなかった。

「それが……どうかしたか？」

だが。

そんな彼の努力など、平気で踏みつける男がいた。

立ちはだかるスタファアを簡単に脇に押しやり、王太子は扉を開け放つ。

慌てたスタファアも、室内を見た。

髪を直しているだけなのだから、ひどい有様ではあるまいと思い

ながらも心配だったのだ。

幸い。

ウィニーは、無事に髪の手直しも終えていた。

周囲に多くの侍女もいるが、王太子の登場を見るなり、すうっと頭を垂れて下がって行く。

唯一。

赤毛の年配の侍女が、櫛を手を持ったまま表情を曇らせてこちらを見ていた。

「恐れながら、王太子殿下……まだ、全ての仕度が整っておりません」

その女性は、長く王宮に努めているのだろう。

静かに、しかしきっぱりと王太子に物を申している。

「南長、お前の持ち場はここではないはずだ……余計な口を挟まずに下がっている」

「王太子殿下……赤毛を知らぬ者に、赤毛を美しく結い上げることが出来ませぬ」

櫛を捧げ持ち、彼女は心底辛いことのように語るではないか。

スタッフアは、怒っていたのも忘れて笑いそうになってしまった。

南長と呼ばれた女性は、何と役者であるかと。

そして。

王太子の方もまた、他の人間に対する態度と彼女に対しての態度は、一線を画しているように思えた。

「もう出来上がっているだろう」

「まだ、でございます」

「南長。それ以上、私の邪魔をすると……」

「いつも、申し上げておるではございませんか。『好きな時に、首は差し上げます』と」

王太子と女性の間で、物凄い火花が散った気がした。

冷たい王太子の目と、熱い南長の目。

もしここに、剣の一本でもあれば、刃傷沙汰が起きていたに違いないと思えるような緊張の一瞬。

「フン……」

王太子は、鼻を鳴らしたかと思うと。

「きゃああー!」

ウィニーの。

髪を。

引っ張った。

せっかく、綺麗に結い直されていた赤毛は、再び悲劇の有様となったのだった。

結局。

ウィニーの髪が綺麗に整えられるまで、更に多くの時間が必要だった。

扉が開き、彼女は南長と共に部屋から出てくる。

「最初より、綺麗な髪になった」

スタッフは、ウィニーの復活を励まし喜んだ。

多少元気がないながらも、彼女も笑みを浮かべる。

王太子がいないことに、何よりほっとしたように見えた。

南長に水を差され、彼はさっさと出て行ってしまった。ホールにでも戻っているのだろう。

「お見事ですネ……南長殿」

スタファは、ウィニーを救った女性に語りかけてみた。

彼女が何者かは、分からない。

その容貌と呼ばれ方からすれば、間違いなくフラの出身なのだろうし、こんなところで「長」という肩書で働いているのだから、いい身分のはずだし、親戚の可能性も高い。

「その肩書で、呼ばれない方がよろしいかと……」

ふふふと、女性は意味深に微笑む。

スタファが、何のことか分からずにいると。

「南長は、後宮の肩書ですよ。もし、フラからご側室が上げられることがあれば、私がお世話することになるのです」

ああ。

スタファは、苦笑した。

そついう意味か、と。

何故、肩書に『南^{フラ}』があるのかと分からなかった。

当然だ。

後宮の事など、本来表に出されることはないため、他の男が知るはずなどないのだから。

この分だと、東長だの北長だの西長もあるに違いない。

各公爵家から側室をもらうかどうかとも分からないというのに、常に準備しているところが憎たらしい。

いつでも、側室をもらうことが出来るといって、自信の表れに思えたからだ。

ふと、スタファは疑問にぶつかる。

「ところで……北西長はおいでか？」

北西は、これまで一度も王家に側室を出していないはず。
ロアアール

突然、領地の名前を出されて、ウィニーが驚いたようにスタファを見上げる。

「肩書はありますが……どなたもついてらっしゃいません」

南長は、意味深な笑みを浮かべた。

この傍若無人な王家でさえ、長い間諦め続けたロアアールの娘。

見た目こそ赤毛ではあるが、スタファはウィニーの事が心配でならなかった。

ドラ猫にエサを与えないで下さい

カルダは、放り出されたレイシエスの手を取りに向かった。

まったく、あのドラ息子とは。

心の中で王太子を毒づくのは、これが初めてではない。

彼が、傍若無人に振舞えば振舞うほど、声にならない恨みつらみを積み重ねて行くことになるというのに、そんなことはこれっぽっちも気にかけていないのだ。

反乱を、起こされたいのか。

初ダンスの最中で置き去りにされたカルダのはところは、茫然とホールの中に立ちつくしている。

周囲から寄せられる冷たい視線は、同情半分、嘲笑半分。

王太子の機嫌を損ねた、憐れな女性に向けられる視線など、そんなものなのだ。

レイシエスの手を取り、カルダはダンスの流れの中に彼女を引き戻した。

「公爵様……」

ほっとしたような、しかしまだ顔色の悪い頬で、彼を見上げてくる。

「興味を失われたようで、何よりだ」

放り出されたことはよいことなのだと、レイシエスに伝えようとした。

この一瞬は、恥のように思えるかもしれないが、王太子という厄病神に離れられたことは、今後の彼女のためになるだろう。

腕に添えられた少女の手に、微かに力がこもる。

「でも……ウィニーが……」

視線は、ホールの出入り口の方を向く。

さきほど、王太子が出て行った先だ。

ああ。

なるほど、とカルダは眉間を寄せた。

ウィニーとレイシエスにちよっかいをかけていた王太子は、結局ウィニーの方に走ったのか。

なまじ、とびきりの美しさをウィニーに求めていない分、厄介な事だった。

「スタッフがついている……手に負えない事態になれば、私を呼びに来るはずだ」

これまでの王太子の動きは、カルダが見る限り、試食の繰り返しだった。

レイシエスをつまみ食い、ウィニーをつまみ食い、そしてまたレイシエスを――それが、ある一定以上進んで、ようやくどちらを本当に食べるか決めたような。

女という生き物を、これまで好きにつまみ食って来たのだろう。

カルダから見れば、食事の作法がなっていない、まさにドラ猫だった。

誰も叱れない、王の庇護下の横暴な猫。

その仕打ちに誰かが怒り狂って、いつそ反逆くらい起きればいい、と思っっているに違いない。

そんな事態に発展する前に、カルダはウィニーをフラへと呼び寄せなければならなかった。

「都にいる間に、ロアアールの公爵へ書状をお送りしよう」

その時間を、少しでも短くするために、彼は動き出すことにしたのだ。

レイシエスが、ほっとしたように表情を緩める。

こうして見ると、彼女も年相応だ。

ウィニーとたった一つしか変わらない16歳であることを、時折

忘れそうになる。

彼女もまた、カルダの愛すべきはこの一人で。

幸せになって欲しいと、願ってしまう。

その幸せのかたちは、ウィニーとは大きく違うことになるだろうが。

「妹を、よろしくお願いします」

けなげな彼女のお願いに。

「スタッフアをよろしく頼むよ」

そう返すと。

「まあ……」

レイシエスは、とても困った笑みを浮かべるのだ。

困らせる程度には、彼の弟も頑張っているようだった。

王太子は、一人で戻って来た。

ウィニーにふられたのか、随分機嫌の悪い様子で。

彼の性質を知っている人間は、近づくのを避けるところだが、娘を連れて近づく馬鹿がいる。

アール（西）の公爵だ。

家族同伴を許されたという事実を、王太子の新たな側室探しだと勘違いしたのか。

ウィニーの髪を引っ張り、レイシエスとダンスを踊って放り出し――そんな態度を見れば、勘違いしてもおかしくないだろう。

ロアアールの娘二人が無碍にされたのを見て、自分の娘ならばうまくやるとでも思ったのか。

食事の作法の悪いドラ猫の前に、エサを置くな。

前に、水をぶっかけられたことも忘れて、のこの王太子に近づくアールの公爵に、カルダはため息を洩らした。

不機嫌な男に、その娘は踊りに連れ出される。

カルダは、ダンスの輪からレイシエスの手を引き、脇に下がった。

面倒に巻き込まれるのは、御免だったからだ。

だが、それは杞憂だった。

気がつくと、王太子とアールの娘は、ホールから消えていたからだ。

正直。

カルダは心底、ほっとした。

わずかの時間でも、王太子の興味がそれるなら、願ったりかなったりだ。

少なくとも、相手の女性もそれを望んでいるのならば、彼が口を出すことでもないし、同情する気もない。

「かわいそうに……」

ただ、レイシエスは小さくそう呟いた。

彼女の行く末が、幸せなものにはならないだろう——そう思ったに違いない。

ダンスのお相手

ようやくウィニーがスタファと共にホールに戻ると、王太子の姿はなかった。

ここに、戻った訳ではないのだろうか。

だが、そんな嫌な相手よりも。

「大丈夫、ウィニー？」

心配そうに語りかけてくる姉と。

「もつと美しくなったようだね」

優しく手を取ってくれるフラの公爵の二人に、本当にほっとしたのだ。

赤毛の兄弟が一瞬視線を交わし合い、お互いをねぎらう素振りを見せたのを、ウィニーは見逃さなかった。

女性を守りきった、誇らしくも男らしいねぎらい方に思えて、嬉しくなってしまう。

「遅くなって申し訳ありません……一曲、お相手いただけますか？」

そんな男同士の無言の会話が終わるや、スタファは早速レイシェスにアタックを始めた。

「喜んで」

勿論、断るような姉ではないし、そんな赤毛の男に優しい微笑みさえ浮かべている。

ウィニーでさえ、見とれてしまう一瞬だ。

どうやったら、あんな上品で美しい笑みを浮かべられるのだろうか。

自分の顔で実践しようとして、顔の筋肉がつりそうになって断念した過去を持つウィニーだった。

お似合いの二人が、自然にダンスの輪の中に入って行くのを、彼女はついつつと見つめてしまっていた。

「さて、私の可愛いはどこ殿」

自分が、フラの公爵に手を取られていることさえ忘れていたので、声をかけられてはっとする。

「いままで帰りを待っていた、憐れな私と一曲踊っていただけますか？」

レディにダンスを乞うような言葉に、ウィニーは赤くなってしまう。

もしかしたら、髪より顔の方が赤いのではないかと思うほど、彼女の頬の温度は上がった。

「姉さんと踊らなかつたんですか？」

つい、照れ隠して姉を引っ張り出してしまふ。

二人が、ただずっと待っていたというのは、何となく想像出来なかつたのだ。

「勿論踊らせてもらった……けれど、私はウィニーを待っていたのだよ」

見事な――殺し文句だった。

女性なら誰でもいいわけではなくて、今日のパートナーである彼女を、最大限に引きたててくれる言葉である。

嬉しいやら、舞い上がるやらで、ウィニーの頭の中は大変なことになっていた。

もつとちゃんとダンスの稽古をしておけばよかったと、心底後悔しながらも、彼女は公爵の手を軽く握ってホールへと進み出る。

端っこでいいと思っていたのに、彼はどんどんウィニーを中央へと引っ張って行く。

既に踊り始めている、レイシエスとスタファの横を通り過ぎて、踊るスペースを確保する。

「さあ……可愛いはとこ殿……いや、ウィニー嬢。あなたのデビューのダンスだよ。皆に、その美しい姿を見せつけてあげよう」

囁かれた行為と言葉が、余りに不慣れなものだったため、挙動不審になりそうだった彼女は、穏やかな温度と大きなてのひらに腰を支えられ、一度ぴたりと動きを止めた。

公爵を見て。

一歩目を。

踏み出す。

「……」

出す足を間違えて、思い切り公爵の足を踏んでしまったが。

しかし、さすがはフラの男である。

顔色一つ変えずに、彼はウィニーに微笑み——もう一度仕切り直してくれたのだった。

ケチのついた晩餐会の始まりとは裏腹に、ウィニーはとても楽しい時間を過ごしていた。

このまま、時が止まってしまえばいいのに、と思うほど。

だが、幸せな時間は、いつか終わってしまう。

そして、それはあつという間に來てしまうものなのだ。

「タータイト公、そちらのご令嬢をご紹介いただけませんか？」

ダンスの合間に、そう言つて若い男が近づいて來たのだ。

ウィニーは、母方の実家であるロア以外の人は、ほとんど知らなかった。

「ウィニー・ロアアール・ラットオージェン嬢ですよ。ウィニーこちらは、フォルトラ・アール・クレイアルス氏だ」

フラの公爵の丁寧な紹介に、ウィニーは型どおりの挨拶で応える。

だが、西^{アール}の関係者と言われて、複雑な気持ちだった。

まだ若いので、長男ではないようだ。

「ロアアール？ あ、ああ……失礼。タータイト公のお身内かと思つていました」

「血は、しっかりとつながっていますよ。はどこですかね」

そつとウィニーを引き寄せ、公爵は微笑んだ。

常に彼に守られている気がして、彼女は幸せな気持ちになる。

「そうでしたね……ウィニー嬢をダンスに誘つてもよろしいでしょうか？」

その幸せな気持ちは、次の瞬間には驚きへと変貌を遂げていた。まさか、ダンスに誘われるとは思ってもみなかったのだ。

フラの公爵のおかげで、多少はダンスらしい形になったが、それは彼がリードしてくれたからであって、他の人と上手に踊れる自信はまったくなかった。

どきどきびくびくしながら公爵を見上げると、彼は優しく微笑んでこう言った。

「一曲、踊ったら戻っておいで」

ここは、社交の場だよ。

そう諭された気がした。

みなが、自分の家を背負ってここにいるように、ウィニーもまたロアールの一部を背負ってここにいるのだ。

うっ。

フラの公爵に促されてまで、強硬に断ることも出来ない。

足を踏まないように、踏まないように。

呪文のように、さっきの失態を唇の中で呟きながら、彼女はアールの子息とホールへと進み出るのだった。

さあ、肝心の一步目。

ウィニーが、ときどきしながらダンスの体勢を整えようとしたその時。

身体が――後ろに動いた。

いや。

後ろに、引っ張られていたのだ。

一瞬にして遠くなるアールの子息を茫然と見ていたウィニーは、くるりと反回転させられて、視界を真反対に変えられた。

いたのは。

うわぁ。

ウィニーは、いやな悲鳴をあげそうになった。

そこにいたのは。

王太子だったのだから。

馬の扉

戻って、来てる。

ウィニーは、みぞおちの辺りががぎゅーっとなる感じを味わわされた。

アールの子息とのダンスのはずが、いつの間にか王太子と向かい合っていたのだから、驚きとストレスで胃もおかしくなるはずだ。

冷やかな目で見おろされ、ウィニーは反射的に自分の頭をかばった。

王太子がまた、彼女の髪をめちやめちやにするのではないかと思っただのである。

何しろ、これまでの短い時間に、二回もぐちゃぐちゃにされたのだから。

彼は、もしかしたらウィニーがこのホールにいるのを、よく思っていないのかもしれない。

要するに、邪魔だから追い出したいのではないかと、彼女は考えた。

でなければ、これほどまでに絡んでくるはずがないのだ。

よほど庭で言い返されたのが、腹が立ったのだろう。

このような思考をしたわけだから、ウィニーが自分の髪をかばったのは当然である。

だが。

手を持ち上げた彼女の、完全に無防備になった脇に、王太子は手を回すではないか。

あれ？

予想外の行動に、ほけつとなってしまったウィニーは、気づけば自分が王太子とダンスを踊るような態勢になっているのに気づく。

引き寄せられた身体のせいで、彼の匂いが鼻孔をくすぐる。

お酒と香水が、入り混じったような匂いだ。

華やかな甘ったるい、女性のつけるような香り。

彼のイメージとは全然違うそれに、本当に王太子であるか、ウィニーが思わず顔を上げた時。

まったく息も合わないまま、彼はさっさと踊り始めてしまう。

ついていけない足を、慌てて踏み出して。

ウィニーは——王太子の足を、ぎゅうつと見事に踏んづけてしまった。

「……」

ギロリと睨まれて、慌てて足を引っ込める。

また、やってしまった。

フラの公爵であれば、さらっと流してくれるだろうが、相手は王太子だ。

足を踏んだ罪で、牢に放り込まれるか、罰でも与えられるのではないかと、ウイニーは背筋が冷たくなった。

だって、この人が勝手に。

言い訳だけなら、彼女の中には山ほどある。

心の中では、「この人」呼ばわりだ。

ずっと領地で暮らしていた彼女には、王家とか王太子と言われても、偉い人であるとは分かっているが、その程度だ。

ロアアールという土地柄もあってか、王家へ忠誠の限りを尽くせというような教育もない。

そんな赤毛の娘に対して、王太子は。

「田舎者め」

一言、冷たく言い放つと。

「……！」

その痛みに、ウィニーは飛び上がりそうになった。

足を。

踏み返されたのだ。

な、な、な、何て人！

大きな目を見開いて、ウィニーは痛みや驚きに混乱した。

公衆の面前で、女の髪をぐしゃぐしゃにする男である。

足を踏み返すなど、造作もないだろう。

見た目は、これほど冷たい気配が溢れ出しているというのに、ウィニーにやることは、余りに子どもじみてはいないか。

だから、彼女の頭に血が昇る隙間を与えてしまうのだ。

痛みと怒りと恥ずかしさで真っ赤になったウィニーは、そのまま自分が放り出されるだろうと思ったし、そうされたいと願った。

しかし、それは許されなかった。

王太子は、彼女から手を放さなかったし、冷たく不機嫌な顔のまま、踊り出してしまったのだから。

田舎者と罵れながらも、一曲はどうしても相手をしなければならぬようだ。

何なのよ、この人。

ウィニーは、何とか足を踏まずに踊りながらも、自分の理解の遙か外にいるこの男についていけずに戸惑っていた。

王族というのは、みなこんな風にぶっ飛んでいるのだろうか。

だとしたら、姉が不憫でならない。

姉がロアアールの領主になる多くの時間、こんな男や他の王族と、仕事の上とは言え、付き合わなければならぬのだ。

さぞや、心労も重なることだろう。

早く、公爵のところに戻りたい

ウィニーは、回りながら自分の味方を探した。

姉とスタッフは、近くを踊ってくれている。

気にかけてくれているのは、その視線からよく分かった。

一方、公爵は。

他の女性に捕まっているようで、踊りこそしていないものの、談笑しているようだ。

う。

ウィニーがピンチだというのに、悲しい現実である。

たった5人しかいない公爵の中の一人なのだから、放っておかれるはずはないのは分かるが、少しは気にかけて欲しいと願ってしま
う。

とにかく、一曲終われば。

彼女は、ただそれだけを望んで、義務と割り切って踊り続けた。

そろそろ終わりだろうか、曲を目で追いかけていると、面白くない目に睨みつけられているのに気づく。

怖いので、その目を見ないフリをして、再び周囲を見回す。

あれ。

いつの間にか、ウィニーたちは踊りの輪の端の方に来ていた。

もう、フラの公爵も見えないし、姉たちも少し遠い位置。

その代わり。

最初に馬の出て来た、奥の出入り口にとても近い。

それに気づいた直後。

強い遠心力で、ぶんと一度振り回されてよろけた。

慌てて倒れないように、王太子にしがみついてしまったウィニー

は、自分の身体が勝手に歩いているのに気づく。

いや、強引なこの男の力に、引っ張られているのだ。

向かう先にあるのは、扉。

え？ あ？

自分でも意味不明の、疑問符を飛ばしながら、彼女は声ひとつ出せないまま、王太子にホールを連れ出されてしまったのだった。

自由の捕まえ方

「命令だ、私の許可があるまで開けるな」

ウィニーの後方で、馬が現れた扉は閉ざされた。

そこは本来、王太子が登場するはずだった特別な扉なのだろう。

他の人間は、公爵であろうともウィニーの使った出入口と、同じ扉を使っていたのだから。

そんな特別な扉が、閉ざされたということは。

彼女は、自分の意思でホールに帰れない、ということになるのか。

驚きながらも、ウィニーは引つ張られるその力に抵抗した。

このまま、王太子の希望通りになるということは、自分にとって危険な気がしたのだ。

「離してください！」

か弱い姫に比べたら、少しは力がある方だと思っていた。

だが、自分の手を掴む、王太子ひとつ振り払えない。それどころか、なおさら手に力を込められて、痛いほどだった。

その現象は、ウィニーを更に怖がらせた。

どうしたらいいか分からない、冷たい焦燥感が彼女の足元から這い上がってくる。

だが、そこで口がきけなくなるような、気を失うような弱さは、彼女にはなかった。

「嫌です、帰ります！ 帰して！ 離して！！」

パニックを起こしながらも、淑女にあるまじき勢いでジタバタと暴れ、大声を出せたのだ。

うるさそうにしながら引きずる王太子と、抵抗の限りを続ける赤毛のウィニーを、廊下に控える者たちは必死に見ないフリをしているようだった。

誰一人と、王太子を止めるものなどいない。

そう考えると、あの南長という女性は、よほど特別だったに違いない。

他の誰にも、出来ないことを言っただけのだから。

「はーなーしーてー！」

ウィニーは、ついに自分の足を折り曲げた。

廊下に座り込み、何が何でもついていけない気持ちをアピールしたのだ。

公爵にもらった綺麗なドレス。

それを傷つけないし、汚したくない。

そんな気持ちさえ、いまは頭から消し飛んでいた。

王太子は強烈なウィニーの抵抗に、一度足を止め、最大限の機嫌の悪さを表した目で、彼女を見下ろした。

直後。

こともあろうに。

彼は。

ウィニーを床に引きずったまま、歩き始めたのだ。

「きゃあっ！」

それは、なんとみっともない光景だったのか。

ドレス姿の少女を、まるで抵抗する罪びとのように、ずるずると引きずるのだ。

ウィニーの靴が、片方脱げてしまったというのに、そんなこともおかまいなしである。

さすがに、その暴挙にぎょっとした衛兵とウィニーは目が合った。

「助けてー！」

声の限りに、その衛兵に助けを求めるが、彼はあらぬ方を見てしまっ

誰も。

ここでは、誰もウィニーを助けてはくれないのだと、思い知らされる瞬間だった。

同時に。

この感覚には、覚えがあった。

母がウィニーを叱りつけている時の侍女たちが、みなこうだったのではないかと。

母の癪癪に逆らえる侍女など、誰ひとりとしていなかった。

姉でさえ無理だった。

ウィニーは、ただ母の気が済むまで言葉の限りを投げつけられ、その後、もう見たくないように追い出されるのだ。

誰も、助けてくれない。

「……」

そう理解した時、ウィニーは悲鳴をあげるのをやめた。

母にそうしてきたように、相手の気の済むまで黙ってされるがままになっていけば、いつか嵐は過ぎ去り、そのうち放り出されるの

だ。

ロアールにいる時と、同じ感情が胸をかすめる。

ずるずると。

淑女どころか、人間未満の扱いをされながら、ウィニーは——我慢しようとした。

いつもの、我慢。

いつか、ロアールを逃げ出して、我慢のない幸せを手に入れようと思っていた。

だが、どうだ。

王都に来たとしても、結局自分はい慢することになるではないか。

母と同じように、理不尽な力に膝を折られる。

どこに行ったとしても、同じではないのか。

たとえば、フラの公爵の妻になっても、必ず何かがウィニーの頭を押さえつけるだろう。

誰も自分を守ってくれない。

そんな瞬間が、いつかどこかでやって来る。

フラの公爵の顔が、心の中で浮かんた。

いま、彼は『しょうがない』と思って、諦めているだろうか、と姉やスタッフも、そう思って、いまもなお踊り続けているだろうか。

違う！

ウィニーは、顔を上げた。

きつと彼らは、王太子の閉ざした扉を開けようと、頑張っているはずだ。

彼女の後を追おうと、手を尽くしてくれているはずだ。

確かに、いまこの瞬間で、ウィニーは誰にも守られてはいない。

だが、彼らが自分を助けようと思っているのは、間違いないはず。

王太子に髪を引っ張られた時、公爵も姉も助けに入ってくれた。

髪を直す時、スタッフは追ってきてくれたし、王太子が部屋に入らないよう抵抗してくれた。

彼らの気持ちのためにも。

何としてでも、無事に帰るのだ。

ウィニーは、掴まれている手に自ら力を込めた。

自分の身体を、より王太子の腕に近づけるように。

その気配に気づいたのか、彼は足を止めて振り返る。

ありがたいことに、引きずられる力が消え、彼女は簡単に王太子の手に寄ることが出来た。

次の瞬間。

ウィニーは、彼女の手を強力に掴んでいる王太子の手に向かって。

がぶつと、噛みついたのだった。

「……！」

痛かったに違いない。

当然だ。

痛いほどの勢いで噛んだのだから。

とっさに引かれた王太子の手に、ウィニーはついに己の自由を勝ち得たのだ。

ドレス姿で、自分をほめたくなるほど身軽に立ち上がると、彼に背を向ける。

戻るのだ。

みな待つあのホールに。

もう片方、残った靴も蹴り捨てる。

ドレスを持ち上げ、ウィニーは裸足で駆け出したのだった。

公爵道

絶望的に、思えた。

レイシエスは、その扉の前で立ちつくす。

主賓専用の扉は、王や王太子専用の扉という意味と同じだ。

その先にあるのは彼らの部屋であり、この扉以外から向かおうとしても、許可なく立ち入ることは許されないエリアとなる。

ついさっきまで、踊りの輪の中にいると思っていた妹は、風のよ
うに素早く、そして計算された位置とタイミングにより、王太子に
連れ去られてしまったのだ。

異変に気付き、レイシエスがダンスを投げ出して追った時には、
もう遅かった。

『王太子の御命令です』という、扉に衛兵の言葉が無情に響き、
扉はびくともしない。

王太子は彼女の妹を、何事もなく帰すことはない——そういうこ
とだった。

王族のことなど、まったく知らない妹である。

いま、自分がどういう状況に置かれているのか、まるで理解して
いないまま連れて行かれているに違いない。

どれほど不安で、恐ろしい思いをしているだろうか。

王太子という人間を、表面上とは言え知っているからこそ、レイシエスは己の背筋を冷たくした。

どうにかして、この扉を突破する方法はないのか。

だが、心の中で誰かが言う。

『そんなことは、無理だ』と。

公爵代理である彼女でさえ、この扉を開けることは出来ない。

このままここで妹が戻されるのを、ただ待たねばならないというのか。

「交代しよう」

そんな彼女の後ろから、フラの公爵が駆けつけてくれた。

スタファアが、呼んできてくれたのだろう。

「兄上に任せよう……私達がいますべきことは、見ていることだ」
ギリギリと、スタファアは声の奥にある怒りを、決して隠してはいなかった。

だが、レイシエスの肩を後ろから支えるように抱きながら、それでも彼は踏みとどまるのだ。

見ていること？

彼女は、それを疑問に思った。

見ていて、何が変わるといふのか。

いままで、レイシエスはずっとウィニーのことを見ていた。

ロアールでは、見ていることしか出来なかったからだ。

それで、何が変わったといふのか。

無力な自分を、思い知るだけである。

実際、公爵の問いかけに、衛兵は「王太子命令」という同じ言葉で拒んでいるではないか。

「……」

一度、フラの公爵は言葉を止めた。

彼は、上着の内側に手を入れ、何かを取り出す仕草をする。

「では、王太子に急ぎお渡しいただきたいものがある……タータイト公爵よりと伝えていただければ分かる。少しだけ、隙間を開けるくらいならばよいだろう」

衛兵は、彼が手に持っているものを見て、ぎょつとした。

それは、大きな赤い石のはまっている指輪だった。

一衛兵が、決して触れることも出来ない素晴らしいものであることは、レイシエスの目から見ても分かる。

余りの高価な品に、彼らも動揺したのだろう。

公爵のすぐ側の衛兵は、直接指輪を預かるではなく、向こう側にいる仲間に、責任をなすりつけてしまおうと思ったに違いない。

その扉を、ほんのわずかだけ開けたのだ。

瞬間。

フラの公爵は指輪を放り出すや、その隙間に手をつっ込んだのである。

「何をなさいます!」

慌てたのは、衛兵だ。

いや、慌てすぎたと言っている。

彼らは、思わず扉を強く閉めてしまった。

レイシエスは、強く身を竦めていた。

何が起こったか、容易に想像出来てしまったからである。

扉は——無残にも、公爵の指を強く挟んだのだ。

だが。

レイシエスが見た公爵は、扉から決して手を引く事なく、そこに立っている。

青ざめたのは、衛兵だった。

たとえ王太子の命令であつたとしても、彼らは貴族最上位の、公爵の身に怪我をさせたのである。

いくら彼が、その場にしっかりと立っていて、手も引かず叫び声ひとつあげていなかろうと、あの勢いで怪我をしていないはずがないのだ。

「私は指輪を落としたので、慌てて拾おうとしたただが……何故、このような仕打ちをされねばならないのかね」

公爵の背から、赤い炎が上がっているように見えた。

普段の優しい彼からは、とても想像のつかない力の声。

どれほどの言いがかりであろうとも、拒否出来ない強さが、レイシエスの目の前にある。

「も、も、もうしわけござ……」

その気に押され、衛兵たちは縮みあがりながら、公爵の手を救うべく扉を開けた。

レイシエスの前で。

開かないはずの。

扉が。

開いたのだ。

その向こうから。

「公爵のおじさま……！」

駆けてくる赤毛の少女がいた。

髪を乱し、ドレスを抱え上げ、靴もはいていないウィニーが、顔を真っ赤にしてこちらに向かってくる。

妹もまた。

諦めていなかった。

あの王太子から逃げるのは、どれほど大変だっただろう。

啞然とする衛兵を横目に、公爵は怪我を負ったはずの手で、扉をもう少し余計に開く。

妹が通るのに、問題のないほどに。

「おかえり、ウィニー……最高だよ、君は」

両手を伸ばして、公爵は彼女を抱き止めた。

レイシエスは、『見ていた』。

その意味が、ようやくいま分かったのだ。

スタファは、ただ『傍観しろ』と言ったのではない。

公爵である、彼の兄のやり方を見ると言ったのだ。

知恵を使い、己の身体を厭わず、威厳ある言葉で圧倒する。

これがまさに——公爵というもの。

ここまでする覚悟があれば、動かないはずの岩さえも動かすことが出来るのだ。

衝撃、だった。

動けないでいるレイシエスの後で、スタファは動いていた。

足元に落ちた公爵の指輪を拾って、ウィニーを抱きしめている兄に差し出したのだ。

公爵は、軽く顎で扉の向こうを指す。

それを受けたスタファは。

指輪を、扉の向こうへと放り投げた。

まるで、それがウィニーの身代わりであるかのように。

「出ようか」

ウィニーを支えながら、公爵は一言告げた。

誰ひとり、反論を唱えるものなどいるはずもない。

精神的な衝撃の大きさに、震えそうになるレイシエスを――スタ
ファは、支えるように腕を取ってくれたのだった。

保護

湿布と包帯でぐるぐる巻き。

スタファの兄であるカルダの右手は、現在そういう有様だった。

幸い、骨は折れていないようだが、効き手に広がる赤と青の痛ましい腫れの色は、閉ざされた扉の強さを見せていた。

ウィニーは、包帯の白を痛々しく思うかもしれないが、中の色具合よりよほどマシである。

同時に、兄の覚悟を決めた時のすさまじさは、見事だと痛感せざるをえなかった。

王太子を直接ブン殴れない分、カルダは己の身体を持ってして、理不尽を訴えるのだ。

公爵の怪我というものは、簡単に一言で済ませることは出来ない。

あの衛兵たち全員の首をすっ飛ばしてなお、到底足りることはないだろう。

王や王太子へ圧力をかけることは出来なくとも、大臣や執政官たちにはやり方があるのだ。

とはいっもの。

「王太子の手に噛みついて逃げるとは……」

スタッフは、つい笑いがこみ上げてしまった。

そんな王宮内での駆け引きなどと、無縁の娘が一人いる。

ウィニーだ。

彼女は、女性として正しいことをした。

何をしても、自分の身を守る。

それを、言葉通り実践したのだ。

あの王太子が、彼女に噛みつかれてどれほど驚いたかと思うと、
留飲が下がる思いだった。

とはいうものの、無罪放免というわけにはいかないだろう。

次期王に、怪我をさせたのだ。

公爵に怪我をさせることよりも、更に罪が重くなる。

無理難題を言われかねないのは、火を見るより明らかだった。

だから、兄はスタッフに書状を書かせた。

効き手を怪我しているために、重要な書類は彼が代筆することになるのだ。

宛名は、王太子——ではなく、王。

王太子が無茶をやらかす前に、先に王に話を通しておく方法を、兄は選んだのだ。

これは、レイシエスでは思いつけないこと。

彼女はまだ、正式な公爵ではないし、公爵という地位の使い方をよく分かっていない。

本来であれば、レイシエスは公爵である父親について学ぶのが一番いい。

机の上だけでは、決して分らない『公爵道』が、そこには必ず存在するのだから。

だが、彼女はその道は選べなかった。

母の圧力が強すぎたことと、現在、父親が身体を壊してしまっているからだ。

兄の姿を見せたことが、少しでもよい刺激になっていればいい。

スタファはそんな風に思いながらも、兄を妬ましい目で見つめたのである。

「何だ、その目は？」

兄の元に、ひっきりなしにロアアールの姉妹から手紙が届くからだ。

おそらく、お礼や怪我に対する見舞いなのだろうが、それが正直羨ましかった。

手の怪我の関係で、返事の代筆は勿論スタファになる。

ウィニーに対する返事はいいとしても、レイシエスに対する返事には、複雑なところがあるのだ。

悔しかったスタファは、自分も彼女に送る手紙を書き、一緒に届けさせたが。

兄の返事には、不穏な文章はなかったので、向こうの姉妹に王子からの直接の咎めはいつていないようだ。

その代わりというわけではないのだろうが、こちらの方に王太子からの封書が届けられた。

封書と言っても、手紙が入っているわけではない。

封筒の中から転がり出てきたのは。

指輪、だった。

兄が、ウィニーの身代わりであるかのように差し出したそれは、ものの見事にひんまがり指輪の様相をなしていない上に、赤い石はなくなっていた。

「まだ、ウィニーのことを諦めてはいないようだな」

険しい表情で、その指輪を見つめる兄。

スタッフも、非常に不快な気分を味わった。

邪魔をしたフラを、この指輪のようにひねりつぶしたいという意図と、赤い石（赤い髪のウィニー）は奪うという意図の、両方が込められている気がしたからだ。

ロアアールは、王太子に側室を送らない。

王太子は、そんな慣習など関係ないと思っているか、もしかしたら側室にしたいわけではないのかもしれない。

ただ、抵抗されるから捕まえて鬭りたい。

スタッフから見れば、そう思えるところもある。

だが。

レイシエスに向けるものとは、明らかに違うものをウィニーに向けている気はした。

それは、一度でも食らえば満足するものなのか、そうでないのかは彼には判別出来ない。

たとえ、一度食らえば満足すると言われても、はいそうですかと差し出すわけにもいかないのだが。

「兄上、ウィニーだけ、先にロアアールに帰したらどうだろう」

この場所は、彼女にとってもはや危険だった。

滞在の残り日数が、それほどないとは言え、また今回のような事件が起きては非常に厄介だ。

王宮にいたところで、部屋に閉じこもっているしか出来ないだろう。

それでは、あまりにウィニーが憐れではないか。

兄は、彼の言葉に考え込んでいる。

「ロアアールに、一人だけ帰すことは難しいだろう。馬車や警備の関係もある」

だが、結論は否定的なものだった。

「だけど……」

すぐさま、スタッフが説得しようと身を乗り出したが、兄に包帯のない左手で制される。

「まあ、待て。策がない訳じゃない……この馬鹿げた会が終わるまで、ウィニーはフランスカ伯のところに預けよう」

左手の向こうから語られた言葉は、彼を安堵させた。

そういう方法があったか、と。

タータイト家は、非常に革新的な人間が多い。

簡単に言えば、思い切りがよいし、反対されたって言うことを聞かない。

女性は恋愛結婚が多く、惚れた相手と見たら、どこの誰だろうが突撃していつてしまう。

フラとしても、ロアールのように王太子に娘を差し出すなんてしたくないのだが、過去に何人か側室としてあがっているのは、単純にフラの娘たちの恋愛病が発動して、その対象が王太子だったというだけである。

それと同じ要領で、都の貴族に嫁いだ者もいる。

一番、血が近いのが、さつき兄が口にしたブルンスカ伯。

その妻は、ウィニーたちと同じく、彼らのはところである。

ブルンスカ伯は、王宮勤めではないので更に都合がいい。

そこならば、うっかり王太子とはち合わせることもないだろう。

何か聞かれたら、「故郷に帰しました」と言っておけばいいのだ。

とにかく引き離しさえすれば、そのうち興味を失うだろう。

かくしてフラの兄弟は、ウィニーを親戚宅へと預けることを決めたのだった。

機会

ウィニーは、保護された。

レイシエスは、一人になってしまったロアアールの部屋で、寂しい気分を覚えながらも、本当にほっとしていたのだ。

これから、彼女には謁見会という重大な仕事が待っている。

そんな時に、王太子から妹を守り続けるのは、本当に大変なことだと思っていた。

フラの公爵の手際は、見事なもので。

ウィニーを置いておける屋敷と、そこへ行くまでの移動手段の全ての手配をあっという間に終えてくれたのだ。

妹が、王太子の手を噛んだという点については、既に王へ直接書状を送ったということも聞いている。

公爵という地位の使い方のひとつを、またしても見せてもらった。

ウィニーが、安全なところに移動した後、スタッフがやってきたので、レイシエスは彼に食い下がった。

どんな手紙を書いたのか、知りたかったのだ。

本来であれば、公爵の手紙の内容をスタッフが知ることはない。

しかし、いまの公爵は効き手を怪我している。

スタッフが代筆したのでは、と読んだのだが、当たりだったようだ。

余り細かい話は出来ないと前置きした上で、彼は要点だけ語ってくれた。

「外交上のしこりになる可能性を、兄上は示唆したんですよ」

王太子の、ありえない行動はウィニーから聞いていた。

廊下を、引きずられたことまで。

それらを薄絹にくるみながら、公爵は王に報告し、フラはそれに不快な感情を覚えたことを伝えたというのだ。

妹のことは、ロアアールだけの問題ではないのだと言ってくれたのだ。

心強い味方に、本当に嬉しかった。

「けれど、何故フラがロアアールに肩入れするのか、陛下は怪しく思わないかしら」

この後の、謁見会のことを考えると、そういう理論武装の薄いところを責められるのではないかと不安になる。

「『近々、正妃として求婚する予定の女性』、だそうですよ」

難しい顔になりかけたレイシエスに、スタファアの言葉はすつと転がり込んでくる。

「あら……」

余りの不意打ちの言葉に、レイシエスは驚いた顔を見せてしまった。

確かに、言葉の通りではあるのだが、まるで随分前から考えられ、当たり前のことであるかのように書かれていることにびっくりしてしまったのだ。

ほんのつい先日、この場の口約束で決まったことだったというのに。

「王太子に不快感を覚えるには、十分な理由でしょう？」

そんな彼女の顔に、少しおかしそくに微笑みながら、スタファアが付け足した。

確かに。

もし、ここにウィニーがいたならば、きっと恥ずかしそくに喜んだことだろう。

「いくら王でも、フラとロアアールの両方を敵に回すのは、得策ではないと判断すると思います」

「公爵様は、素晴らしい手腕をお持ちですね」

自分が頭でつかちであることを思い知らされるが、いい勉強をさせてもらったと、いまは考えよう。

レイシエスはそう考え、自分の中の血肉として、それらを取りこもうとした。

いつか必ず、この知識が役に立つことが来ると信じて。

「お役にたてることがあれば、いつでも私を呼んで下さい」

肩書こそ公爵ではないが、その男を一番側から見て来たスタッフアは、彼女に対して手を広げてくれる。

これは、本当にありがたいことだった。

「ありがとうございます」

許されるものならば、いま彼の頭の中にある全ての知識を得たいほどだ。

賢明な兄弟がいて、きちんと側に置いて育てるということは、こんなにまでも財産になるのだと痛感する。

彼女らの母が、もう少し賢明であれば、きっとレイシエスと同じようにウィニーにも学ばせたことだろう。

そうするべきだったのだ。

もし自分に不慮の事故が起きて、突然公爵を継げなくなってしまう時、ロアールはどうなってしまうのか。

それを考えると、フラの兄弟はどちらが公爵の地位についてもおかしくない教育をされているし、もし公爵が後継ぎがいらないまま亡くなるようなことがあったとしても、スタファはそこにしっかりと立つだろう。

母は、本当の意味でロアアールのことなど考えてはいなかったのだ。

ロアから嫁いできて、二人の娘を産みはしたが、あの領地の未来のことなど、本当に何ひとつ考えてなどいなかったのである。

外に出たおかげで、レイシエスにはそれがはっきりと見えた。

そして、故郷に帰った時、自分は母と対峙せねばならないということも、はつきりと理解したのだ。

ロアアールのために。

そして。

父に会わなければ。

どんな家庭教師よりも、父の身体の許す限り、語り合わなければ。スタファを前にしながら、彼女は心の中でそう決意した。

「何でも手伝いますよ……いえ、貴女が望むのであれば、全てを捧げますよ」

そんなレイシエスの決意など、決して知ることのないはずの男は、彼女の心を揺さぶる言葉を吐くのだ。

彼は――助けになる。

スタファという人間に、貴重な本以上の価値を見出してしまったのだ。

それは、何と抗いがたい感情だったか。

その貴重な人間が、自分からレイシエスに全てを捧げてくれると言っているのだから。

ロアアールのためにも、思わず掴みたくなる衝動を、彼女はこらえた。

この衝動の根元に、『弱さ』があるのだと分かったからだ。

彼のことを『助け』と思っている時点で、それは明らかだった。

少なくとも、母に対峙するための助けにしてはならない。

でなければ、『フラ』の影響を受けたロアアールの公爵と、吹聴されるかもしれないからだ。

あの母だけは。

どうしても、レイシエス自身が越えなければならない相手だった。

彼女は、心を落ち着けてからスタファをまっすぐに見た。

「もし、そんな機会があれば、その時はよろしくお願い致します」

遠まわしに拒む言葉。

すると、スタッフは一瞬笑みを消した後、より真っ直ぐに彼女を見つめ返して、こう言ったのだ。

「機会は『ある』ものじゃありません……『作る』ものですよ」

何一つ揺らぐ気配のない彼の黒い瞳は、本当に眩しく熱いものだった。

昔の話、未来の話

「あたくしも、はとこになりますわぁね」

フランスカ伯の奥方である赤毛の女性は、気だるそうにそう言った。

名は、ラーレ。

ウィニーの祖母の、妹の孫と言うことになる。

「お手数をおかけします、ウィニーと申します」

同じ赤毛ではあるが、自分とはまったく異なるタイプの女性だ。

色香が全身から溢れ出しているし、大きく胸元の開いた真っ赤な衣装に、毛皮のストールというセンスは、とても彼女には真似出来そうになかった。

動きや言葉も、非常にゆるやかだ。

応接室のふかふかソファに深く背を沈めたラーレは、向かいに座る自分を値踏みするように上から下に見つめる。

女としての価値に数字をつけられているようで、ウィニーは無意識に背筋をぴしッと伸ばしてしまった。

同じ赤毛であっても、生まれた国は違う。

ウィニーの恥が、ロアールの恥としてフラの人に伝わってしまったかもしれない。

ただでさえ、随分姉には王宮で迷惑をかけてしまったのだ。これ以上、ロアールの面目をつぶすようなことは、彼女には出来なかった。

ウィニーをひととおり眺めまわした後、ラーレは怪訝そうに首を傾げる。

「ちょっとフラにいない間に、公も随分趣味がお変わりになられたわねえ」

その言葉は、何と云えばいいか、本当に素直に口から出た音に感じた。

不快感をあらわされるわけでもなく、歓迎するわけでもなく、ただただ不思議に思えて仕方がないという響き。

ウィニーが、フラの正妃候補だと聞かされたのだろう。

そういう目で、彼女を値踏みしていたのか。

う。

すっかり、ウィニーは恥ずかしくなってしまった。

フラの公爵は、ただ彼女の願いを聞き入れる方法を考えてくれただけで、自分が彼の好みであるなんて思ってもいない。

そういうことを考えたことがなかった、というのが正直なところだ。

そうだよね、女性として気に入られたわけではないんだよね。

今更ながらに、ウィニーはちょっとへこんでしまう。

「チチェックは、本当に惜しいことをしたわねえ。本当に花のように美しかったのに」

寂しげにラーレが、窓を見ながら呟く。

ここにウィニーがいるというのに、すっかり自分の世界を構築してしまったようで、彼女はカヤの外だ。

ウィニーを見ているようで見ていないラーレは、社交的な意味で言えば失礼なのだろう。

しかし、彼女にはさっぱり悪気もなく、ただ自分流の時間や思考の流れを持っている人なのだろうというのは伝わってきた。

それに、いまはとても怒る気にはなれない。

ラーレが口に出した『チチェック』という名は、きっとあの人の名前だろう。

公爵の正妃でありながらも、この世にいらなかった人の。

彼女が口に出すということは、きっとタータイト家の親戚の女性だったのだろう。

ただ、ちょっと思った。

自分がフラに嫁いだら、今と同じ思いを、時々味わうのだろうと。

誰かが、チチェックという女性のことを惜しむ度に、その色を隠せない瞳でウィニーを見るのだ。

「あたくしね……チチェックだったからこそ、最後は身をひいたんでしてよ」

髪の毛を掴み合って、ケンカをしたこともありましたわ。

突然、彼女は自分世界から、とんでもない言葉と共に戻ってきた。

髪の毛を掴み合って!?

どういう状況だったのかと、ウィニーは驚きを隠せずラーレを見てしまった。

「側室にはなれたかもしれないでしょうけど、私は側室なんてまっぴらごめんでしたわ。チチェックも同じだったから、ケンカするしかなかったでしょう?」

「はあ……」

彼女に、どんな相槌を求めているのか。

いや、きっと相槌などどうでもいいのだろう。

要するに、昔フラの公爵の正妃の地位を、掴み合いをしてまで争ったことがあるのだとラーレは言っているようだ。

このゆるやかな女性が、どうしたら掴み合いが出来るのかは、やはりやっぱり想像がつかなかった。

チチエックという女性も、同じようにゆるやかだったのだろうか。

「二人の幸せな結婚なんて、見たくはないでしょう？ だから、あたくし都に旅に出ましたの」

神殿巡りの旅にかこつけた、観光旅行だと彼女は言う。

実際は、傷心旅行だったのだろう。

「神殿で今の夫と出会って、あたくし三秒で恋に落ちましたの。青銅の彫像かと間違えそうになりました。神殿の管理をさせておくには、惜しいほどですわ」

うつとりと、ラーレはその時のことを思い出す唇で、ため息を洩らす。

三秒。

ちょっと、公爵が不憫になる瞬間だった。

人の心が大きく動くのは、ほんの数秒でもありえるのか。

ウィニーには、それはよく分からなかったが、いまのラーレは幸せそうで何よりだと思う。

同時に、フラの女性はとても自分に正直なのだと分かった。

南長は、王太子にさえ逆らってみせたし、こんなゆるやかなラーレでさえ髪の手合わせまでする。

そこにいたくないと思ったら、どんな名目であろうとも、さっさと故郷を離れてしまう。

こうしてラーレを見ていると、他の方法もあったのではないかと考えてくるのだ。

『誰か私を助けて』ではなく、自分の意思で母から離れる方法が。

ウィニーは、母と髪の手合わせもしていない。

母親に面と向かって逆らってもいない。

フラの女性と比べると、物分かりのいいフリをした、弱い子どもであることを感じる。

ただ。

彼女は、王太子の手を噛んだ。

生まれて初めて、強いものに逆らった瞬間だった。

あの時の、がむしゃらな気持ちは、ウィニーの中になかったもの。

それは、間違いなく都に来て初めてわきあがった感情だ。

戦えるかもしれない。

夫ののろけ話を語り続けるラーレの前に、彼女はふとそう思った。

今なら、母と戦えるかもしれない、と。

ちゃんと戦って。

そして。

行きたいところに。

行けばいいのだ。

鞭と飴

レイシエスは、初めて王に会った。

王太子の謁見室よりも、10倍は大きく、そして厳めしい石作りの部屋だった。

彼女の予想よりも、もっと暗く重苦しかった。

王の栄光の華々しさを表すには、不似合いと言った方がいいか。

まるで、だだっぴろい牢獄を彷彿とさせる。

王は、ひとりひとりの公爵と、まずは謁見する。

一番最後のレイシエスに、ようやくその順番が回って来たのだ。

5公爵の地位に優劣はないが、順はある。

公爵の在任期間の長さだ。

父の代理ではあるが、父自身が来ていないため、ロアールは最後となる。

このまま、自分が公爵になったとしても、しばらくはこの順序で安定だろう。

王は、石段の上の古く美しい、しかし飾り気の少ない木製の椅子に腰かけて、レイシエスを見下ろしていた。

初めて見る彼女を、油断なく見つめているように思えた。

「拳の地の全てを統べるマイア・ロシスト・エージェルブ（大いなる拳の王）陛下。初めてお目にかかります。ラットオージェンの一の娘、レイシエス・ロアール・ラットオージェンと申します」

挨拶の口上は、これまでのどんな声よりも美しく朗々と発したつもりだ。

反響する自分の声に惑わされず、レイシエスはこの大きな仕事の一言目を、無事に乗り切ったのだ。

だが、緊張感や威圧感が緩んだ訳ではない。

肌がぴりぴりとするほど、王の視線が自分に注がれるのが伝わってくる。

「ロアールは、これまで通り未来永劫、拳の全てに忠誠を誓うか？」

強く低く、声で人の頭を地べたに抑え込むような声。

反発せずにはいられないような頭ごなしの言葉を、レイシエスはごくりと飲み込んだ。

何を言われるかは、一応前知識として理解していたつもりだが、王自身の口から出て来た厳しさは、どんな勉強でも理解できないもの。

そして。

この謁見室が、どうしてこれほど晴れやかでないのか、その理由がいま肌で分かった気がした。

ここでもしもレイシエスが、ほんのわずかでも従わない気配を見せたならば、この場できつと首を落とされるに違いない。

牢獄ではなく、処刑場のように感じたのである。

レイシエスは、ひとつ息を吞んで、しかし王を見つめ返した。

「これまでのロアアール同様の、忠義をお約束致します」

震えてはならない。

脅えは、一瞬にして気取られる。

ロアアールは、この拳の国の一部ではあるが、未来永劫ラットオージエン公爵のロアアールなのだ。

たった16歳のレイシエスは。

魂を賭けて、王と対峙してきたのだった。

ふらふらする。

ほんの短い謁見だったというのに、彼女は既に精根尽き果てた状態で、部屋のベッドにうつぶせに倒れた。

こんなみつともない真似をするとは、自分でも思ってもいなくて、侍女が周囲でオロオロしている。

「大丈夫よ……ウイニーを呼ん……」

腕で、何とか自分の上半身を持ち上げながら、レイシエスは無意識に妹を呼ぼうとして、はたと気づいた。

そうだった、と。

妹は、フラの公爵の計らいで、王宮から離れてしまったのだ。

元気な妹を見ることが出来ず、彼女は寂しい思いをした。

ウイニーを見れば、少しは気分が良くなるかと思った。

ようやくベッドの端に腰かけるまで身を起こすと、レイシエスはため息をついた。

部屋は静かで、そしてとても広い。

妹と再会するまで、味気ない時間が多くなりそうだ。

そんな彼女の元に、侍女が近づいてくる。

その手に抱えているのは、花がいっぱい詰まった籠と手紙だった。

「お戻りになられたらお渡しするようにと……」

差出人は――スタファ。

つくづく、女心の分かっている男である。

花も嬉しいが、いまは手紙の方が嬉しい。

レイシエスは、封を切った。

愛情の詰まった、バリエーション豊かな書き出しと、今日の謁見会をねぎらう言葉が並ぶ。

「まあ」

彼女が、つい声をあげてしまったのは、次のくだりだった。

『よくさえずる赤い鳥がいなくてお寂しいでしょう。別の赤い鳥でよろしければ、いつでも側に参ります』

赤い鳥とは、ウィニーのことか。

妹の不在を寂しがっていると、スタファも思ったのだろう。

その隙間に、自分が入り込もうと思っているのか。

くすくす笑いながら、レイシエスは彼が丁寧に手順を踏んでくれていることに気づいた。

ひとつひとつ、彼はノックをしてきているのだ。

レイシエスの心の扉の前で、じっくりと。

だからと言って、彼がただの大人しい男だなんて、彼女は思ってもいなかった。

スタファアの妹に対する言葉や態度を考えれば、彼は公爵よりも、もっと野趣溢れる男に見えるのだ。

それを押しとどめながらも、ノックをするような手紙は、レイシエスを微笑ませる。

彼女が許せば、あっという間に扉の中に飛び込んでくるだろう。

ノックの紳士ぶりが、まるで嘘のように。

微笑みを、最後には苦笑に変えてしまった。

心の中で、公爵になる自分と女の自分が向き合っている。

全ての利害の一致しないその二人が、自分に向かって甘言や苦言を投げようとするのだ。

公爵になる自分の方が、つい少し前まで確実に強かったというのに、今日は少し疲れたせいかな、女の自分の声をつるさく感じた。

それもこれも。

多分。

スタッフのせいだ。

御前会合

都は、明るく美しい春の日に包まれていた。

王と5公爵の御前会合は、晴れやかに進んで行くはずだった。

カルダは、一番末席のレイシエスを見た。

彼女は、無事に個別の謁見を乗り越え、ここにいる。

落ちついた様子に、彼は安心していただ。

アールの小うるさい話ぶりを、ニールの老公が一言で諫めた様子を見て、他の皆がわずかに笑みを浮かべる。

そんな、決まりごとのような流れを断ち切ったのは、王の側に大臣が寄ってきたからだ。

何か、急ぎの連絡が入ったらしい。

王は。

この御前会合を邪魔してまで近づく大臣を、冷たく見つめる。

会合と情報の重みを計りにかけ、もしくはだらない内容であれば、大臣であろうとも命をもって購^{あかな}わせるという瞳。

王は、心が狭い。

その分、周囲は何か何でも優秀であらねばならなかった。

大臣の決死の耳打ちに、王の眉が動く。

怒りではない。

どうやら、大臣の情報はとても重要だったようだ。

公爵たちは、みな緊張した。

御前会合よりも、重大なことと理解したからだ。

レイシエスは、この状況をよく分かっていないようで、ただ表情を変えずに座している。

王の視線が、こちらに戻る。

いや。

視線は——レイシエスに向かった。

「ロアアールの娘よ」

王は、重々しく唇を開く。

嫌な、予感がした。

まさか、と。

そして。

予感は、的中する。

「ラットオージエン公が……死んだぞ」

静まり返る議場。

全員が、レイシエスを見ていた。

ロアアールの鉄壁の盾が、死んだ。

レイシエスとウィニーの父が。

どうしてもう少し、生きておいででなかったのか。

弔意よりも先に、カルダは亡き彼を叱咤した。

レイシエスは16歳の女性で、公爵となるには未熟だ。

あの、異国との玄関口であるロアアールの守護を引き継ぐには、
まだまだ時間が必要である。

そして、ウィニー。

彼女は、必死に救いの手を伸ばしてきた。

母の呪縛から、逃れるために。

その手を、カルダは掴もうと決めたのだ。

きっと、ラットオージェン公であれば、カルダの希望を通してく
れるだろう。

その書状を、この都にいるうちに送るつもりだった。

だが、その受け取り先は、もはやこの世にいないのである。

どちらの娘にも時間が足りないまま、彼は死んだのだ。

「さて、何をするかな？」

凍りついた会合の空気を破ったのは、王。

5公爵の一人が死んだ事を、事務処理のように扱い、レイシエス
を見る。

いや、試しているのだ。

次の公爵である彼女に、たったいま父親が死んだことを聞かされ
た彼女に、ロアールを全て背負わせ、その上で答えさせようとし
ている。

カルダは、一息ついて目を閉じた。

事前に分かっていたのならば、話のひとつもおけただろうが、
いまや彼が出来ることは何もない。

ただ、レイシエスの聡明さを信じる以外になかった。

「か…緘^{かんこうれい}口令を……お願いしたく思います」

噛み合わせぬ奥歯を、無理矢理一度噛み合わせた一音目。

奥歯が、がちりと強く音を立てたことに、きっと彼女自身驚いていることだろう。

死を、隠せと。

レイシエスは、最初にそう願いだした。

「いつまでだ？」

「私が領に戻り、改めて死の報告をお送りするまでお願い致します」

5公爵とひとくくりにしたところで、各領地の役割はそれぞれ違う。

特に、ロアアールは別格だ。

他国に接するかの地は、力が弱まった時には必ず隣国の攻撃を受けている。

公爵の代替わりをした時などは、必ずと言っていいだろう。

彼女はすぐに領地に戻り、防衛の強化をせねばならない。

そのためには、父親が死んだという情報が他国に漏れるのを、いまは一秒でも遅くしたいと考えているのだ。

「いますぐ帰る気か？」

ふーむと、王はひとつ鼻を鳴らした後、多くの思考を巡らせているであろうレイシエスに問いかけるのだ。

謁見会の真つ最中。

まだ、王主催の晩餐会も終わっていないこの時に、である。

答えなど、分かりきっている。

「ロアアールの一大事は……この国の一大事でございます」

言った。

レイシエスは、言いきった。

カルダは、これから大変であろう彼女のことを案じながらも、少しの安堵を覚えていた。

ロアアールの魂を、しっかりと受け継いでいることは、王だけではなく他の公爵にも伝わったはずだ。

「この国の一大事であるのなら、上手くおさめてみせよ」

王は。

追い払うように、軽く手を振った。

「また2年後に、御前に参ります……」

レイシエスは――去った。

姉妹の決意

ウィニーには、二つの衝撃が襲いかかっていた。

ただただ退屈な日々は、その瞬間に一転する。

ひとつは、父が亡くなったという事。

それは、他の誰でもなく、わざわざ王宮を出て訪ねてきてくれた姉が、内々に伝えてくれた。

決して口外しないように、と。

すぐには、葬儀はあげられないと言うのだ。

「姉さん……」

目を真っ赤にしながら、ウィニーは姉を呼ぶ。

いまにも涙が溢れてきそうなのだが、いまのレイシエスを見ると、それを我慢しなければならぬのだと痛感したのだ。

もうひとつの衝撃。

それは、レイシエス自身の姿だった。

美しいドレスに身を包んでいた姉は、いまは見る影もない。

男の恰好をしているだけでも、驚きだというのに。

とろけるようなミルクティ色の髪は、ばつさりと短く落とされていたのだ。

化粧もしていないその姿は、精緻に整った顔の少年のようにも見ええた。

妹の驚きと悲しみの視線を避けるように、レイシエスは帽子を目深にかぶり直した。

「私は、一刻も速くロアールに戻らなければならないわ。けれど、謁見会の最中に帰ったと周囲に知られる訳にはいかないの」

誰にもレイシエスだと、ロアールの公爵の娘であると悟られないように、変装をして帰るのだという。

たった一人、護衛隊の隊長のみを変装させて伴うだけで。

「わ、私も！ 姉さん、私も帰るわ！」

髪を切れと言うのなら切る。

男の恰好をしると言うのならする。

故郷の一大事なのだ。

父が死んだ悲しさは、重く深くウィニーの胸にのしかかつてはく
るが、姉のこんな姿を見て、どうして一人で嘆いていられようか。

姉は、白くほっそりした指で、ウィニーの手を取ってくれた。

そして、ぎゅっと握りしめてくる。

「ウィニーには、王宮に戻って欲しいの」

返答は、意外なものだった。

「あなたは王宮でスケジュール通りの日程を終えて、それから皆と一緒に帰って来てちょうだい」

反論しようとするウィニーを、すぐにレイシエスは制した。

この国には、他国の間者が入り込んでいるだろうと。

その目をかわすために、レイシエスはこんな恰好をしたが、王宮からロアアールの影を消せば、疑われる可能性がある。

だから、姉の代わりにいて欲しいと言われたのだ。

誰かに聞かれたら、姉は部屋で伏せっていると答えればいいと。

他の公爵も、それで口裏を合わせてくれるという。

「ウィニーにしか……私の妹であるあなたにしか出来ない、重要な仕事よ」

ぎゅうつと、手に力がこもる。

痛いほどだ。

でも、でも。

ウィニーは、往生際悪く姉に追いつがろうとした。

「大丈夫。困ったことがあったら、フラの公爵様に相談なさい」

「姉さん！」

踵を返す姉に、手を伸ばす。

違うのだ。

自分が一人が残るのが、怖いのではない。

一人で行かせるのが、怖いのだ。

ロアールの隣には敵がいて、ロアールの屋敷には母という重しがあつて。

そんなところに、姉を一人で行かせてしまふのが嫌だった。

ここに、もう一つの手があるのに。

もう一つの身体があるのに。

姉の重圧を分かち合えない自身の足りなさ、こうして自分たちを引き裂くのだと知った。

それ以前に、自分から重圧から逃れ、引き裂こうとしていたではないか。

混乱する意識の整理もつかないまま、ウィニーは粗末な荷馬車に乗り込む姉を見た。

都に來た時とは、比べ物にならないほどその寂しい様子は、彼女をひとつしやくりあげさせる。

馬車は、あっさりと門を曲がって見えなくなり——ウィニーは、都にひとりきりのロアアールの娘となった。

姉の言いつけに、ウィニーは背かなかった。

速やかに王宮に戻ったのだ。

姉は、全てきちんと後始末を終えていた。

侍女たちは、みな強張った面持ちで、しかし唇は真一文字に引き結んでいる。

何も申しません。

そう、彼女らは決意を見せてくれているのだろう。

侍女たちの、出自はみなロアアールだ。

彼女らは、どんな領地の娘たちよりも、隣国の恐ろしさを知って

いる。

自分たちが漏らす、ほんのひとつの言葉が、己の故郷と家族を危機にさらすかもしれない。

それだけは決してしないのだと、心をひとつにしてくれているのだ。

いま、ウィニーが出来ることは、最後までここにすること。

二人分の食事が来たら、それぞれ半分ずつ食べる。

たった、それだけのことで、姉の助けになるのだ。

あと、時々王宮をウロつく。

自分を目立たせるためだ。

ロアアールには、赤毛の娘がいる。

先日の王太子の晩餐会で、十分顔売ってしまったようで、すれ違う人の誰もが『ああ』という表情で自分を見るのを感じた。

ロアアールの人間は、まだ王宮にいとアピールするためだったが、効果はてきめんのようだ。

寂しいのは。

フラの公爵から一度手紙は来たものの、忙しいのかまだ顔を見られていない。

スタファアなら、気楽に来られるはずなのに、顔も出さなかった。

そんな、物寂しいウィニーの王宮散歩中。

向こうから、一人で歩いてくる男がいた。

ウィニーは、足を止めた。

気づかれる前に、回れ右を。

と、思った時には、目が合っていた。

身を固くする。

こちらに向かっているのは——王太子だった。

王太子は赤毛がお好き？

逃げかけた己の身を、ウィニーは自身で強く引き止めた。

いま、彼女と共にいるのは、侍女のネイラー一人。

助けてくれる者は、いない。

いや、いる。

いるのだ。

だが、彼らはみなそれぞれの仕事で、ここにいらなかったり、多忙を極めていたりしていた。

そんな大事な人たちの、助けになりたいから。

だからこそ、ウィニーはここを自分一人で、きちんと乗り越えなければならなかったのだ。

脇へ一歩よけ、王太子が歩く道を開ける。

彼とこのまま、うまくすれ違えばいい。

だが、そんなことは、自分の希望による淡い空想であることくらい、もうちゃんと分かっていた。

だから、ウィニーはちゃんと心構えはしていたのだ。

何が起きても、驚いてしまわないように。

王太子の通過に合わせ、深く辞儀を表していた彼女の目の前で、やはり彼は足を止める。

視線を下げているウィニーには、目の前の男がどんな表情をしているのかは分からなかった。

ただ、おそらく彼女の記憶にある、不機嫌な表情であろうとは思っていた。

そんな彼女の目に、王太子の表情は映らなくとも、身体の反対側からずいと差し出された手は見る事が出来る。

手を取るという意味で差し出されたのではないことは、よく分かっていた。

何故ならば、ウィニーの視界にある右手には、いまだはつきりと歯型の形に内出血した痕が、ありありと残っていたからだ。

最後に会ったフラの公爵は、右手に包帯をしていたが、この男は隠すことよりも晒す方を選択したのか。

まるで、責めるように突きつけられるその歯型の手。

ここで、男性慣れした女性であれば——たとえばラーレであったとするならば『おいしゅうございましたわ』などという、ジョークでうまくかわせるのかもしれない。

しかし、ここにいるのはウィニーで。

これまでの少ない経験では、そんな言葉は思いつきもしない。

それよりも。

ウィニーは——自分の右手を差し出した。

短いながらに付き合ってきた王太子には、こちらの方がしっくり来るような気がしたのだ。

そして、こう言った。

「どうぞ、お噛み下さい」

目には目を、踏んだ足には足を。

では、噛んだ手には、同じだけの対価を。

フラの公爵も、彼女のために痛い思いをしたのだ。

こんなもの、ただ痛いだけではないか。

命に別条がある訳でもなし、ロアールの現在の危険に比べれば、ささやかな犠牲だ。

手が。

噛み痕のある手が、ウィニーの手首を掴む。

あっと思った時には、上に引き上げられていた。

見上げる形になった彼女は、そこでようやく王太子を視界に映すこととなったのだ。

黒い黒い髪の方こうに、灰色がかった緑の瞳が見える。

その中に、赤い髪が映っていた。

しかし、彼の表情は、ウィニーが予想した通りの不機嫌顔。

この男には、笑みというものは浮かばないのだろうか。

見ていると、掴まれた手はそのまま引き上げられていく。

王太子の口元へと。

踏ん張れ、私。

息がかかるほど、近くに自分の手がある。

彼の唇が開くのを、ウィニーは見ていた。

穏やかな開き方ではなく、獰猛な肉食獣のように歯がむかれていく動きを。

こんなこと。

なんでもな——がりっ。

やっぱ、痛い——っ!!

かくしてウィニーは、王太子、フラの公爵に続き、三人目の右手を怪我した者となった。

彼への対応を、ウィニーは間違わなかったようだ。

王太子は——最低でも同じだけの犠牲を相手にも強いるように見える。

人から与えられる害には、必ず同等以上が返されるのだ。

だからと言って、自分が人に与えた害についてはそのまま。

くつきりと残る王太子の歯型と、見るだけで痛い赤と青が広がりはじめる手の甲。

痛みを我慢しながら、ウィニーは声ひとつ出すものかと奥歯を食いしばった。

口は離れたものの、王太子はその手を離さなかった。

それどころか。

さつき噛んだばかりの手の部分を、わざわざぎゅっと強く握り直したのだ。

「……!!」

頭の真ん中に金属の棒を突き立てられるような、鈍く冷たい痛みが駆け抜けた。

それでも。

それでも、ウィニーは声は出さなかった。

だが、目だけは涙目になってしまふ。

どうしても、それだけは止められなかったのだ。

「屈した方が、楽ではないか？」

冷やかな言葉だ。

だが、おかしい言葉にも思えた。

何の力も持たない、こんな小娘一人屈させたところで、一体何になるというのか。

ウィニーの姉なら、分かる。

彼女は公爵になる人間なのだから、屈服させれば王となる者としてはやりやすいだろう。

痛みで頭の中が混乱しそうになりながら、そんな思考をウィニーは形にしてみた。

「何で私を……?」

息があがっているのは、痛みのせい。

だから、最後まで思っていることは形にならなかった。

おそらく、通じたはずだ。

彼は、手を離した。

代わりに、またしてもウィニーの髪を掴んでいる。

「赤い髪の女は……目ざわりだ」

王太子は。

赤毛がお嫌いらしい。

不協和音

彼は――王太子である。

現在の拳の王の、二番目の男子。

一番目の男子は、この世にはいない。

噂通りであれば、彼の母が他の女性から生まれたその子を、この世から消したということになる。

それが事実かどうかは、どうでもよかった。

個人の名はあるが、いずれ消える。

父が死ねば、彼はマイア・ロシスト・エージェルブ（大いなる拳の王）と呼ばれるようになるのだから。

だから、名前など何の意味もない。

彼が物心ついた時にはもう、自分が王太子になるべき立場だったため、ぼんやりとそんなことを思っていた。

それでも、まだ今よりは子どもらしい子だった。

「――様！ 悪いことをしてはなりません！」

幼少を後宮で過ごしていた彼を、名で呼ぶ数少ない侍女がいた。

若いごろころと太っていて、美しくはないが明るい女性である。

母は、嗜みと企みに忙しい女性だったため、躰と愛情を彼女に受けたといっても過言ではない。

嗜みにも企みにも興味のない彼女は、後宮の中で許される限り、彼をまつすぐに育てようとしてくれた。

彼女の結婚の噂が立った時、子どもながらに焦ったほどだ。

『大丈夫ですよ、私は、貴方様が立派に成長なさるまで、お側におりますから』

その言葉を信じた。

彼女だけは、疑う余地のない相手だと思っていた。

ある夕刻。

部屋に来るはずの彼女が来ず、彼は心配になって探しに出た。

後宮内にある図書室辺りにいるのではないかと思い、そこへ近づいた時。

『おやめ……下さい……』

苦しげな、彼女の声を聞いた。

ひどい目にあっているのではないかと、驚いて彼は図書室へと飛び込んだのだ。

抑えつけられた手。

乱れたドレス。

そんな彼女にのしかかっていたのは。

『後学のために見て行くか？』

冷たい目で自分を見ながらそう言った——父だった。

ここは、後宮。

王のための場所だ。

後宮に出入り出来る男は、王と王の子のみ。

そして。

後宮の女性は、全て王が好きに出来るのだ。

残酷な力による屈服の光景を、彼は茫然としながら見ていた。

自分に明るく優しく語りかけていたその口が、悲鳴をあげながらも決して自分に助けを乞わない様子を見ていた。

その日から。

王太子の中にある何かが、大きくねじれたのだ。

いまにして思えば。

彼は、その侍女のことが好きだった。

都に降る初雪のように、淡い淡い初めての思い。

周囲の誰とも似つかない、爛漫さを愛していたのだ。

だが、それが壊される瞬間を見た。

力で、屈させられる瞬間を見た。

彼女は――王太子の侍女を辞めた。

後宮から、下りたわけではない。

ただ、働く場所が変わっただけ。

王太子は、その女を二度と見たいとは思えなかった。

見る度に、心の中のねじれが大きくなっていくからだ。

しかし、彼女は特徴的だった。

ころころと太った身体のせいだけではなく、彼女は後宮に余りいない――赤毛だったのである。

だから、視界の端にほんの少しでもあの色が閃く度に、彼の心はねじられていった。

後宮を出る10歳になった時、彼はせいせいしたのだ。

もう二度と、彼女を見ることはないだろうと。

何故ならば、彼女は『王の後宮』の侍女だったのだから。

これから、王太子のために作られる『王太子の後宮』とは、まったく違う場所。

なのに。

15歳になって、初めて作られた彼の後宮に――彼女はいた。

『南長』などという肩書を背負って。

王太子のねじれた心は、その瞬間、更にねじきればかりにひねり上げられたのだ。

まるで、父の声が聞こえた気がした。

『好きだったんだろう？ おさがりで良ければくれてやる』

彼は誰も寄せ付けない己の部屋で、臍腑を抉られるかのように吠え、のたうつた。

父に対する憎悪が炎の柱のごとく吹き上がり、彼は己の室内で何もかもを破壊したのだ。

それから。

彼は、いまの王太子と同じ物となったのだ。

治世になど、何の興味もなくなった。

こんな世界など、荒れて乱れて殺し合えばいい。

反乱を増長させ、そうなるべく敵を積み重ねて行く。

女に対する考えは、乱れただれて、力でねじ伏せられる者は全てねじ伏せた。

侍女だろうが掃除女だろうが、目についた女は片端から弄んで捨てる。

ただし、その中に赤毛はいなかった。

南長以外の赤毛は、彼の後宮にはいなかったのだ。

だが、彼女にだけは決して触れもしない。

憎んでいる男のおさがりになど、絶対に手を出さない。

それが、彼の歪んだ自尊心だった。

そんな男が。

皮肉にも、赤毛の女と出会ってしまった。

まだ幼さが残り、古い型のドレスを着ている彼女は――一瞬、この世のものには見えなかった。

少なくとも、そこだけ古い時代であるかのように思えたのだ。

夕日に燃え上がる髪はなお赤く、慎ましやかな形のドレスも染め上げていた。

「夕日の精か？」

王太子は、ロマンティストではない。

もはや彼は、自分は何の夢も見er気もないと思っていた。

蔑むべき感情だとさえも。

そんな男が、その古めかしい光景を、ほんの一瞬だけとは言え、ゆめまぼろし夢幻のように思ったのだ。

だが。

彼女は、夢幻ではなかった。

人間だったのだ。

しかも。

「これは、お祖母さまが遺してくれた、大事な大事なドレスよ！

このドレスが時代遅れというのなら、私は時代になんか乗らなくてもいいわ！」

王太子である彼に、噛みついてくる女だった。

彼は、思ったのだ。

この誰の手垢にもまみれていない赤毛の女を、抱いて滅茶苦茶にすれば、自分のねじれた心の根元にある、あの暗い記憶を踏みつけられるようになるのではないかと。

赤毛の女など、この程度のもだったのだ、と。

それは、容易なことだと思っていた。

だが、彼に『今』残されているものと言えば。

その赤毛の女が脱ぎ捨てていった一揃いの靴と、フラの公爵の忌々しい指輪の石と——右手の噛み痕だけだった。

かわいいはとこ殿

「来るのが遅くなって、本当にすまなかったね」

カルダは、ようやくロアアールの部屋を訪れることが出来た。

これまで、何度も機会を作ろうとしていたのだが、気づいたら真夜中という生活が続いていたのだ。

レイシエスを抜いた御前会合は、今後のロアアールの協議で紛糾した。

2対2で、公爵たちの意見が、真つ二つになったのだ。

ロア（北）とアール（西）は、16歳の彼女には荷が重い。すぐさま、都から補佐官を派遣すべきだと主張し、ニール（東）とフラ（南）のカルダは、これまで通り不干渉の立場を取ったのだ。

『そちら側は、異国の脅威から遠いからそんな悠長なことを言うのだ！』

アールの公爵は、唾を飛ばしてそう主張した。

だが、カルダにとって、不穏なのはアールではなくロアだと思っている。

姉妹の母は、ロアの侯爵家の娘だ。

つながりが深い分、過干渉される可能性があった。

それらは、レイシエスの動きを縛る鎖になりかねない。

結局、会合ではそれぞれの意思をぶつけ合うだけの不毛なことになった。

王が、一言結論を出せば、ここまで紛糾することはなかったというのに。

逆に言えば、まだ王も干渉する段階ではないと思っているのだらう。

まずは、レイシエスの手腕を拝見——そう言ったところか。

カルダは、フラの意思を伝え、それに対する了承は得た。

それらの手配を済ませ、ようやく彼はウィニーの元に向かうことが出来たのだった。

気落ちしているのはよく分かった。

ソファに座るウィニーは、前のような明るい笑顔は向けてくれなかったのだ。

「手を……どうしたんだい？」

不思議なことに、膝に置かれた彼女の右手には包帯が巻かれていた。

カルダの右手と、同じように。

「あ……ちょっと……」

ウィニーは、もう片方の手で包帯を隠すような仕草で言い淀む。

とても、言いにくいことのようにだ。

右手。

そのキーワードに、カルダは嫌な予測が思い浮かんでしまった。

王太子だ。

カルダも王太子自身も、同じ場所に怪我をしている。

それに、更にウィニーが加わったとなると――犯人は、容易に想像がついてしまったのだ。

「王太子殿下に会ったのかい？」

「あの、廊下で鉢合わせになって……わ、私が差し出したんです。でも……こんなの何でもないですから」

包帯ごと握り締めるように、彼女は拳を作る。

その目は、脅えているようには見えなかった。

それよりも、悔しさがにじんでいるような気がする。

何に悔しさを覚えているのか。

正直、この時のカルダは、見誤っていた。

いや。

見くびっていた、と言った方がいいか。

王太子に傷つけられた理不尽さを、彼女が悔しがっているのだと思ってしまったのだ。

だから、次の言葉はカルダにとっては意外なものだった。

「私……姉さんの……ロアアールの助けになりたいんです」

必死な顔が、ぱっとこちらに向けられる。

その目には——王太子の『お』の字もなかった。

手の怪我なんて、本当に彼女にとっては何でもないことだったのだと、この瞬間に思い知らされることとなる。

ウィニーが王宮に戻ったのも、こうして右手を王太子に差し出したのも。

全て、姉や故郷のためなのだと信じている目。

赤い髪の少女は、明るくてフラの娘のように見える。

だが、彼女はロアアールの娘。

寒く厳しい雪の中で、この国を守護する血を引く者だ。

それを、ようやくここで自覚したのである。

彼女は、自分をロアアールの厄介者だと思っている節があった。

おそらく、ウィニーの母の態度がそう思わせていたのだろう。

救いを外に向けた手を、カルダは取ろうとした。

それが、彼女のためだと思ったのだ。

「私じゃ、大した助けにはならないかもしれないけど……は、早くロアアールに戻りたいです」

こらえきれないように、ウィニーはソファの上で小刻みに揺れる。

その仕草は、走りだしたくてたまらない子犬に見えた。

そう、子犬。

これから、どんな犬に成長するのか、まるで分からないその姿。

その気配に気づいて、カルダは彼女をじっと見つめた。

正妃にしようと、心に決めたのは冗談ではない。

彼女が望み、フラにその骨を埋める気であるのならば、男として、公爵としてそうするつもりだった。

だから、カルダは慎重に聞くことにしたのだ。

「おそらく……ウィニーの母上は、いい顔をしないだろう」

次の瞬間の彼女の表情は、痛々しいものだった。

決意の表情が強張り、少しの間だけ時間を止めてしまったのである。

どれほど、彼女の母が娘に傷を与えていたか。

それが、伺うまでもなく知れる。

だが、ウィニーはキツと目に力を戻した。

前よりも、もっともっと強い力の瞳で、彼を見つめ返したのだ。

「でも……怖くないです。王太子殿下より！ 怖くないです！」

この時のカルダは、あの歪んだ王太子に対して複雑な気持ちを抱いていた。

感謝すべきか、恨み言を言うべきか。

それが、問題だったのだ。

彼女にとって、一番怖いものの最上位は、王宮に来て変わってしまった。

最悪を見てしまったウィニーには、もはや母はそれ未満の存在に

なつたのである。

「ウィニー……私の正妃の話は、一度白紙に戻そう。思う存分、口アールに尽くすといい」

結局、カルダは心の中で、王太子に恨み言を言うことにした。

彼女を変えたのは、自分ではなかったのだ。

その事実だけ取っても、男として面白いものではなかった。

言葉に、ウィニーははっとした。

そして、一瞬赤くなつたかと思うと、その直後、急転直下で真っ青になつていったのである。

「おじ様……公爵のおじさま……わ、私」

ようやく、自分が向かおうとしている方向が、フラの正妃と同じところにはないのだと気づいた顔だった。

違ふのだと。

必死な目に涙をためて、ウィニーはその身を二人の間のテーブルの上まで乗り出してくる。

彼女が、よその国に嫁ごうと思った気持ちが嘘ではなかったことくらい、カルダにだって分かつていた。

ただ、いまの彼女に、それよりも重要なことが芽生えてしまった

のだ。

初めて故郷を離れたことで、ようやく外から客観的に見る事が出来たのだろう。

「ウィニー、故郷のために戦いたいと思う気持ちは、とても素晴らしいものだ。私のかわいいはとこ殿……私は貴女を誇らしく思うよ」

「ごめんなさい、ごめんなさい……おじ様。せつかくおじ様が……」

ひつくとしゃくりあげる彼女の鼻の頭は、顔色とは正反対に真っ赤になっていく。

「私の正妃となる未来が、なくなっただけではない。ウィニーなら、いつでも歓迎だよ」

手の中に入れようと思っていた小鳥が、飛び立っていく感覚を、カルダは少し寂しいものとして受け入れたのだった。

三つの派閥

レイシエスがロアアールに駆け戻った時——そこは既に、最悪の状況が出来上がっていた。

三つの派閥が出来上がって、睨みあいが続けていたのだ。

ひとつは、軍派。

これまで、彼らは父の従順かつ忠誠心厚い集団だった。

この領地を、いままで守りぬいて来た誇りもあり、彼らは今回の難問もまた、守護の姿勢は変わらない。

問題なのは、二つ目。

母派だ。

彼女には、政治的知識はない。

だから、軍を扱えるはずなどなかった。

そこで、母は最もやってはならないことをやってしまっていた。

己の故郷であるロアから、勝手に弟を呼び寄せていたのだ。

しかもレイシエスの叔父である彼は、自分一人ではなく、幾人かの政治に携わるものも同行させていた。

ロアの政治を、ロアアールでやろうとしていたのである。

これに、軍派は激怒したのだ。

当然である。

ロアアールの血が一滴も入らない者に、誰の許可もなく勝手に政治をさせようとしていたのだから。

更に、ロアに早馬を出し弟を呼ぶという、普通ならばあり得ない行為をしてしまったことが大問題だった。

どんな間者が見ても、公爵家に何かあったと教えるようなものではないか。

みつつ目は、これはレイシエスが想定していた派閥だった。

それは、公爵家の血を引く親戚たちである。

父が死に残された直系は、娘二人だけ。

しかも、母がひつかきまわしている事態を見て、とても安心して任せてはおけないと思ったのだらう。

結局、母はロアアールを危険に陥れながら、軍と親戚の2面と、ぶつかる真似をしていたのだ。

そんな紛糾する会議のど真ん中へ、レイシエスは帰りついたのである。

「ただいま戻りました」

ボタンと広間の扉を開けると、皆が一斉にこちらを向く。

半分は驚き、半分は顔を顰めているのが分かった。

「レ、レイシエス！　そ、その頭はどうしたの！？」

やつれた姿の母は、立ち上がりながら金切り声をあげる。

艶のなくなった栗色の髪に、やせた身体。

額に横皺をいく筋も刻みながら、大きな緑の瞳を見開いている。

その瞳には、今すぐにレイシエスを責めたてたいという心が、覗きこむ迄もなく浮かんでいた。

「人目を忍ぶために切りました」

脱ぐ暇もなかったマントを侍女に預け、男服のままで彼女は議場に進み出る。

母、ロアの叔父、見知らぬ男数人、軍の將軍が三人、そしてロアアールの親戚たち。

見まわして、面子をまず目に焼き付けた。

途中で立ち寄った軍の詰所で、このことは耳に入れていたが、本当にひどい状況だと噛みしめる。

せつかく人目を忍んだ事を、母が無碍にしたことには怒りを覚えていた。

「何という愚かなことを！ 伸ばすのに、またどれほどかかると思っているのですか！」

金切り声をあげる母に、レイシエスは「ああ」と胸が詰まる思いを抱く。

ロアアールの危機ともいえるこの状況で、そしてこの場で、母が言えるのはこの程度なのだ。

自分を産んでくれた人である。

愛を注いでくれたことは、間違いはない。

だが。

それとこれとは——別だ。

「母上とロアの叔父上様。あとロアからいらっしゃった方々……全員御退出お願い致します」

レイシエスは、言った。

男の恰好をしたところで、男になれるとは思ってもいない。

声も高いし、身体つきも隠せない。

けれど。

ここは、レイシエスが踏ん張るべきところだった。

ロアアールの公爵になるためには、ここで自分の足で立たねばならないところだったのだ。

もしかしたら、自分が第4の派閥となってしまうかもしれないけれど。

ロアアールの未来を賭けたこの場に、ロアの政治は必要ない。

それだけは、間違いないと確信していた。

「は、母に向かって、な、なんてことを！」

母は、卒倒せんばかりの大声をあげる。

大きく振られた頭のせいで、栗色の髪が幾筋も落ちるほどだ。

「レイシエス・ロアアール・ラットオージェンの名において、ご退出をお願い致します」

ロアアールの公爵に、なるのだ。

そのための勉強はしてきた。

そして、勉強だけでは公爵などには、到底なれないことも都でよく思い知った。

「次期公爵がおっしゃっているのだ……従うべきであろうな」

重々しく、老將軍が口を開く。

「それが当たり前の事だ」

ロアアールの親戚筋も、好機とばかりに同意する。

「私は、ここを一步も離れませんわ!」

母は。

椅子にしがみつくようにして怒鳴り散らし始める。

この場の誰の目から見ても、それは愚かな行為だった。

ただでさえ強情な気性が、父というよりどこを失って、精神的に疲弊したせいだろう。

そんな自分の行動を、まったく冷静に見ることなど出来ないでいるのだ。

「母上は、疲れておいでです……部屋までお連れしてあげて」

扉の前に控えている侍従たちに、レイシエスは一言を投げかけた。

「レイシエス!」

間髪入れず、厳しい叱責の声で名が呼ばれる。

心の根に染みついて来た、母の存在の大きさとこれまでの記憶が、いまにもレイシエスの足元を崩してしまいそうだった。

女物の靴でなかったのが、よかったのだろうか。

レイシエスは、ブーツの踵で床をしっかりと踏みしめていた。

都を出る時の決意が、今も自分を後押ししてくれている。

髪に、未練がなかったわけではない。

美しいドレスに、未練がなかったわけではない。

だが、レイシエスは王都で、『現実』に触れてきたのだ。

王や王太子、フラの公爵に他の公爵たち。

優しさなんて、ほんの一握り。

これから、茨の嵐が吹きすさむ、砕けた硝子の道を歩むこともあるだろう。

そんな現実の、ほんの入り口を目の当たりにしてきたのだ。

侍従たちが、遠慮気味に母に近づき、容赦なく払われているのを見つめながら、レイシエスは微動だにせずにいられた。

「姉上……出ましょう」

ロアの叔父も、さすがに分も理もない自分たちが、このまま議場

にいられるとは思っていなかったのだろう。

弟に諭され、ついに母は悔し泣きで泣き崩れた。

そんな身体を、侍従たちに抱えられるように連れ出されていく。

少しずつ遠くなる、母の涙混じりの恨み言が、ようやく聞こえなくなり、レイシエスはほっと吐息をついた。

「お騒がせして申し訳ありません、皆さま……では、始めましょうか」

いつもの癖で。

肩あたりの髪を払いかけた自分に気づいたレイシエスは、一度その指先を見詰めた後―― 一番奥の席に向かったのだった。

何だっていうの

ウィニーは、帰郷の途についていた。

謁見会の日程は、滞りこそあったものの全て終了したのだ。

往路と違っていているのは、馬車の中にいるのが彼女一人だ、ということか。

都にいた時間は、とても短かったはずなのに、とても長かったように思える。

フラの公爵やスタッフとの出会いは、とても素晴らしいものだった。

公爵からは、姉宛ての手紙を預かっている。

スタッフとは、最後まで顔を合わせることはなかった。

大事な仕事を頼んだと公爵が言っていたので、忙しくなってしまうのだらう。

あの二人と一緒にいる時が、一番幸福だった。

思い出すだけでも、胸の温かくなる時間。

だが、これからウィニーは不幸の場所に戻るわけではない。

そして、彼らとも永遠の別れではないのだ。

謁見会は、2年おき。

手紙だけではなく、また2年後に会えるかもしれない。

その時に。今年のようなただの小娘ではなく、もっという自分になつて、二人と再会したいと思つたのだつた。

だが、王宮に行くということは。

ウィニーは、右手を見た。

白い包帯に覆われたそこは、王太子に噛まれたところ。

また、彼と会うということである。

2年後には、ウィニーのことなど忘れてくれていればいい。

そう、ため息をつきながら、痛みを残す手を見つめるのだった。

ウィニーが、ロアールの屋敷に帰りついた時、想像していたこととしていなかったことの二つが起きていた。

想像していたことは、姉が陣頭指揮を取って、ロアールを守るために東奔西走していたこと。

まだ寒いこの地で、黒いマフラーを閃かせ、あの姉が本当に走っていた。

動きやすさを重視した、ズボンにブーツという出で立ちだ。

「おかえりなさい、ウィニー」

いまから出かけると言わんばかりの動きで、一声だけかけて姉が玄関から従者と共に飛び出して行くとする。

「あ、姉さん……私に手伝えることある!？」

慣れない姉の姿を、ぼけーっと見送ろうとしている自分に気づいて、慌てて呼び止めた。

ブーツの踵が、一瞬止まる。

「ありがとう。帰ってから話をしましょう」

一度振り返り、姉は嬉しそうに微笑んだ。

短い髪で少年のような出で立ちをしてはいるが、その笑顔はいままでと変わらない女性のものだった。

それだけ言い残すと、姉は身を翻す。

ウィニーは、わが身を振り返ってみた。

旅路だったため、シンプルな祖母のドレス姿だ。

わ、私もズボンにしようかな。

これでは、とても走りまわれそうにないからだ。

確かクローゼットに、ほとんど着ないまま押し込まれている乗馬用の衣装があつたはず。

そう記憶を呼び起こし、ウィニーは急いで部屋に戻ろうとした。

「レイシエス！ お待ちなさい！」

だが。

そんな彼女の平和な希望は、軽く打ち砕かれる。

母が二階から、姉を追って出てきたからだ。

レイシエスは、とつくに玄関を飛び出した後だというのに。

そんな母と、ウィニーはモロにはち合わせることになる。

うわあ。

心の準備は、してきたつもりだった。

だが、いざこうして母と向かい合つと、心が縮みあがりそうだ。

都へ行く前より痩せて顔色の悪い母は、ウィニーを見つけて驚いたように足を止めている。

そして、だんだんと表情を険しいものへと変化させていく。

よくある光景だった。

いきなり会つと、まず必ず母は驚くのだ。

赤毛が、何故この地にいるのか——どうして毎回それに驚けるのか、ウィニーには逆に不思議なほど。

そして、その赤毛を産んだのは自分であるのだと思い出し、険しい表情になるのだらう。

落ちついて。

ウィニーは、自分にそう告げた。

目の前にいるのは、王太子だと思えばいいのだ、と。

彼にいま、自分は睨まれているのだ。

「ただいま都より戻りました……」

王太子に、儀礼的な挨拶をするのと同じこと。

ウィニーの脳内では、王宮の廊下が流れていた。

この後、彼は不作法なことを言ったりしたりするかもしれない。

「お……お前など、戻ってこなければよかったものを」

金切り声は、廊下をつんざいて飛んでいく。

ぶるぶると言葉も身体も震わせ、変な汗さえ浮かべた王太子——
いや母は、明らかなる心の病が見てとれた。

その病的な剣幕に、侍女たちも近づけないでいる。

ウィニーは。

ひとつ深呼吸をした。

「戻ってまいりますよ」

前で組んだ両手に、ぎゅっと力を込める。

胸が、どきんどきんと跳ねるのを抑えるには、どこかに力を入れていないといけない気がしたのだ。

「だって、私はロアアールの人間ですもの」

髪の色が——何だっていうの。

5 5 + 6 0 + 6 1 + 1 5

乗馬服を着て、上から長いコートを羽織る。

ブーツに足を押し込んで、おさまりの悪い赤毛は後ろでしばりつける。

そんな格好で鏡を見たウィニーは——ちよつとがっかりした。

そこにいたのは、きりつとした貴族の少年というより、馬の世話をする坊や程度の子がいたからだ。

やはり、姉のようにはいかないのだと、鏡の中の自分を見ているとよく分かる。

姉妹揃ってこんな恰好をしているのを見られたら、あの母が興奮の余り卒倒しそうだ。

いまの母なら、本当にそうなりそうで冗談にならないが。

そんな母への心配も、彼女はやめることにした。

何かしようとする、母がどう思うか。

それをセットで考えてしまう癖が、すっかりついてしまっていることが、いいことは思えなかったのだ。

これからは、自分で判断しなきゃ。

そうしてウィニーは、ロアールの危機を越えるために、頑張ることを始めたのだった。

『想像していなかったこと』が、ついぞそこまで来ていることも気づかずに。

ウィニーが姉から与えられた仕事は、軍とのやりとりの手伝이었다。

侯爵家とは別に軍舎があり、レイシエス自身が頻繁に行き来するのが難しいため、その代行をウィニーが行い、話を聞いたり書類を預かったりするのだ。

まさか、いきなり軍に関わることになると思っていなかったが、姉の説明で納得もしたところがある。

姉は、これまで軍と関わりがほとんどなかった。

知識としても偏っているという。

内政の引き継ぎと軍の掌握の両方を、姉はやらねばならないのだが、寝る間を惜しんでも両方同時に全てを行うのは難しいため、ウィニーに補佐をお願いしたいというのだ。

特に苦手とする、軍方面を。

そう姉に頼まれたら、やったことのないことだからと言って嫌とは言えない。

大体、どんな仕事を頼まれたところで、どうせやったことはないのだ。

それなら、姉が苦手な分野を頑張るのもいいのかもしれないと、それを請け負ったのである。

ウィニーは、その手始めとして、馬術を思い出すことにした。

軍舎との行き来に、いちいち馬車で乗り付けるわけにもいかないし、徒歩だと無駄な時間がかかる。

最低限の護衛だけで行き来するには、馬が一番都合がよかった。

ズボンをはいた甲斐も、あるというものだ。

「お嬢様……乗り頃に育ってますよ」

厩舎から連れ出されてきたのは、鹿毛の毛並みのいい牝馬だった。

額に流れ星を持ち、前足だけ靴下をはいたように白い。

3年前に生まれた馬を、ウィニー用として父親から授かっていたが、自由に出かけられない環境だったため、ほとんど乗る機会がなかった。

「久しぶり、『靴下』」

小さく震えた声を出す自分の馬の鼻を、彼女は優しく撫でた。

彼女のことなど覚えてもいないようで、ぷいと顔をそむけられる。

本当は、馬の名前は『流星』とつけたかった。

けれど、余りに儚く消えてしまいそうで、ウィニーは彼女に『靴下』と名付けたのだ。

冷たい雪の日でも、自分を助けてくれるように、と。

「よい……しよっ」

助けも借りて、ウィニーは『靴下』の背に乗る。

久しぶりの馬上は、何もかもを高い位置から見せてくれる。

より冷たい風が顔を撫でる洗礼を、首を竦めて受けると、ウィニーは馬術のおさらいをし、カンを取り戻した。

もともと、家の中で行儀作法の勉強をしているよりは、こちらの方が性格的には合っている。

いままでは、好きなことをする自由がなかっただけ。

いや。

なかったと思いこんでいただけ。

ウィニーは、自分を縛っていた鎖を振りきるように、二人の護衛

と共に、馬を駆って軍舎へと向かったのだった。

「これは、ウィニーお嬢様」

三人の將軍は、みな年齢が高くがっしりした男たちだ。

一番若いアーネル將軍が、55歳。

見事に毛のない頭に、毛先が跳ね上がった鼻髭が特徴で、分厚い筋肉の上に一番背が高いため、迫力にかけては將軍随一だろう。鉦山夫の息子で、一兵卒からの叩き上げで將軍になった男で、非常に熱い男だと言われている。

一番長い將軍位についているのが、60歳のハフグレン將軍。

白い髭はもみあげから顎、鼻までつながる豊かなもの。その身には、随分と遠くはなつたが公爵家の血も入っている、由緒正しい家柄だ。智謀にすぐれ、他の二人の將軍に自然に筆頭として扱われている。

一番しぶとい將軍と言われているのが、61歳のレーフ將軍。大怪我を負い、三度瀕死をさまよいながらも生還した経歴を持つ。左腕はないが、両足のみで馬を操りながら大斧を振るう猛者だ。

強固な防衛を旨とするロアールらしい、どっしりと腰の据わった將軍たちだ。

その三人と参謀職の人間が集まる部屋に、ウィニーは初めて入った。

皆が、一斉に立ち上がって敬礼する。

視界も部屋も、むさくるしく大きな男たちのせいで、いつぱいになつてしまった気がする。

「ロアアールの危機に、帰りが遅くなつて申し訳ありません。軍議の内容を持ち帰るよう姉に申しつかけていますので、終わりまでここで待たせていただきます。みなさんは、どうぞ気になさらずに軍議をお続け下さい」

彼らの目からすれば、自分はどれほど小さく頼りない人間に見えるだろう。

覚えて来た言葉さえ、たどたどしく弱いものに思えてしまい、ウィニーは言葉の後半から頑張つて声を張った。

再び軍議は再会されたが、基礎のない彼女に分かるのは単語の断片だけだ。

静かに、しかし重々しく言葉を交わし合う老将たちの中で、自分ひとり浮いている気がした。

軍議の内容は、書記によって記録が取られている。

最後に、内容に相違がないか、その場の最高位の者（大抵は將軍）がサインをし、公爵家に届けられることになる。

届けるだけなのだから、軍の人間でも本当は構わない。

実際、これまではそうだったのだ。

しかし、今は平時ではない。

ウィニーに託されたのは、ただの配達員としての仕事ではなく、詳細を正確に素早く知ろうとしている心のあらわれであり、なおかつ、常に公爵家が軍人たちと心をひとつにしているという意思を示すものでもあった。

母が政治に口出しをして、内部分裂を引き起こしていたためにできた亀裂を、修復する意味もあったのだ。

軍議の1時間。

これほど静かに、ただ座っていたのは、ウィニーにとっては初めてだった。

あくび一つ出来ない緊張感だけが、彼女をずっと取り巻いていたのだ。

「では、お願い申し上げます」

三將軍のサインの入った軍議の記録は、ハフグレン將軍自らの手で、皮袋に入れられウィニーに渡される。

「はい、確かに受け取りました。必ず届けます」

その袋を抱えて軍舎を出た時。

ウィニーは、自分の喉がカラカラになっているのを、ようやく気づけたのだった。

想像していなかったこと

レイシエスが妹につけていた護衛の一人は、軍の下っ端ではない。彼女と軍とをつなぐ、軍の補佐官の一人である。

ウィニーと共に軍議に同席し、持ち帰ってきた書類の補足説明をしてもらったためだ。

妹からは、軍議全体の雰囲気を感じればよい。

公爵家の人間として、どう感じたか。

それは、軍の人間には決して語れないことなのだから。

「みんな厳しい顔で話をしたけど、落ちついていて心配ないように感じたよ」

妹は、一生懸命その場の空気を伝えてくれた。

既に、レイシエスが帰ってくる前に、本格防衛の初期配置はある程度終えられていた。

さすがは、老将たちだ。

公爵の采配なしで出来る限りのことは、何の指示を出すまでもない。

レイシエスは、妹の労をねぎらい、代わりに補佐官を入れて詳細

を聞こうとした。

「姉さん……」

しかし、妹は出て行こうとはしなかった。

少し戸惑いがちではあるが、その瞳をまっすぐにレイシエスに向け、彼女はこう言ったのだ。

「私、端っこで邪魔をしないから、聞いていてもいい？」

決意のまなざしだ。

少し前。

ほんのちょっとした隙間に、妹は言った。

『フラにお嫁に行くのは、やめにしたから』

刹那の彼女の気持ちを、きっとウィニーは知ることはないだろう。

温かい水が、自分の身の内を満たして行く感覚。

レイシエスは、独りで戦うつもりだった。

この寒い地を精一杯、守り抜く。

そんなレイシエスの冷たい手を——妹は取ってくれたのだ。

これまで、二人は姉妹であった。

だが、考えはまるで違うし、ロアアールの未来についても、違う方向を向いていた。

そんな妹の目が、こちらを向いたのだ。

大変な『いま』という時間だけでなく、この地のために尽くしたいという気持ちだが、レイシエスに届いたのである。

初めて、姉妹で同じ方向を見たのだと、彼女は深く感じた。

独りではない。

同じ血を持ち、同じ未来を見る一番近い同胞を、レイシエスは初めて得たのだ。

そんな決意を持った妹を、どうして執務の場から追い出すことが出来ようか。

学ぼうと、しているのだ。

自分がしている仕事が、一体どんな形をしているのか。

それを、己の血肉にしたいとウィニーは思っている。

レイシエスは、それを心の底から嬉しいと思った。

姉妹で手に手を取って、これからのロアアールを支えることが出来る。

そんな明るい希望が、彼女の心の中に芽生えた——というのに。

新たな問題は、その翌日には発生してしまったのだ。

「何と……いま、おっしゃったのですか？」

レイシエスは、震えそうになる唇に力を入れて押しとどめた。

彼女の執務の部屋にやってきたのは——母だった。

忙しいという理由で、出来るだけ早く出て行ってもらおうと思っていた矢先、彼女は恐ろしい話をしたのだ。

「ですから、ウィニーを王太子の側室としてあげます、と言っているのです」

何故、レイシエスが茫然としているのか、その理由さえ理解できないという風に、母はわずかに首を傾けながら、もう一度同じ言葉を繰り返した。

目元はすっかり落ちくぼみ、そこには妖しい生氣とは違う光をたたえながら、母はにこりともせずと言う。

「突然、どうしてそんな話になったのですか！」

反射的に、声を荒げていた。

今までの自分からは、信じられないほどの強い語調を母にぶつける。

この場にいるのは、母と自分とそれぞれの侍女のみ。

そんな閉鎖された内輪の空間で、レイシエスは即座に席を立ち、入口にいる母の元へと詰め寄ったのだ。

「まあ、何とはしたない言い方をするのでしょうか。レイシエス、あなたにはまだ作法の先生が必要なようですね」

「お母様、わたくしたちはラットオージエン公爵家の人間です。先祖代々の公爵の子女は、ただの一人も王族へ嫁いだ事はありません。この誇り高い風習を破るおつもりですか？」

次元の違う、まったく噛み合わない言葉を、お互いにぶつけ合う。

いくらかの不毛なやりとりの後、ようやくにして母は次のように白状したのだ。

「先日、王都からその旨の書状が届いたのです。お前は忙しそうだったので、私が了承の返事をお送りしておきました」

この言葉を聞いた時。

レイシエスの頭の中で、幾本もの細い何かがちぎれる音がした。

ブチブチブチ、と。

ヒステリックに絶叫しなかった自分を、この時ばかりはほめてやりたかった。

「なんて……ことを」

代わりに襲ってきたのは、めまいを伴う激しい頭痛。

「何を困ることがあるの？ どうせあの子がロアアールにいても、何の役にも立たないでしょう？ アールに嫁入りさせようかと思っ
ていましたけれど、この際、王族でもいいでしょうに」

何の罪悪感も含まれていない母の言葉を、レイシエスはゆっくりと追いかけた。

その先に、母がいる。

父を含めた先祖代々のロアアールの伝統に、何の価値も見出していない女性。

しかも、公爵の地位を受け継ぐレイシエスに、一言の相談もなくだ。

想像だにしていない出来事を前に、彼女はいつまでも茫然とはしていなかった。

側に駆け寄る侍女に、こう言った。

「侍従らを呼びなさい。母を自室に戻し、そこから決して出さないように！」

レイシエスは、ついにそう決断したのだ。

重要な会議の席に入れなければ、その内おとなしくなるだろう。

そう思っていた自分が、いかに愚かだったかを。

「レイシエス！？ 何を言っているの！？」

「お母様がなさったのは、ラットオージエン家に対する背任行為です。沙汰があるまで、決してお出にならぬよう！」

入ることを許された数人の侍従らは、おろおろと母とレイシエスを見比べる。

「連れてお行きなさい」

そんな侍従らに、レイシエスはピシャリと言いつけた。

鞭を振るわれたかのように、彼らは抵抗する母を執務室から引きずり出したのだ。

遠くなる自分への恨みごとの声を聞きながら、彼女は頭を抱えた。

想像もしていなかった、最悪の事態だ。

この忙しい時に、何てことをしてくれたのか。

よろめく足を叱咤しながら執務席まで戻ると、レイシエスは力尽きてそのままとんと座り込んでしまった。

召集

「召集？」

ウィニーは、格闘していた本から視線を上げた。

「はい、緊急の会議だそうです」

彼女についてくれている軍の補佐官は、静かにそう復唱した。

緊急の会議。

いい響きではない。

何か大きく事態が動いて、姉だけでは判断できなくなってしまうのだと、その言葉は語っているのだ。

そして。

その会議に、自分が呼ばれていることに、身が引き締まる。

姉が、期待をかけてくれている——そう感じた。

だが。

それは、少し意味合いが違ったのだった。

親族と、筆頭のハフグレン將軍のみが侯爵家に召集されていた。

この時期、防衛に奔走している將軍全員を、ここに集めるのは大変なのだろう。

議題は、『公爵夫人の処遇』だった。

公爵夫人、それは母のことだ。

会議で大暴れした件だろうか、ウィニーは前に聞いた話を思い出していたが、そんな悠長な話ではなかった。

「母が、妹を王太子の側室に欲する書状に、相談なく了承の返事を送っていました」

目の前が真っ暗になるとは、このことだ。

上から下まで大変な口アールに、そんな悠長な書状を送ってくる王族も王族だが、勝手に答えた母も母である。

しかも、あの王太子の側室に、だ。

これぞまさしく、『想像もしていなかった』事である。

頭を軽く振って意識を取り戻すと、ウィニーははっと周囲の様子を見た。

親族もハフグレン將軍も、苦々しい表情を浮かべている。信じら

れないと、頭を左右に振っている者さえいる。

だが、同時にウィニーはホツとしたのだ。

姉の出した議題が『公爵夫人の処遇』だと、最初に知らされていたおかげである。

母のこの身勝手な所業を称える意味合いは、そこにはない。

むしろ、逆。

すなわち、姉はこの事態により、母を処断しようと考えているのである。

あの母を。

議場に召集されている者たちの表情を見ても、それは明らかだ。

誰ひとりとして、ウィニーが王太子の側室に上がることを望んでいる者はいなかった。

「母にはこの屋敷を出て頂き、南の静養地にて隠居させようと考えています」

言外に、公爵夫人としての全ての権利を剥奪すると含んでいる。

これまでの母の行動は、目に余るものがあつたのだろうが、これがとどめとなつたのだらう。

誰ひとりとして、姉の言葉に異論をはさむ者はいなかったからだ。

この家から、母が出て行く。

それは、ウィニーにとって驚天動地に等しいことだった。

母は、永遠にここに住むだろうと彼女は思っていたし、普通ならばそれが揺らぐことはなかっただろう。

しかし、あの冷静な姉がこんな決断をしてしまうほど、ひどい状態になっているのだ。

正直に言おう。

ウィニーは、姉の決断が——嬉しかった。

実の母を追い出すと言われて喜ぶ娘など、親不孝者以外の何物でもない。

しかし、姉が初めて自分を守ってくれたのだ。

これまで、二人は母の支配下にあった。

その支配の鎖が、ついに断ち切られたのである。

それを、どうして喜ばずにいられようか。

そんな姉の愛に応えるには——姉とロアールに尽くすしかない。

ウィニーは、そう心に強く決めたのだ。

「都には、私から母の書状の取り消しを、急ぎ送ることとします」

満場一致で母の処遇が決まった後、姉はウィニーの方を一度見てから、しっかりとした声音でそう言った。

『あなたを、王太子の側室に送ったりしません』

そんな頼もしい声が、聞こえてきそうだ。

それで、全てが丸く収まったかに、見えた。

親族でありながら、軍属でもある者が手を上げて、発言を求めるまでは。

「しかし、我々は初期防衛体勢の完了後、公爵閣下の死を都に正式に知らせると同時に、イスト（中央）に援軍を要請する予定のはずです」

ここまでの話は、ウィニーも把握している。

ほんの少し前に、軍の補佐官から説明を受けていたのだ。

援軍を要請したということを内外に示すことにより、異国に対する牽制をするのだと。

「その事も考えると妹君の件の返事は、すぐに断られるよりも、しばし濁して延ばされたらいかがかと」

要するにさつさと断ってしまうと王が不快に思い、援軍をしづられる可能性があるので、ロアールが落ち着いてから正式に断る方

がよいと進言しているのだ。

もったもな話をしているようで、ウィニーにはいい策には思えなかった。

何故ならば。

王太子という人間を、間近で見たからだ。

向こうは、こちらの内情を知っている。

なのに、父が死に、地域の安定に奔走しているこんな大変な中、側室などというふざけた書状を送りつけてきたのだ。

絶対、わざとだとウィニーは確信していた。

自分がそう思うのだから、聡明な姉ならもっと強くそれを感じているに違いない。

ぱっと姉の方を見ると、彼女はゆっくりと机の上でその細く長い指を組んだ。

「それとこれとは、別です」

凜と、声が議場に響き渡る。

「妹が側室に上がるのが上がるまいが、この国にとってロアアールが防衛の要であることには揺らぎありません。ロアアールが崩れれば、この国の安寧など決して訪れないのですから」

幼稚な嫌がらせで、国を滅ぼす馬鹿などいない。

誰もが異を唱えることのない論理に、室内は水を打ったように静まり返る。

そんな中。

ウィニーの脳裏に、あの王太子がよぎった。

幼稚な嫌がらせで国を滅ぼす馬鹿。

ウィニーの中では、彼がその形容詞に一番ふさわしい男だった。

因果

「隣国からの侵攻が、始まりました」

母についての処理が終わるや、レイシエスの元に軍部からそう伝令が入った。

都に、四つの書状を送ったばかりだ。

一つは、母の返事の訂正。

二つ目は、父の死の正式報告。

三つ目は、援軍の要請。

最後は、レイシエスの公爵就任の認可を求めるもの、だ。

「分かりました。皆に喪章をつけるように通達して下さい」

もはや、領民にも父の死を隠す必要はない。

民も軍人も、みな喪章をつけて、父の死を存分に悼むのだ。

ただし、軍人はその手に剣と盾を持っただけ。

黒い腕章をしたロアアールの兵士たちは、その出で立ちのままで敵と戦うのである。

正午には、全ての町で悲しい鐘を打ち鳴らす手はずは整っていた。

その鐘が鳴った後、やっと父を埋葬することが出来る。

山の雪を集め、その中で凍ったまま眠る父を。

本来、公爵であれば壮大な葬儀が行われて然るべきだ。

他の地ならば、おそらくそうだろう。

しかし、ロアアールの公爵の死は、外交的駆け引きの重大な材料でもある。

悠長に葬儀に時間をかけられないのは、この地の公爵になった日から、先祖全てが理解していることである。

父も、そんなことで恨み言など言うことはないだろう。

そして、いつかレイシエスもそうなるのだ。

母は既に、この屋敷にはいないため、ウィニーと二人で見送ることとなる。

初めての戦い。

まだ、軍を掌握するという意味では、レイシエスもウィニーも知識・人徳の両方が足りていない。

そんな中、不安にならずにいるのは難しいだろう。

だが、妹はいま懸命に勉強をしてくれている。

軍事方面の家庭教師を、つけて欲しいとまで頼まれたのだ。

幸い、護衛の補佐官が、その任を買って出てくれた。

いま、常に妹に随行しているだけに、最適任者だろう。

苦手なもののひとつを、妹が請け負ってくれたことは、レイシェスの不安をほんの少し軽減してくれる。

これをきくと、『心強い』というのだろう。

足りないものを、姉妹で必死に埋める。

問題は、時間の神がそれを許してくれるかどうか、だ。

いま現在、侵攻が始まったのは事実。

前の侵攻を知る將軍たちが揃っているとは言え、この世に絶対はない。

こちらが必死なように、向こうもまたロアアールを突き崩して、鉾脈豊かなこの地を手に入れようと命を賭けて侵攻してくるのだ。

カーン、カーンと領地に鐘が鳴り響く。

正午だ。

父の死を告げる鐘の音だ。

レイシエスが、音を見ようと窓の方を向きかけた時。

せわしないノックに意識を取られる。

「火急の書状を、お届けに上がりました！」

鐘が鳴り終わらぬ中、それは届けられた。

これは、何の因果だろうか。

レイシエスは、書状を握りしめたまま、もはや鐘の音もしない静かな空を見上げた。

過去、ロアアールを作ってきた人たちも多く関係しているだろうし、彼女が都へ行ったことも関係があるだろう。

勿論、ウィニーも関係しているし、そう考えれば、あの母や父、祖母もその因果に入っている。

書状の差出人は、カルダ・フラ・タータイト。

フラの公爵だ。

王の認可も入っているその書状には、フラからの援軍三千が、すでにロアアールとロアの境界にて、待機中である旨が書かれていた。

援軍を率いているのは――スタファ・フラ・タータイト。

この書状に書かれている事務的な文字は、レイシエスに実に多くの事を考えさせた。

これほど早く、フラから援軍をロアまで移動させるには、相当な時間がかかる。

王の裁可も、本来であればこんなに早く取することは出来ないだろう。

ということは、フラの公爵はまだ王都にいる内から、この手はずを整えたに違いない。

レイシエスが、ロアアールに帰った後すぐに、御前会合で進言したと思えなかった。

そしてスタファ。

彼もまた兄の命によって、すぐに動いたのだろう。

過去のロアアール遠征の時のように、騎馬隊のみで編成したに違いない。

ああ、ああ。

人の顔が、レイシエスの脳裏を巡る。

フラの公爵、スタファ、祖母、ウィニー。

そして、頼もしいロアアールの將軍たち。

戦いに、絶対はないとレイシエスは分かっている。

なのに、どうしてか。

心強い味方のおかげか、ないはずの『絶対』がそこにあるように思えてしまうのだ。

レイシエスは、入り口に控える伝令に向かって、ゆっくりと振り返った。

「フラの援軍の、入領を許可します」

喪章の数を――増やさなければ。

赤い援軍

炎が走る。

小高い丘の上から、ウィニーはその光景を見降ろしていた。

赤い鎧と兜の騎兵たちが、整然と、そして力強く馬を駆っている。街道を長く流れてゆく姿は、火を噴く山から流れ出る溶岩のように見えた。

白と灰色の多い地であるロアアールには、余りに眩しすぎる色だ。

あの赤い軍隊を率いているのが、スタファだという。

姉に聞いたその言葉は、最初は信じられなかった。

だが、同時に理解もしたのだ。

どうして、都で彼と会う機会がなくなったのか。

あれほど構ってくれた人だっただけに、挨拶もせずには別れるのは寂しい気持ちがあった。

しかし、彼はそんなウィニーの感傷のはるか上を走っていたのである。

ロアアールを、助けるための援軍を準備する。

勿論、それはフラの公爵による指図なのだろう。

そして——ウィニーは姉より先に、彼と再会したのだった。

「スタファア兄さん！」

「おっと、ウィニーか。随分勇ましい恰好だな」

ウィニーは笑顔、スタファアはニヤッと笑った顔で向かい合う。

軍舎の入口で、彼女は隻腕のレーフ將軍と彼を出迎えた。

嬉しさを隠さずに近づくウィニーを、一度見直すように顔の向きを整えて、彼は大げさに驚いたような声をあげた。

勇ましい。

乗馬服だったウィニーは、ズボンの替えも少なかったこともあり、灰色の軍服を着ていたのだ。

厚めの生地、重めのブーツ。

本来は、この上に軍の青いコートを羽織るのだが、ウィニーは自分でも信じられないほど青が似合わないため、コートはなしだった。

ただ、これでは従者と勘違いされるおそれもあり、はつきりと区

別するために、深い緑のスカーフを首に巻いていた。

後ろから見たらスカーフは分からないはずだが、これまでウィニ―はただの一度も従者と勘違いされたことはない。

おそらくそれは――この髪の色のおかげだろう。

ロアールには、ほとんど見ることもないオレンジがかった赤い髪。

公爵家には、赤毛の娘がいる。

その話が、有名だったのかどうかは知らないが、その髪を見るや、皆が道を開けてくれるのだ。

そんなウィニ―の前に、赤毛の男が立つ。

彼だけではない。数多くの赤毛の兵が、ロアールに入ったのだ。

今後、どちらの軍の者も、彼女のことは赤毛と軍服の色の二種類で見分けなければならぬだろう。

「タータイト公爵名代閣下、遠方よりの援軍、痛み入ります」

二人の会話がひととおり終わると、レーフ将軍が恭しく挨拶に進み出た。

「レーフ将軍ですね……噂はかねがね。先の防衛では、ご活躍だったそうですね」

「負け戦が得意な将というものは、活躍してはならないものですよ」
スタファの言葉は、重々しく返される。

先の防衛。

ロアアールで、前回大きな防衛線が起きたのは、父の代替わりの時――20年ほど前の話だろう。

そんな昔の戦いを、スタファは資料でも学んできたのか。

その時も今回と同じように、フラも援軍で参戦したのだから、かの南の地にも遠征時の資料はしっかり揃っているだろう。

レーフ將軍の腕が、いつからないのかはウィニーは知らない。

安寧を勝ち取るために落とした腕。

将たちは、命とを張ってこの地を守りぬいてくれているが、ウィニーがそのひとりひとりのことまで知っているわけではない。

軍の服を着ているのが、突然恥ずかしくなった。

こんな恰好をしても、彼女が前線で命を賭けることなどないのだ。

ロアアールと命運を共にすることしか、いまのウィニーに出来ることはない。

「今回は、あなたの得意な仕事をさせないために、我々が来たので

す」

スタファアは笑みを消し、表情を引き締めた。

その精悍な顔つきは、一瞬にして五つほど年を増やした気がする。

「フラの軍がつけば百人力ですな……ですが、そちらと共に戦うのはアーネル將軍になる予定です」

ロアアールの防衛の中でも、一番の攻撃力を誇る将が挙げられる。

特に、勝ち戦の追撃戦にかけては、鬼神の才を発揮するという。

攻撃にすぐれると噂のフラの軍は、そちらと共に戦うのが効果的だろう。

「統率のハフグレン將軍、盾のレーフ將軍、矛のアーネル將軍、です」

「本人は、残念ながら盾は持てませんがね」

スタファアの褒め言葉に、レーフ將軍はにやりと口の端だけで笑いながら、腕を広げて見せた。

彼にあるのは、右腕だけ。

そちらで戦斧を振るうために、盾は持てないのだ。

そんな黒い冗談で、男二人は笑みを交わし合う。

ウィニーには、言葉を挟みづらい空気だった。

「では、もしかしてレーフ將軍が預かる部隊は……」

笑みの最後に、スタファの言葉が懸念めいた色に変わる。

將軍もまた、苦々しく頷いた。

「まあ、そうなるでしょうな」

男二人、一度見つめ合って、小さく息を吐いている。

「残り一本の大事な腕は、お渡しにならないよう」

「そうになったら、さすがに引退でしょう」

彼らの会話は、やはりウィニーにはよく理解出来なかった。

頭痛の種

レイシエスは、執務室で頭の痛い書状とにらめっこしていた。

次から次へと、どうしてこう面倒ごとが数珠つなぎでやってくるのか。

いや、これはある程度予想はしていたことだ。

ただ、早過ぎるのと——悪すぎるのと、両方の要素が想像より遙かに上回っていたのである。

おかげで、スタッフアの出迎えをウィニーに任せることとなつてしまった。

正式な会見は、公爵邸で行うことになっているので、予定通りならこちらへ向かっている頃だろう。

そんな苦悩のレイシエスの元へ、スタッフアの到着の報が届けられる。

執務室の席を立ち、玄関まで出迎えにいくべく歩き出す。

何もかも変わった自分を見て、彼は何と言っただろう。

喪中のため、黒い上着に黒いズボン、さらに胸元には黒いリボンと、黒黒ずくめな上に、ばつさりと切った髪。

ロアアールの女性として、一番華美な自分を見せていた人に、今

度はこんな黒狐のような姿を見せることとなるのだ。

玄関の扉の内側に立ち、レイシエスはそれが開くのを静かに待った。

心が、騒ぐ。

忙殺の日々に、自分の心や身を振り返る暇もなく、全力で走ってきた自分がいま、足を止めて待っているのが分かる。

侍従らによつて開けられる扉から――男は現れた。

濃いオリーブ色の軍服姿の彼は、一瞬レイシエスを見て、ぴたりと足を止めた。

しかし、表情は変えないまま、すぐに軍靴を鳴らして近づいてくる。

「ラットオージェン公爵代理閣下……再びお目にかかれたこと、光栄に存じます」

女性に向ける優しげな柔らかさを、いまのスタファは隠していた。

もし、これが初対面であつたならば、レイシエスは彼という人間を誤解していたかもしれない。

ただ、その瞳だけは。

前と変わらぬ温度と色で、自分を見つめていた。

彼女の姿が変わることなど、何の意味もないのだと言わんばかりに。

「タータイト公爵名代閣下、遠路はるばるの増援、心より御礼申し上げます」

それぞれの家名を背負った、堅苦しい挨拶の物陰から、ウィニーが顔を出す。

少年のような姿の妹がスタファの側にいると、まるで兄弟のようだった。

しかし、ウィニーは妹——女性なのだ。

女性だからこそ、起きた事件もあった。

レイシエスは、一度瞳を伏せ、そして改めてもう一度、二人の味方を見つめる。

「執務室で、二人に聞いて欲しいことがあります」

彼らには、面倒事の話をしておかなければならなかった。

「都からの増援が、ロアールへの入領確認を申し出ています」

レイシエスの言葉を、妹はぼかんとした顔で聞いていた。

スタッフは――わずかに眉を陰しくさせている。

「早過ぎますね」

一番分かりやすい不審点を突かれ、彼女はそれに頷く。

そう、早過ぎるのだ。

援軍依頼もしていないのに駆けつけてくれたフラとは違って、都では準備こそしていたにせよ、レイシエスの送った書状が届いてから出撃するはずである。

おそらく、まとめて送った書状は、今頃都に届いているだろう。

なのに、援軍はすでにロアアールに向かっているというのだ。

それもそのはず。

「入領を申し出ているのは……王太子殿下率いる近衛軍です」

瞬間。

執務室の空気は、見事に温度を下げた。

ウィニーの表情は固まり、スタッフの表情は一瞬にして不機嫌なものへと変わる。

そんな彼の唇が、悪態でもつきたいかのように、一度開いて閉じる。

舌打ちひとつこぼさなかったのは、彼の自製のたまものか。

「役に立たない兵を送ってきましたな」

代わりに、現実的で辛辣な返答が溢れ出す。

「ええ、本当に」

レイシエスの書状が届くより先に、王太子が動いてしまった。

しかも、連れてくるのはそう数の多くない近衛軍である。

王家の直属の軍だが、前線を知らない王家の守護軍だ。

ほとんど、王太子のおもりのようなものだろう。

「おそらく、私の書状が届いたら、改めて都の正規兵が援軍として送られてくるでしょうが……」

「書状が届いていないのに……来たの？」

ウィニーは、驚いた顔でレイシエスの言葉に割り込んできた。

「ええ……そう。あなたを側室にあげないという書状も、届く前に出撃しているでしょうね」

姉妹で、視線をぶつけ合う。

妹の目にあるのは、困惑と不安。

それらを何とか押さえているようで、その唇はきゅっと引き結ばれている。

「側室……？」

スタファの目が、微妙な色合いでウィニーに向いた。

何というか。

それは、何とも理解しがたいものを見る瞳の色だった。

「……！」

妹は、彼の視線に失礼な意図を汲んだのか、唇をとがらし気味に睨み返した。

そんな光景に、ふっとレイシエスは肩の力が抜けて笑みを浮かべていた。

こんな厄介な事態だというのに、二人の仲の良さが、こうして彼女をなごませてくれるのだ。

「ともあれ、断ることは出来ないでしょう。王太子殿下自らが、ロアールの援軍の長となるのですから」

役に立たない先行軍の、接待をしている暇はレイシエスにはない。

かと言って、王太子を前線に出すわけにもいかない。

更に言えば、王太子はスタファ同様に、この公爵家に部屋を用意して泊めなければならぬだろう。

ウィニーも住む、この屋敷へ。

厄介な要件が揃い踏みであるが、偶然ではない。

あの男が、わざわざ自らかき回しにきたとしか思えなかった。

「ハフグレン將軍に、預けられるのがいいでしょう」

スタファは、建設的な意見を出してくれた。

筆頭將軍は、一番前線には出ない軍を率いている。

王太子を危険から遠ざけ、ある程度制御するには、かの將軍くらいでなければ難しいだろう。

「そうですね。後から国軍が来た場合は、レーフ將軍に預ける予定ですから、そうするのがバランスがいいでしょう」

防御上手の將軍の名を挙げると、スタファは苦笑を浮かべた。

「まあ、都の軍の方も……近衛軍よりマシ、程度でしょうがね。レーフ將軍に同情しますよ」

父が公爵を継いだころの防衛戦時、一番勇猛果敢に戦ったのがフルの軍隊であるならば、一番弱かったのが国軍だったのだ。

前線を知る者が少なく、撤退戦さえまともに出来ず、防御地域を

深く挟られそうになったのだ。

レーフ將軍は、その当時は国軍と行動を共にしていた防御部隊の士官で、撤退のしんがりを務めた時に片腕を失ったという。

隻腕の將軍への同情に、レイシエスはまっげだけで答える。

そして、妹へと向き直った。

「ウィニー……また困難がやってきますが、一緒に乗り越えていきましょう」

言葉に、妹はぴりつと表情を引き締め、背筋を伸ばす。

「姉さん、私、ちゃんと立ち向かえるから……大丈夫だから！」

ウィニーは力の溢れている自分を見せるように、両の手を握って見せる。

都に行つて、妹は強くなった。

レイシエスは、それを実感する。

可愛かっただけの妹の殻が、いい意味で頑丈になっていく。

まるで、さなぎになるかのように。

最後には、どんな女性になるのか——レイシエスは、自分のこと以上に妹の未来の姿が想像できなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2062w/>

南の海を愛する姉妹の四重奏

2012年1月8日20時51分発行